平成30年度

NIE実践報告書

Newspaper in Education

第30号

教育に新聞を

宮城県NIE委員会

宮城県ＮＩＥ委員会実践報告書

＜第３０号＞

＝＝＝＝ 目　次 ＝＝＝＝

Ⅰ　あいさつ

ＮＩＥ活動への期待　宮城県ＮＩＥ委員会　会　長　志小田美弘・・・・・1

新聞が持つ魅力　宮城県ＮＩＥ推進委員会　委員長　小石　俊聡・・・・・2

Ⅱ　寄稿

新聞に親しんでもらうことから　宮城県ＮＩＥ委員会事務局長　鈴木　淳・・・・・3

ＮＩＥ活動の支援に向けて　宮城県ＮＩＥ委員会　副会長　吉木　修・・・・・4

Ⅲ　研究実践報告

１　実践指定校報告

（１）視野を広げ、進んで学び合う力を育てるためのＮＩＥ
～ＮＩＥへの取組から、社会的事象に関心を持たせる～
聖ウルスラ学院英智小・中学校・・・・・5

（２）仙台市立館小学校におけるＮＩＥ１年目の実践報告　仙台市立館小学校・・・・・8

（３）新聞に興味を持ち、進んで親しむ児童の育成
～国語科の授業づくりの工夫を通して～　南三陸町立戸倉小学校・・・・・10

（４）ＮＩＥと連携したシチズンシップ教育の推進
～新聞を利活用し、社会に目を向ける生徒の育成～
宮城県宮城広瀬高等学校・・・・・12

（５）新聞に親しみ、読解力を高めるＮＩＥ　登米市立豊里小学校・・・・・14

（６）新聞に親しみ、考え、判断し、自発的に活動する児童の育成
仙台市立八木山小学校・・・・・20

（７）視野を広げ、語彙力・読解力を高めるＮＩＥ　登米市立豊里中学校・・・・・26

（８）新聞作成を通して社会の課題解決を探究する　宮城県仙台三桜高等学校・・・・・32

（９）自分の考えを相手に分かりやすく伝える児童の育成
―新聞の効果的な活用を通して―　柴田町立柴田小学校・・・・・36

(10) 生徒を動かすＮＩＥ　仙台城南高等学校・・・・・38

(11) 新聞を通して地域や世界に興味を持ち、
グローバルに活躍できる人材育成を目指して　宮城県気仙沼高等学校・・・・・40

２　部会活動実践報告

（１）小学校部会報告　仙台市立七北田小学校　教諭　今藤　正彦・・・・・44

（２）中学校部会報告　大崎市立岩出山中学校　教諭　齋藤　美佳・・・・・45

（３）高等学校部会報告　仙台城南高等学校　教諭　鈴木　理恵・・・・・46

３　大学からの報告
ＮＩＥ教育コンサルタント　東北福祉大学　渡邉　裕子・・・・・47

Ⅳ　研修会報告
１　宮城県ＮＩＥ研究大会
（１）大会の概要・・・・・・・・・・・・・宮城県ＮＩＥ委員会事務局　飯坂　　新・・・・・48
（２）公開授業報告（指導案・授業概要）
宮城県仙台三桜高等学校　主幹教諭　高瀬　琢弥・・・・・49
（３）公開授業の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
（４）全体会記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
（５）講演の概要　　講師　実践女子大学教職課程　教授　柏崎　秀子氏・・・・・58

２　宮城県ＮＩＥ地区研修会
研修会の概要とまとめ・・・・・・・・・宮城県ＮＩＥ委員会事務局　飯坂　　新・・・・・60

３　ＮＩＥ全国大会盛岡大会参加報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

Ⅴ　みんなの広場（投稿等）
ＮＩＥで育むメディアリテラシーと情報活用能力
仙台市立七北田小学校　　教諭　今藤　正彦・・・・・64
「新聞を活用し英語で表現する機会を増やす工夫」
宮城県名取北高等学校　　教諭　大槻　欣史・・・・・65
平成３０年度「新聞記事コンクール」河北新報社賞受賞作品・・・・・・・・・・・・・・・・・67
「土曜しんぶんカフェ」今年度の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

Ⅵ　研究組織
１　宮城県ＮＩＥ委員会会則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
２　宮城県ＮＩＥ推進委員会会則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
３　宮城県ＮＩＥ委員会及び宮城県ＮＩＥ推進委員会の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・79

Ⅶ　宮城県ＮＩＥの歩み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81

Ⅷ　編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88

Ⅰ　あいさつ

ＮＩＥ活動への期待

宮城県ＮＩＥ委員会
会　長　　志小田　美　弘
（石巻市立石巻中学校長）

宮城県のＮＩＥの活動は、本年度で３０年の節目を迎えています。この長きにわたって学校教育現場と地元新聞社・全国紙、そして通信社等が一体となって「教育に新聞を」の共通理解の下、新聞教材の開発と活用の研究、そしてその普及を通じて、授業改善や情報活用能力の伸長を目指した提案等、大きな成果を上げて今日を迎えております。

本年度も活動の集大成としてのＮＩＥ実践報告書第３０号が発行できました。改めて、これまでご尽力いただいた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

さて、本年度の宮城県ＮＩＥ研究大会は、11月７日、宮城県仙台三桜高等学校を会場に開催されました。１年生の総合学習で実践された当日の授業は、「報道と生命の尊重」を巡るオープン・エンドの問いについて考えを深めていくものでした。ピュリッツァー賞を受賞した報道写真を導入に、生徒たちが各自のスマホ（携帯端末）を使って情報収集や検索をしながら意見交換を行うという指導過程でした。また終盤では、現場取材に赴いた新聞記者がゲスト・ティーチャーとして登場し、震災時の生の経験を語るという場面も設けられていました。

この授業提案は、本会が長く取り組んできた新聞を教育材とした取組に加えて、授業におけるＩＣＴの活用という現下の教育課題からの要請にも呼応するものでもあり、また校外からゲスト・ティーチャーを迎えた授業という部分においては、「開かれた教育課程」というところにも重なる実践であったと思います。校種を越えた参加者からも貴重な意見が交わされ、大変有意義で学びの多い研究大会になりました。改めて、会場を提供していただいた宮城県仙台三桜高等学校の校長先生と授業を提供していただいた先生、そして当日にご参加いただいた皆様にも感謝を申し上げます。

今回告示された新学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラム・マネジメント」の実現を通じて学校教育の充実と改善が求められております。このような求めに対して、ＮＩＥの取組はどのような関り方ができるのでしょうか。少なくとも「生きて働く力」の中核をなすであろう「思考力・判断力・表現力」等を育む手法としては、新聞づくりや新聞教材の活用が有効であることは現場の教員であれば異論のないところだろうと思います。それらの取組は思考・判断・表現の活動そのものだからであります。報道に取り上げられる社会的な問題に正面から向き合い、その問いを考える活動とは、主体的であり、時に対話的であり、そして往々にして深い学びとなる活動であろうと思います。併せて、言語力の育成にも資する方法ともなります。

答えのないような問い（課題）について、一人一人が自らの考えをもって他者と対話し、協働の営みでもって学ぶという学習スタイルは、正しく新学習指導要領が期待する学びの姿であり、ＮＩＥ活動への大いなる期待もそこにあると思います。

結びになりますが、本県ＮＩＥの充実した活動と今後の更なる発展を祈念いたしますとともに、これまでの活動に対する関係各位の皆様の多大なるご協力とご支援、そしてご指導に改めて感謝を申し上げる次第でございます。

新聞が持つ魅力

宮城県ＮＩＥ推進委員会
委員長　小　石　俊　聡
（仙台市立八幡小学校長）

書店に足を運び目的の本を見つけた後、店内を歩きながら、ふと目にとまった本を手にしてみる。するとそれが、自分にとって感動的な出会いとなった。

私は、このような経験が何度かあります。さらにこれが、自分には興味の無い分野の書棚を覗いてみたときの出来事だとしたら、その喜びは何倍にもなるものです。

まるで、新聞紙面を目にしているようだ…。私はあるときふと、こう思いました。

インターネットの記事と紙面の記事の大きな違いは、自分の興味とは離れた記事にも触れられることだと思います。そして、記事の大きさや位置などから、内容の重要性を推察することもできます。

また、見出しや写真などから、普段はじっくりと読まない分野の記事に興味が湧き、これをきっかけに、自分の世界が広がっていったとしても不思議ではありません。

もちろん、ネット配信の記事がだめということではなく、自分の読みたい記事がすぐ見つけられることや、検索機能を使って様々な記事を読み比べできるなど、その利点はたくさんあります。つまり、目的に応じて使い分けることが肝要だということです。

ただ、今年度の全国学力・学習状況調査で、小学６年生の６割、中学３年生の７割が新聞を読んでいない事実が明らかになりました。これを知れば、子どもたちに新聞の魅力を伝えたくなるのは、おそらく私だけではないはずです。

５年生を担任している先生から、以下のような話を聞きました。

毛筆の時間のこと。作品を置いたりするために子どもたちに新聞を配ったところ、いざ授業を始めようとしても、子どもたちは紙面から目を離さなかったそうです。

数日から約１か月前に、テレビなどで知った出来事にあらためて触れられる感動。見出しや写真が、否応なく子どもたちを刺激します。「わあ、すご～い！」「へえ、そうだったのか！」こんな歓声のような声が、あちらこちらから聞こえてきたそうです。もちろん、テレビ欄や広告に興味を惹かれていた子もいました。

しかし、たとえそうだとしても、子どもたちにとって新聞が与えるインパクトは、私たちの想像を超えると言っても過言ではありません。

私はこの子どもたちの様子を知った時、新聞の持つ「教材」としての魅力、そして奥深さをあらためて実感しました。これまでも、ＮＩＥとしての数々の素晴らしい実践が行われてきましたが、まだまだ追究できるものと確信しました。

新聞は、間違いなく子どもたちの知的好奇心をくすぐります。

ネット配信の記事との共存を図りながら、これからも新聞を子どもたちに触れさせることは、私たち教師の大切な役割だと思います。

今年度も、県内各地の小・中・高等学校において、質の高い実践が数多く行われました。私たちはこれからも、「深い学び」の実現に向けて、なお一層研究の質を高めていかなければなりません。

結びとなりますが、ＮＩＥの更なる普及・発展を祈念すると共に、これまでご指導・ご支援をいただきました事務局並びに関係各位の皆様に厚く御礼を申し上げます。

Ⅱ　寄稿

新聞に親しんでもらうことから

宮城県ＮＩＥ委員会
事務局長　鈴　木　　淳
（河北新報社　防災・教育室部長）

部署の仕事として、仙台市中学校学級新聞展の講評が必ず付いてきます。河北新報社が共催しているからです。昨年暮れにあった第４６回を含め３年間、優秀作品に目を通す機会を得ました。昨年驚かされたのは、郡山中１年４組の発行頻度でした。１０月５日号で１３号まで達していました。他の学校はせいぜい４号まで、２号というところもありました。中学入学間もない１年生が、５カ月、夏休みを除けば４カ月でこれだけの学級新聞を発行している事実。言うまでもなく、それだけニュースを発掘、取材しているということです。精力的な仕事ぶりに感銘を受け、その新聞発行にこだわる姿勢に勇気をもらいました。１年４組は最優秀賞には届かず、優秀賞でしたが「特別賞を与えてもいいのでは」と講評で述べました。

残念なことに、応募点数は漸減傾向にあります。４５回に従来の両面に加え、片面部門が新設されました。４５回は両面６０点、片面６１点と拮抗（きっこう）していました。４６回には３１点、６９点と大差がつき、学校も３７校から３３校になりました。

高校の状況はどうでしょう？　昨秋、第５回宮城県高校新聞コンクールの審査を初めて担当しました。参加校は６校でした。前回に比べ１校増えたそうです。本紙の他、速報版を複数発行するなど各校とも活発に活動しており、当方による新聞作り講習への食いつきも良く、やる気も十分でした。いかんせん、絶対数が少なすぎます。絶滅危惧種とされる高校新聞のピンチは一朝一夕には変わりそうにありません。危機を乗り越えるには、彼らのように新聞に興味や親しみを持つ人たちを地道に増やしていくしかないでしょう。

河北新報社は、新聞の読み方や書き方、活用方法などをお伝えする講座を教育現場などで開催しています。１８年度は１２月までで約４０回行いました。この貴重な機会を生かし、もっと新聞ファンを掘り起こすことができるのではと考えています。新聞を作る側の考えを聞いてもらえるチャンスなので、読むことによるメリットなどを強調しがちです。例えば、全国学力テストの結果から「毎日新聞を読む子どもは、ほとんど読まない子どもより正答率が高い」「新聞を読む子どもが算数、数学も正答率が高いのは、問題を理解する読解力が高いため」などです。間違いでもうそでもありませんが、そのために新聞を読む子どもが増えるかどうか疑問です。もっと、楽しさを前面に出すべきでしょう。

時代が違いすぎますが、ゆうべのナイターの結果をスポーツ面で調べるときのワクワク感、コラムを初めて読み通したときの達成感を思い起こします。子どもたちに知ってほしいのは、新聞で得られる小さな満足の積み重ねです。好奇心に応えてくれる媒体という評価です。学力うんぬんは、読む習慣ができた後に付いてくるものでしかありません。

２０年度の小学校から、順次新しい学習指導要領が実施されます。小中高それぞれの解説に「新聞」の言葉が盛り込まれました。「教育に役に立つぞ」という文部科学省のお墨付きです。それを生かすも殺すも、子どもたちに新聞を手に取って読んでもらえるかどうかです。１９年度はせいぜい、児童、生徒、学生に新聞の魅力を売り込み、ファンを増やすことに力を入れたいと思います。

ＮＩＥ活動の支援に向けて

宮城県ＮＩＥ委員会
副会長　吉　木　　修
（名取市立増田小学校長）

文部科学省では、平成２９年度から「学校図書館図書整備等５か年計画」をスタートさせました。

その主な取組は、①図書標準（文科省が定める、学校規模に応じた蔵書の整備目標）の達成を目指すのに加え、新しい本への買い替え促進等を含めた図書整備、②児童生徒が現実社会の諸課題を多面的に考察し、公正に判断する力等を身につけることの重要性を鑑み図書館への複数新聞配備、③専門的な知識・技能を持った学校司書のさらなる配置拡充です。

新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善が求められています。正にこれまでＮＩＥが取り組んできた活動そのものが生かされることになります。

時代の変化とともに、新聞を購読している家庭が減少してきている今日において、上述した図書整備等５か年計画の②図書館への複数新聞配備はＮＩＥ活動には大きな力になると考えます。

しかし、この計画は地方財政措置となっています。従って、各市町村において適切な予算措置が図られることによって、はじめて図書や新聞の購入費用に充てられることになります。学校経営を担う校長が、主体的・対話的で深い学びやＮＩＥ活動を推進していくため、この制度を利用して学校図書館に複数の新聞を入れたいと考えても、簡単に進んでいくものではありません。

現行の教育委員会制度になって数年が経ちます。その制度では総合教育会議を位置づけています。この会議では、各自治体における教育大綱の策定や教育条件の整備、地域の実情の応じた教育の重点施策等について協議・調整を、首長と教育委員会が行うことになっています。このような会議の中で方向性を示していけるように、学校現場として様々な働き掛けをしていく必要があると考えます。

幸いこの宮城県ＮＩＥ委員会の組織には、仙台市教委や宮城県教育庁のメンバーも含まれています。また、県や市校長会の役員、連合教育研究会の役員等も含まれています。それぞれの関係組織が地教委へ働き掛けていくことが重要であると考えます。

今年度も様々なＮＩＥ事業が県内各地で展開されました。特に実践指定校となり積極的に活動推進に当たられた先生方に対して敬意を表したいと思います。また、地区研修会でご協力いただいた戸倉小学校や研究大会で授業を公開した三桜高校の皆様には感謝申し上げます。

小学校は１年後、中学校は２年後に新学習指導要領全面実施となります。高等学校においては、３年後から年次進行で実施していきます。移行期間中、各校においては、主体的・対話的で深い学びに向け授業改善に多くの先生方が取り組み、その成果を上げています。そのような現場の先生方を支えていくためにも、関係組織がそれぞれの立場で教育行政への働き掛けを推進していくことが重要であると考えています。

Ⅲ　研究実践報告

１　実践指定校報告

（１）聖ウルスラ学院英智小・中学校（平成３０・３１年度実践指定校）

視野を広げ、進んで学び合う力を育てるためのＮＩＥ

～ＮＩＥへの取組から、社会的事象に関心を持たせる～

１　はじめに

本校は、「キリスト教的人間観に基づく人格形成」を教育目的とし、児童期（ファーストステージ）、思春期（セカンドステージ）、前青年期（サードステージ）の発達段階ごとに教育活動を展開する、小・中一貫校である。仙台市内外の様々な地域から児童・生徒が通学しているため、学校周辺の地域のみならず、それぞれの児童・生徒が住む地域にも積極的に目を向け、関わろうとする姿勢を育みたい。今年度本校は、ＮＩＥの実践指定校として認定されたことで、これまで以上に様々な種類の新聞に触れたり比べたりする活動ができるようになった。また、文部科学省の認定を受け、教育特例校として「論理的思考力と表現力の育成」を目標に、三森ゆりか先生（つくば言語技術教育研究所）のご指導をいただきながら、言語技術教育に取り組んできている。言語技術教育は全ての教科や活動の基本となり、思考力・表現力が鍛えられる。ＮＩＥ実践指定校として様々な新聞に触れられる恵まれた環境、言語技術教育を通して育まれる思考力と表現力で、視野を広げながら社会参画への意識を高めることができるよう、今年度のＮＩＥ活動の目標を、「新聞を活用して、論理的思考に基づくクリティカルなものの見方・考え方を身につける。」と定めて実践していくこととした。

２　実践の計画

今年度の本校におけるＮＩＥ活動は、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）などの年間活動計画の中の一つの単元や活動として位置づけられている。年度当初のＥＳＤ活動の年間計画の作成時に、どの活動にどのように新聞を使うことができそうか、どのように活用できそうかを各学年で考え、ＥＳＤとの効果的な結びつきを図っていけるようにする。例えば、学年テーマに関する新聞記事を探し、記事から情報を正確に読み取ることをねらいとした活動や、記事に対して自分の考えを明らかにしながら他者に向けて発表を行う活動などである。また、読むだけでなく新聞を作成することで学んだことを効果的にまとめたり、発信したりする機会もつくってきた学年もある。これらの活動を通して、新聞をツールとして協働的に学び合い、他者とのかかわりを大切にするという点でも、ＥＳＤ活動の中に積極的に位置付けていった。

日々のＮＩＥ活動としては、数年来継続して本校で行ってきた「この記事に注目！」もさらに内容を充実させ、新聞に親しませてきた。併せて、本校の言語技術教育を基盤とした指導により言語活動も充実させることを心がけ、活動を通した他者との「対話」による伝え合い、深め合いをしてきた。

＜学校全体で取り組んだ活動＞

○「この記事に注目！」

新聞記事の切り抜き活動を行い発達段階に応じて、記事の要約・記事に対する自分の考えや、調べたことなどを書いてまとめ、クラスで共有する。クラス、学年により実施の仕方が異なるが、クラス内の児童・生徒同士で書いたものを見合い、そこに新たなコメントを書き加えたり感想を付箋に書いたりして交流し合う。また、クラスでよ

く書けているものを１階ＮＩＥコーナーに掲示する。

○「いっしょに読もう！新聞コンクール」

夏休みの課題として、「いっしょに読もう！新聞コンクール」に取り組む。自分で好きな記事を選び、その記事に対する（1）自分の意見（2）家族や友人の意見（3）話し合って感じたことを記入する。

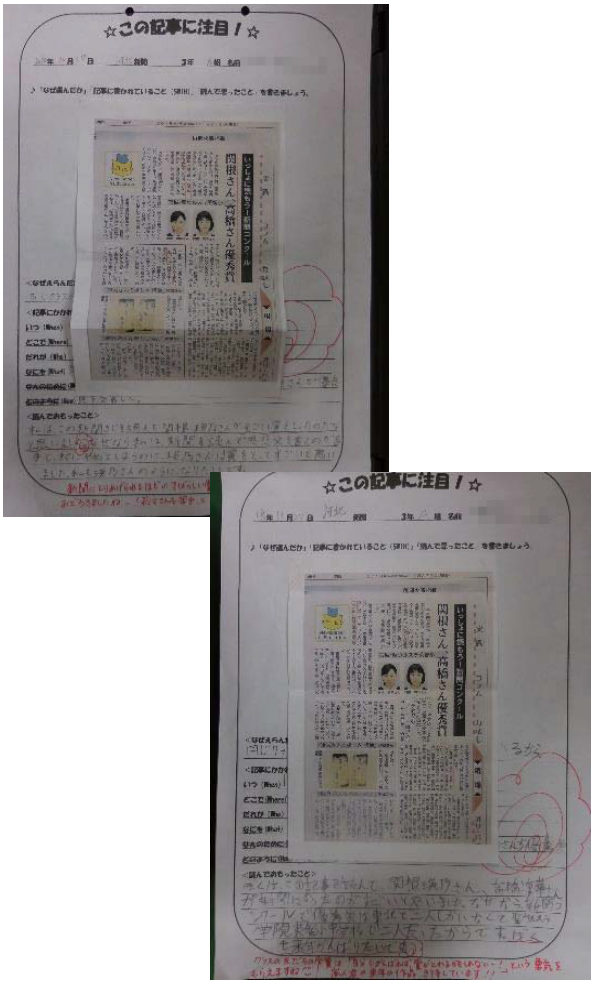
３　今年度の実践から

３年生の取組

今年度も夏休みの宿題として取り組んだ「いっしょに読もう！新聞コンクール」において、本校から２名が優秀賞を受賞者した。(他、奨励賞２名、学校奨励賞も受賞）優秀賞は最優秀賞に次ぐ賞で、全国で校種別に１０名ずつが受賞することができるとのことで、そのうちの小学校部門の２名が本校の３年生からの受賞であり、大変喜ばしいことであった。また、優秀賞は東北ではその２名のみということもあり、河北新報社からも取材に来てくださり、朝刊の記事で取り上げていただいた。

３年生は、仲間の受賞と功績を称えて、その記事を学年全員で共通でつかい「この記事に注目！」をおこなった。普段一緒に学校生活を送っている仲間のよさに改めて気づいたり、身近な人が新聞記事として取り上げられたことにより興味深く記事を読んだりして、自身も次年度は「がんばってみよう」という意欲を向上させる様子が見られた。

３年生児童の「この記事に注目！」



５年生の取組

５年生は今年度のＥＳＤ活動で、学年のテーマ「大切にしよう！～相手と自分～」をもとに、様々な立場の人に目を向けて、自分たちに与えられている恵みに感謝するとともに、全ての人がかけがえのない存在であることに気づいて相手を尊重することができるよう、年間を通して人権について考え、様々な活動を行ってきた。テーマに沿って活動を深めていくために、各月にテーマを設け各教科や行事だけでなくＮＩＥとも関連させ、各月のテーマに基づいた記事を探しながら「この記事に注目！」を行い、視野を広げていく活動をしてきた。毎年９月に行っている、福島県会津地方での民泊で農業体験などをする宿泊学習の前には、訪れる福島の歴史や文化に関する記事や農業に関する記事をみんなで共有した。実際に宿泊学習では農業体験をすることで、様々な歴史や文化、自然からたくさんの学びを得ることが

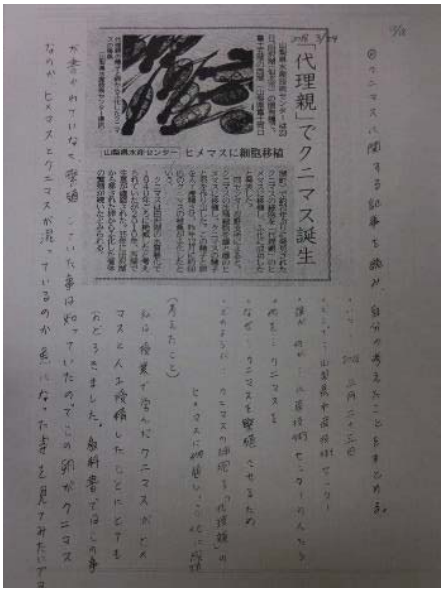
できた。また、改めて食の生産者の様々な苦労や努力を実感することができた。それらの学びをそこで終わらせることなく、今度は自分たちが発信者となって学んだことを伝えよう、と新聞づくりをして、実際に自分たちが記者のようにして取材してきたことを宿泊学習後に記事にし、１人１枚の新聞を作成した。新聞記事には何がどのように書かれているかを学んだり、記者の方々がどのように取材を進めているかなどを学んだりして、自分たちが自分の新聞社の記者になったつもりで新聞の作成をした。実際の新聞もよく分析させ、本物に近い新聞づくりを目指した。

５年生児童の宿泊学習新聞

７年生の取組

７年生は、国語の説明文「幻の魚は生きていた」（中坊徹次）で学んだことを踏まえて、１９９０年代（まだクニマスが見つかっていない時）と２０１７年、２０１８年（クニマスが見つかってから）の新聞記事を読み、自分の考えや意見をまとめる活動をした。

７年生生徒のノート



＜成果と課題＞

今年度は、全学年がＥＳＤ活動の中に積極的に新聞を取り入れることを意識したため、例年より新聞を授業や活動の中で扱うことが増大した。社会の出来事やニュースに興味・関心を持つようになった児童・生徒が増え、自主学習で新聞を切り抜いて自分の考えをまとめたり、わからないことを進んで調べたりする児童も増えた。また、そのようにして自分が新聞から得た学びや考えを、積極的に発信したがる様子も多く見られた。

一方で、学校での新聞への関わりが単調なものになる様子も見られたので、次年度は、新聞を身近なものとするための様々な活動の紹介をＮＩＥ担当から各教員にも積極的にしていくようにしたい。また、児童・生徒が自分たちの学びを様々な方法で発信することができるよう、言語技術教育での学びを関連させながら、どのような授業展開やまとめができるかを、研修等を通して学ぶ機会を増やしていきたい。

（担当　教諭　大澤　寛子）

（２）仙台市立館小学校（平成３０・３１年度実践指定校）

仙台市立館小学校におけるＮＩＥ１年目の実践報告

１　はじめに

本校は、今年度からＮＩＥ実践指定校となり、新聞が子どもたちにとって身近な情報収集の手段として学習や生活に活用できることを目指して取組を進めている。ＮＩＥの推進を図ることは、本校における仙台自分づくり教育の重点目標に掲げている「いかす力」で求める情報収集能力や情報活用能力などを育成することに深く関連している。

様々な情報に触れる機会を多く持つことは、多くの子どもが様々なことに興味を持ち、自分の思いや考えを持つことにつながる。そこで今年度は、新聞に触れたことのない子どもたちに新聞の読み方を伝えたり、読む環境を与えたりしてより身近な物にすることから、各教科の学習等に活用の幅を広げた。

２　実践の概要

（１）職員研修（５月３１日）

本校ではＮＩＥの考え方や実践について知っている職員が少なかったため、ＮＩＥについて職員研修を行い、理解を深めた。

研修ではＮＩＥ教育コンサルタントの渡邉裕子さんを講師としてお迎えし、「ことばの貯金箱」について、実際に職員も体験をしながら、やり方を学んだ。気になる言葉を切って台紙に貼りまとめたり、まとめた物を発表したりして学習効果を確認することができた。

（２）新聞に親しむための環境づくり

本校では年間を通して、計６社から新聞を購読した。児童が自由に新聞を読めるように、校舎内３か所に分けて新聞コーナーを設置した。当初は新聞を畳んだ状態で設置していたが、新聞を開いた状態で設置した方が、児童も新聞を手に取りやすいという反省が挙がったため、新聞台を用意し、開いた状態で設置している。

また、特に児童に読ませたい記事は、切り抜きにし、コメントを付けて掲示した。

何気なく新聞を手に取ったり、自分のお気に入りの新聞を毎日読んだりと、新聞に親しむ児童も出てきている。

（３）はがき新聞

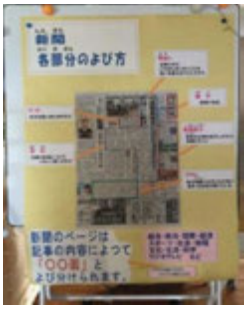
新聞を書かせることで、新聞への関心を更に高めるねらいのもと、はがき新聞の実践を行った。A5 サイズの新聞用紙を用意し、夏休みの思い出についてまとめさせた。文字数やレイアウトは各学年の職員で検討して、児童の実態を考慮できるよう工夫した。作成後には作った新聞を紹介し合ったり、校舎内の共通スペースに掲示したりして、お互いの新聞を目にすることができるようにした。

（４）新聞の構成を理解する授業

新聞の読み方が分からず、新聞に手が伸びない児童の実態があったため、全校で新聞の構成を理解する授業を行った。同じ新聞を児童数分用意し、指導者と共に構成を確認しながら新聞を読んでいった。新聞を読んだ後には、自分が気に入った記事を友達と紹介し合った。学年相当の実態があるため、指導内容は学年で検討して実践に当たった。

６学年では、５学年時に国語「新聞記事を読み比べよう」で新聞の構成について学習していることもあり、さらに踏み込んだ学習を行った。見出し・リード・本文といった構成や、写真や図表のねらい、さらに記事が５Ｗ１Ｈや逆三角形型を意識して書かれていること等を学習した。版違い新聞を見せ、新聞がリアルタイムに書かれていることなどを学び、理解を深めた。

新聞コーナーには、新聞の構成を図解した掲示物を用意し､児童が目にすることができるようにした。



（５）各学年・専科の取組

〈１年〉

児童の実態を踏まえ､「新聞に親しむこと」をねらいとした。実践に関しては、国語「こんなことしたよ」において、夏休みにあったことの報告として新聞の形式のようにまとめた。実際の新聞を用いながら、(新聞の）めくり方、読む順番、実際の記事を見ながら、「(新聞は）写真と文字で書かれている」という基本的な事項について取り扱った。

〈２年〉

生活科「まちたんけん」の単元において、まとめの活動を新聞形式で行った。新聞は前述はがき新聞の形をとり､模造紙に貼り付けて大きな新聞とした。児童が文章を多く書けるようになってきたので、新聞の枚数を増やした。

〈５年〉

国語科「資料を生かして考えたことを書こう」の学習において、児童が自分の考えを持つことが難しいという課題が挙がった。そこで、新聞記事を読ませ、自分の考えを持たせる実践を行った。指導者が記事を選び、ワークシートを作成する。児童に記事を読ませ、自分の考えを４００字でまとめさせる学習を継続的に行っている。

〈６年〉

総合的な学習「みんなで生きる町」では、修学旅行新聞を作成した。修学旅行で行ってきた函館の町の素晴らしさを、読み手に伝えられるように、実際の新聞の構成を意識させた。記事や見出しの書き方や資料の掲載の仕方を工夫し、自分の考えも入れながら新聞を作成させた。

〈理科専科〉

６年生の「変わり続ける大地」の学習では、地震や火山の活動により大地がどのように変化し人々の生活にどのように影響が出るのかを学習する。教科書の情報以外の今年度発生した自然災害や地域の情報を活用して、子どもたちにとって学習内容をより身近な現象として理解させたいと考えた。そこで、単元のまとめの学習の際に、新聞のデータベースから仙台の断層や西之島新島の拡大についての記事を活用した。ダウンロードした情報については、次年度以降も活用できるよう校内のサーバーの理科教育用フォルダに保存した。

（６）図書館教育との関連から

新聞記事に関連した図書を展示し、記事の内容をより深く理解したり、発展的に学べたりできる環境作りを行った。さらに、図書室内の書架にも関連図書の印を付け､児童の興味･関心の喚起を図った。

一つの記事が、様々なジャンルの本につながり、ふだん手に取ることのない本と出合う機会となった。また、記事と本を連動させることで、自ら知識を得る楽しさを知り、学びの姿勢がより主体的になってきている。

３　成果と課題

- 新聞コーナーを設置したことや、新聞を活用した授業を行ったことで、新聞に興味を持ち、進んで読む児童が増えてきた。
- 特定の学年だけでなく、新聞の構成を理解する授業や、はがき新聞等、すべての学級で同じ実践を行うことで､学校全体で取り組むことができた。
- 職員研修を行ったことで、ＮＩＥの理解は深まったが、よりよい活用法について、今後も更に検証することが必要である。

（担当　教諭　山内　崇寛）

（３）南三陸町立戸倉小学校（平成３０・３１年度実践指定校）

新聞に興味を持ち、進んで親しむ児童の育成

～国語科の授業づくりの工夫を通して～

１　はじめに

本校は、今年度から２か年（平成３０・３１年度）のＮＩＥの実践指定を受けた。指定を受けるにあたり、児童と保護者を対象に「新聞に関するアンケート」を４月に実施したところ、家庭における新聞の購読率が４４％で、新聞を日常的に読んでいる児童は２６％であった。購読率は半数近くあったが、新聞に親しみをもって、日常的に活用している児童が少ないことが分かった。

そこで「新聞に興味を持ち、進んで親しむ児童の育成」を研究主題とし、授業や日常活動にどのように新聞を取り入れたらよいか、国語科を中心に授業づくりの工夫を行い、以下の２つの視点で研究に取り組むことにした。

（１）学習意欲を高める工夫
（２）新聞に親しむ機会の工夫

２　実践の概要

（１）学習意欲を高める工夫

○　国語科で、新聞をどのように活用すると児童の学習意欲向上につながるかを提案し、検証する研究授業を行う。

＜１年＞かたかなをかこう

「ことばの貯金箱」から片仮名の言葉を選び、その言葉を使って文を作った。日常活動と授業がつながり、児童は意欲的に取り組むことができた。

＜２年＞なかまになることばをあつめよう

「スポーツ」「動物」などのグループ毎に、仲間になる言葉をこども新聞から探す活動を行った。探し出させたい言葉が載っている新聞を事前にまとめておいたものを配ることで、スムーズに行うことができた。

＜３年＞「ほけんだより」を読みくらべよう

図や表の効果について新聞記事を紹介したり、実際に新聞を眺めたりする活動を取り入れた。児童は、こども新聞を手にし、楽しみながら図表の効果について考えることができた。

＜４年＞わたしの考えたこと

自分の考えを相手に伝えるための文章の構成や書き表し方を理解するために、新聞の投書を紹介した。教科書にそった形式で書かれた投書を探すことができず、実際は形式が少し違うものを提示することになったが、児童は一生懸命学習することができた。

＜５年＞新聞の投書を読み比べよう

自分が気に入った記事を探して紹介することで、「面」や「記事の書かれ方」に気付かせるようにした。１人１紙、手にしたことで、友達が選んだ記事を自分の新聞から探すことができ、意欲的に取り組むことができた。

＜６年＞新聞の投書を読み比べよう

たくさんの新聞を用意し、投書を読んでテーマに分ける活動を行った。実際に投書をするという目標を設定することで、児童は真剣に読み進めることができた。

＜６年＞町の幸福論
—コミュニティデザインを考える

プレゼンテーションの情報集めの手段として新聞記事を活用した。信用できる資料として新聞記事を活用できることに気付かせることができた。

また、発表会では、新聞等で集めた事例をもとに発表することができた。

（２）新聞に親しむ機会の工夫

①教員研修の実施

夏休みに他校の教員も参加して、共同通信社の長田良夫氏より講話を、東北福祉大の渡邉裕子先生に「ことばの貯金箱」のワークショップをしていただいた。

楽しみながら学ぶことができ、児童の活動支援へ生かすことができた。

②「ぶんぶんタイム（朝新聞）」の設定

木曜日の業前活動で、各学年で「ぶんぶんタイム」を設定し、「ことばの貯金箱」に取り組んだ。子どもたちは新聞を広げることに慣れ、切り抜いては楽しそうに「チャリーン」と貯金することができた。

③「新聞ひろば」の設置

新聞に興味・関心を持たせるために、１階玄関前のホールに新聞を並べたり、広げて読めるようにカーペットを敷いたりした「新聞ひろば」を設置した。また、児童が載った記事や地域のニュースを切り取った記事を掲示した。

３　成果と課題

（１）成果

- アンケート結果によると、特に下学年の新聞や言語への意識が向上し、活動も楽しんでいる。
- 「ことばの貯金箱」を通して、新聞への抵抗感が少なくなってきた。今後は、カード作りや記事の内容の紹介などの活動へ広げていきたい。

（２）課題

- 研究授業以外での新聞の活用が少なかった。積極的に取り入れようという意識を高めて教材研究をしていく必要がある。
- 全員が通る１階玄関前のホールに新聞を並べたが、進んで読む児童が少なかった。短い休憩時間でも手に取れるよう、２階の教室前へ移動したい。
- 上学年の児童が自ら新聞を読む姿が少なかった。社会への関心が高まるような授業や、記事を読むことが日常となるような工夫が必要である。

（担当　教諭　武山 知子）

（4）宮城県宮城広瀬高等学校（平成３０・３１年度実践指定校）

ＮＩＥと連携したシチズンシップ教育の推進

～　新聞を利活用し、社会に目を向ける生徒の育成　～

１　はじめに

河北新報社と連携した「新聞の読み方講座」を行ったことをきっかけとして、学習における新聞の利活用が始まったのは、平成２８年度のことである。それから２年がたち、平成３０年度、ＮＩＥ実践指定校の認定を受けた。

２　これまでの経緯

実は本校では、選挙権年齢の引き下げ等に対応するため、平成２８年度、宮城県教育委員会が行っている「魅力ある県立高校づくり支援事業」として、政治的教養教育、いわゆるシチズンシップ教育を推進しようと考えた。この計画は、単年度で終結するものではなく、平成２８年度の１年間で、今後３年間の計画を立て、３年間かけて制度を構築しながら実践を進めるといったものだった

平成２９年度は、同じく宮城県教育委員会の「シチズンシップ教育推進事業」から予算をいただき、平成３０年度も、継続している。実践を進めるなかで、新聞の利活用が生徒の社会的な興味・関心の喚起につながると考えるようになり、平成３０年度、ＮＩＥ実践指定校に名乗りを上げることにした。

３　本校の実践

シチズンシップ教育そのものは、小中高や、専門高校、普通高校、支援学校等の校種の別なく、またどの教科においても、あるいは教科横断的にも行われている教育である。ただし、新聞の利活用ということについては、やはりそういったことに取り組みやすい教科と、そうでない教科、取り組みやすい学習活動と、そうでない活動といったものはあると考える。

そこで本校では、これまでの蓄積をもとに、１学年の「倫理」、２学年の「家庭基礎」、３学年の「政治経済」の各授業、及び２学年の「総合的な学習の時間」で、新聞を利活用した学習を行った。また、平成３０年度も、河北新報社と連携した「新聞の読み方講座」を学年ごとに実施することを継続した。

（１）　１学年の「倫理」

倫理の学習のまとめには、これまで学んだことを踏まえて社会的事象を考察するという単元がある。そこでの学習で、興味を持った新聞記事を個々にスクラップし、４人程度のグループで話し合いをした。

図１　個人で新聞スクラップを作成する（倫理）

（２）　２学年の「家庭基礎」

１学年での学習と総合的な学習の時間との橋渡しという意味で、新聞記事を利活用したグループ学習を行った。福祉施設に関する新聞記事を扱い、そこから読み取れることをもとに、施設のメリットやデメリットについて、考えられることを挙げ、黒板にグループごとに書き出して、相互に意見を交換した。

図２　新聞からの情報を読み取る（家庭基礎）

図３　新聞からの情報を共有する（家庭基礎）

（3）　３学年の「政治経済」

政治経済の学習を踏まえた社会的事象の考察という単元で、２年間の学習の蓄積も含めて、一人一人興味を持った新聞記事について取り上げ、自分の考えや意見を交えて作文をするという課題を、冬季休業中に出した。３年間の学習の集大成ということもあり、身近な地域の話題から、福祉、労働、経済、国際の問題まで、様々なテーマを取り上げて、意見や感想が出された。

（4）　２学年の総合学習

１学年での学習を踏まえて、新聞を見て、同じ興味を持ったもの同士がグループとなって、ポスター大の新聞スクラップを作成する学習を行った。作成に当たっては、記事を切り取り、レイアウトを考える者、記事に対する意見やコメントを書く者、イラストを描く者等、グループ内で相談の上、各自で役割分担を行った。

また作成したスクラップポスターについて、相互にプレゼンを行った。プレゼンを行うときには、ジグソー法の手法を用いて、自分が作成に関わったスクラップポスターについては、必ず自分が発表し、説明するというやり方にした。

図４　グループで新聞スクラップを作成する（総合学習）

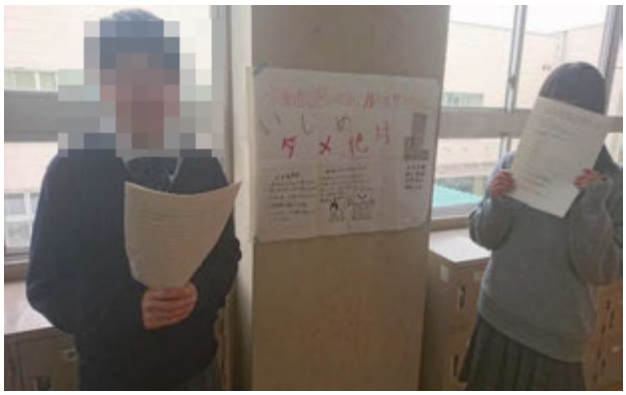


図５　相互発表の様子（総合学習）

（5）　「新聞の読み方講座」

各学年でシチズンシップ教育についての学習を開始する際に、この講座を開催し、学習のスタートとして、まず、どのように新聞を読んだらいいのか、実際に新聞を用いて講義をいただいた。

新聞の特徴として、たくさんの情報の中から、自分の興味に応じて、情報を得ることができること、逆に興味がなくとも、近々に起こった出来事について、いろいろな情報が書かれていること等を学習した。中には、初めて新聞を手にとってじっくり読んだという生徒もあり、興味深く新聞の記事を見入っていた。

図６　新聞の読み方を聞く（新聞の読み方講座）

図７　新聞に見入る生徒（新聞の読み方講座）

４　おわりに

ＮＩＥは、アクティブラーニングのひとつの形態と見ることもできるように思われる。そうであれば、学習における新聞の利活用は、学習の一手段であって、目的ではない。ＮＩＥを推進するに当たっては、「善良なる市民＝社会に目を向ける生徒」の育成という視点を忘れずに、何の学習について、どのように新聞を用いるのが生徒にとって効果的であるのかといったことを常に考えながら、２年目も全校体制で取り組んでいきたい。

（担当　教頭　浅水啓一郎）

（5）登米市立豊里小学校（平成２９・３０年度実践指定校）

新聞に親しみ、読解力を高めるＮＩＥ

１　はじめに

豊里小学校では、活字で書かれている内容を正しく読み取る力を伸ばすために、授業で音読や言葉の学習に重点的に取り組んでいる。さらに、読解力を高め、全員が文章を正しく読んで理解する力を養うことをねらいとして、昨年度からＮＩＥの実践に取り組み始め、２年間実践してきた。

２　これまでの取組

（1）新聞に親しむ環境整備

児童の実態として、新聞を読んだ経験に乏しく、どんな記事が載っているか知らないといった児童が多かった。そこで、新聞を読むコーナーを校内に設置し、通行の際に新聞の一面記事が目に入るような方向で置くように工夫した。環境整備として下記のような取組を行った。

【２階廊下の一角を活用したＮＩＥコーナー】

①　閲覧コーナー（各種新聞）

新聞を手に取って自由に見ることのできるコーナーを設置した。子どもたちの間では、「こども新聞」に人気があり、毎日お気に入りの記事を読んでいる様子が見られた。

一般紙では、スポーツ欄の楽天球団の記事、４コマ漫画、パズルなどに興味がある児童が多い。中には、地方版から読み始める児童もいて、自分が参加した催し物の記事を教員に紹介してくる児童もいた。

日曜版にのみ掲載されているパズルを楽しみにしている児童が、日曜日の新聞を並べてほしいと依頼してきたこともあった。

【新聞を閲覧できる机と椅子を設置】

②　抜粋記事の掲示

・壁面に児童の興味・関心を引きそうな記事を抜粋して貼り出すことで、記事を読む機会を増やすことを目指した。

一つの記事に着目させる掲示コーナーは、児童生徒の興味・関心を高めている。

【一つの記事を１枚の台紙に貼り付けて掲示】

・理科のコーナーにもＮＩＥを活用し、学習に関連性の高い記事や児童生徒が興味を持ちそうな記事を掲示している。

新しい実践を企画して取り組むことは、適切な活動場所と作業時間を確保しなければならないので、学校現場では実行することが難しい。

しかし、全く新しく作るのではなく、これまでに実践してきた形に、ＮＩＥの要素を少しずつ加えてヴァージョンアップしていくことで、無理なく継続して活動できるようになることを改めて実感した。

この実践例は、やや活動が停滞していた理科コーナーをＮＩＥの活動を加えることで、子どもたちに理科に関連する情報を与える場やよい機会となった。

【理科コーナーにＮＩＥの関連記事を掲示】

③　児童が取り組んだワークシートの掲示

児童が取り組んだワークシートを掲示したところ、興味を持って読む児童が多く見られ、自分がワークシートに取り組む際の参考にしていた。児童の関心の高さが伺えたことから、さらに児童の興味や活動意欲を引き出す環境整備に努めていきたい。

【壁面を利用した児童作品（ワークシート）の掲示】

＜取組例＞

ｉ）見出しを付けよう

気に入った写真をワークシートに貼り、選んだ理由を書かせた。併せて、記事の要約を記入し、そこに自分なりの見出しを付ける作業を行わせた。写真と見出しといった少ない情報でも記事の内容をイメージさせることが可能であることを知る体験となったので、継続して取り組ませていきたい。

体験活動や行事が終わった際、児童が書いた新聞に特徴的に見られるのは、活動内容の羅列である。最後の一文で感想を書くこともあるが、文章の中心となるべき伝えたいことが欠けている新聞が多く見られる。

見出しを常に考える習慣を身に付けさせることで、児童が柱となるメッセージを意識して書くことができるようになるよさを感じた。

【記事に付いていた写真から見出しを連想する】

ⅱ）漫画で楽しもう

新聞に掲載されている４コマ漫画に興味を持たせることで、新聞を読もうとする意欲付けをねらい、ワークシート作りに取り組ませた。起承転結の構成に着目させながら読ませることで、作者の意図を理解することにつながり、読み取りの力を伸ばす一助となっている。

【各紙の４コマ漫画に感想を付けるワークシート】

ⅲ）五・七・五コメント

記事を読んで理解した内容の要約または感想について、五・七・五の１７文字で表現するワークシートに取り組ませた。児童は、キーワードになる言葉を探して、何度も本文を読むようになり、そのことで活字を読む頻度が高まっていくよさがある。

１７文字で表現しなければならないといった限定された条件が、児童の活動への集中力を高めていた。

掲示されたワークシートを読む際、短文としてまとめられた感想はインパクトがあり、分かりやすく目に留まりやすいといった利点が感じられた。

【感想を五・七・五でまとめるワークシート】

ⅳ）「かほくワークシート」の活用

文章を正しく読み取る力を伸ばすために、本校児童が新聞記事を読む機会を意図的に設け、書かれている内容を正しく読み取る経験を多くしていかなければならない。そこで、「かほくワークシート」を週末課題として児童に与え、家庭学習としてじっくり新聞記事を読む機会を設定している。設問に適合した内容を解答するためには、何度も記事を読み返さなければならないので、文章を正しく読み取るために集中力が増していくよさがある。継続して実践し、学習の成果を上げていきたい。

【かほくワークシートは短時間で準備ができる】

ⅴ）自作「ワークシート」の活用

下記の項目をねらいとしたワークシートを自作し、朱書きをして児童に返却し、創作意欲や記事を読む意欲の向上を図っている。

・道徳的価値の内容を含む記事の選択
・学校行事とタイアップし、事後指導的に活動や感想を記録させる。
・表記や内容に関する評価を行い、励ます。
・掲示による児童作品の紹介
・保護者への啓発（参観日等）

【フォーマットを決めて記事を貼る】

【コメントを書いてよいところを焦点化】

【各学年の児童作品にラミネートを掛けて掲示】

（2）授業での活用（新聞づくり）

授業では、修学旅行や校外学習の学びの成果を新聞にまとめる学習が、３～６年生で継続的に行われている。また、６年生は総合的な学習の時間に登米市の歴史について調べたことを新聞にまとめ、発信している。

＜取組例＞

【３年生】

・教科：総合的な学習の時間
・単元名：「びっくり豊里」
・内容：トマト作り農家の見学

地域の農家の方がトマトを作っている作業場に出掛け、トマトを世話する様子を見学することができた。また、トマト作りについてどのような作業があるのか、どんな思いでトマトを育て出荷しているのか、貴重な話を聞く機会となった。

児童はそのときの様子を新聞にまとめ、イラストなどで詳細に状況を説明し、農家の方のトマト作りにかける願いや苦労、努力の様子などをまとめることができた。

【見学の様子をまとめた新聞を廊下に掲示】

【分かりやすく伝えることを意識した紙面】

【文章で状況を説明しようというねらいを設定】

【５年生】

・教科：国語
・単元名：「新聞記事を読み比べよう」
・内容：河北新報（７／２）と他社新聞の記事比較
・河北新報では、羽生結弦選手の取扱い方が大きいことに児童が気付き、地元の新聞紙であるためといった視点をもつことができた。
・河北新報では、羽生選手に関する記事として第２朝刊が付いてきた程の大きな取扱いであった。指導者が準備した朝日新聞では、記事を扱っていなかったことや羽生選手の記事が一日遅れて、７月３日に掲載されていたことに気付くことができた。
・産経新聞（７月２日朝刊）に羽生選手の記事はなかったが、ワールドカップの記事は２面分を使って記事になっていた。そのことから、全国で多くの人が関心を寄せている記事は大きく取り扱われることに触れることができた。
・河北新報は写真が美しいので、児童が興味・関心のある記事を見付けやすい利点が見られた。

【１部ずつ河北新報を手にする児童】

【他紙と比べて特徴的な記事や構成に着目】

【１人１部ずつ新聞を手にして閲覧できる環境】

【６年生】
・教科：総合的な学習の時間
・単元名：「ふるさとの歴史を見つめよう」
・内容：豊里の歴史について調べて分かったことを新聞にまとめる。
・６年生の作成する新聞は、内容が豊富なのでＡ４用紙では不足する。６年生はＢ４用紙を３～４段に分けて新聞を作成するスキルが身に付いている。

【写真やイラストを効果的にレイアウトした紙面】

【友達のまとめ方を参考にし、工夫の仕方を知る】

・教科：総合的な学習の時間
・単元名：「会津の歴史を探ろう（会津研修）」
・内容：修学旅行の活動記録や研修成果を新聞にまとめる。
・６年生の作る新聞は、相手意識をもった作品に仕上がっている。伝えたい内容を分かりやすく伝えるために必要なスキルを知り、適切に使う能力が育ってきている。学年に応じた書く力を育成する上で、新聞作りは効果的である。

【福島県会津若松市における研修をまとめた新聞】

【レイアウト、写真、吹き出し等のスキルが向上】

【「分かりやすく伝わっているか」を目標として】

（3）委員会活動（特別活動）での新聞づくり

給食委員会に所属する児童が、日頃お世話になっている給食センターを見学する機会があった。センター内で働いている職員の方々の仕事ぶりを見ることにより、毎日おいしく食べている給食がどのようにして作られているのか、どのような苦労や努力をされているのかについて知る好機となった。

その見学内容や感謝の気持ちを新聞にまとめ、給食コーナーに掲示した。このコーナーは、伝統的に献立を紹介する取組などを行っており、壁新聞を掲示することで児童生徒の目を引くよさがある。

【給食センターの見学内容を知らせる壁新聞】

（4）「河北新報データベース」の活用

欲しい情報を入手する手段として、「河北新報データベース」を使用し、ストックされた記事の中から必要としている情報を探し出す学習に挑戦した。学活の授業で、５年児童は自分の生まれた年にどのような出来事があったのかを調べた。「河北新報データベース」には検索機能が付いているので、児童は自分の興味・関心に従ってキーワードを入力していた。例えば「プロ野球　優勝チーム」「自然災害　東北」と打ち込み、検索を行っていた。また、調べた内容をワークシートに書き込んでまとめ、互いに見合いながら意見や感想を交換していた。

【タブレットから河北データベースにアクセス】

３　成果と課題

【成果】

１年目はＮＩＥ担当が新聞記事を活用して実践を紹介することが取組の中心となった。その中でも、取り組んだワークシートなどを掲示することで、新聞記事の読ませ方や体験学習を新聞にまとめる方法について児童及び教職員に提示することができた。

継続して取り組んできた新聞作りが、文章の読取や構成を考える上で有効であったことを改めて認識することができ、様々な単元での応用を考えるよい契機となった。

【課題】

学校全体として読み取る力を伸ばすという目的を達成するため、組織的に取組を継続していくことが必要である。そのためには、年度当初にＮＩＥの年間活動計画を教職員で共通理解し、授業での活用も視野に入れた実践を計画していくようにする。

また、週末課題として取り組んでいるワークシートは、実践する学年・学級や実施回数を徐々に増やし、軌道に乗せていきたい。

さらに、新聞を活用できる力を児童に培っていくために、新聞をどのように授業に取り入れていけばよいのか、今後も実践を通して検証していきたい。

その際、教職員のディスカッションを経て情報を共有し、年間指導計画上に朱書きをして記録を残したり、実践報告会を行って教材を共有したりする研修が必要になってくる。

（担当　教諭　菅原　洋一）

（６）仙台市立八木山小学校（平成２９・３０年度実践指定校）

新聞に親しみ、考え、判断し、自発的に活動する児童の育成

１　はじめに

本校は、平成２９年度から２年間、ＮＩＥ実践指定校に認定され、新聞を活用した学習の取組を行ってきた。本校の児童の実態から「新聞を活用した活動を通して、自分の考えを持って、判断し、思考しながら自発的に活動する態度を育てる」ことを目標として設定した。

２　実践の概要

（１）職員研修（１年目）

本校では、ＮＩＥのことを知っている職員は少なく、初めて取り組む職員がほとんどであった。そこで、河北新報社に協力いただき、ＮＩＥについてのオリエンテーションを行った。ＮＩＥとは何か、新学習指導要領との関係などを講義していただき、ＮＩＥについての理解を深めた。また、夏休み中の職員研修では、ＮＩＥ教育コンサルタントの渡邉裕子さん（東北福祉大講師）を講師としてお迎えし、「ことばの貯金箱」のやり方を学んだ。実際に新聞を切ったり、選んだ言葉や写真にコメントを付けたりして楽しく取り組んだ。

（２）環境整備

①新聞閲覧コーナー

１年目は９月から４か月間、６紙の新聞を購読し、図書室に新聞閲覧コーナーを設けた。児童が自由に新聞を読めるようにしたので、休み時間や授業中など、興味を持って新聞を読む児童が出てきた。また、古新聞をコーナーの近くに置き、気になった新聞を自由に持ち出してよいことにした。児童だけではなく、授業に活用できるよう職員にも周知した。

さらに、２年目は１年間を通して新聞の購読

をし、毎日２紙ほどその日の新聞が読めるようにした。また、低学年にも読みやすい「こども新聞」も購読した。

②ＮＩＥコーナー

より新聞に触れる機会を多くするため、河北新報に毎週火曜日掲載されている、「ＮＩＥのページ」を切り抜き、職員玄関近くの掲示板に掲示した。

通りかかるときにクイズやまんがを見ている児童が増えてきた。

③ＮＩＥ実践資料コーナー

職員室の通路にＮＩＥの実践報告書や関連した本など、実践が掲載されている資料を置いた。職員が自由に閲覧し、実践に活用できるようにした。

気軽に手にとって読めるよう、職員がよく通る通路に設置した。

（３）授業での活用

１年目の実践

【５年国語「新聞記事を読み比べよう」】

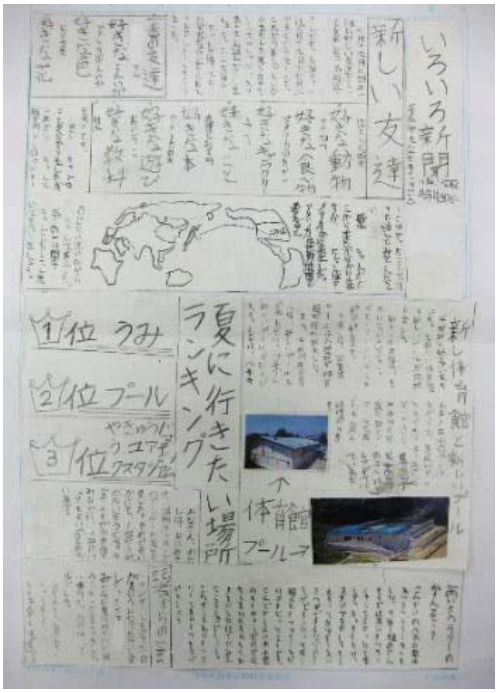
新聞の基本的な読み方を学び、記事を読み比べる単元である。授業の導入で、授業当日の新聞を５年児童全員に配付し、新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方などを学習した。

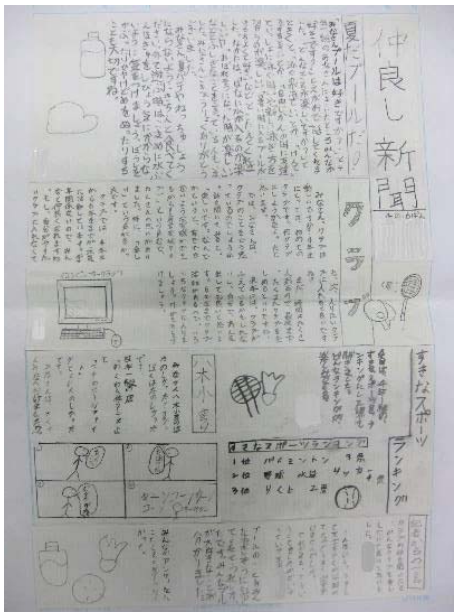
普段、新聞を読まない児童が多かったが、一人一人が新聞を持つことでじっくりと新聞の構成や内容が理解でき、同じ内容の新聞を使用することで、児童同士で教え合うことができていた。授業の後半には、ページをめくるのも速くなり、記事をすぐに見つけられるようになっていった。新聞探検やゲーム、記事探しなどの活動で、児童の新聞への興味・関心が高まった。

【４年国語「みんなで新聞を作ろう」】

この単元の学習の最後には自分たちで取材をして，記事を書き、見出しや割り付けを考えて新聞を作る活動がある。そのために、児童一人一人に実際の新聞を単元の導入に見せ、紙面の構成を確認した。どんな内容の記事が掲載されているのか、文章の中に５Ｗ１Ｈはどのように書かれているのかなど、紙面から読み取って学習した。

新聞を作る際には、新聞を自由に閲覧できるように廊下に新聞を置いたところ、見出しや割り付けを参考にするために新聞を見ながら活動していた。





【４年「新聞で１分間スピーチをしよう」】

それまで朝の会で行っていたスピーチを自分の興味を持った新聞記事を題材として話すことにした。５Ｗ１Ｈを意識させながら、記事を紹介し、読んだ感想やみんなに伝えたいことを発表させた。始めは１分間にスピーチが収まらなかったり、話す内容が分かりにくかったりした児童が多かったが、何度も経験するうちに慣れ、短く分かりやすくまとめることができるようになってきた。

発表するために作成したスピーチのワークシートは階段の踊り場に掲示し、全校児童が目にすることができるようにした。友達の紹介する記事に興味を持ったり、繰り返しスピーチを行ったりすることで新聞を気軽に手に取って見る児童が増えた。

【３年図工「コラージュの世界」】

自分の作った粘土作品の写真に新聞から切り抜いた文字や写真などを貼った。

発想をどんどん広げ、仮想の町や宇宙といった世界を自分なりに楽しんで作っていた。

２年目の実践

【５年国語「新聞記事を読み比べよう」】

新聞の基本的な読み方を学び、記事を読み比べる単元である。

家庭で新聞を購読している児童が少なく、購読していても１紙だけという家庭が多い。そこで今年度は、授業の導入で、昨年度は１紙だけであった新聞を一人一人に２紙ずつ、当日の新聞を配付した。他の新聞と比べることで、書き方や記事の取り上げ方の違いに気付くことができた。「新聞にはいろいろな工夫がしてあることに気が付いた。」「写真一つとっても遠くから撮ったり近くから撮ったりしていておもしろい」「他にもどんな新聞があって、どんなことが載っているのか見てみたい」など興味を持って取り組んでいる児童の感想が多かった。

【４年国語「みんなで新聞を作ろう」】

河北新報社の方をゲストティーチャーとして招き、新聞作りの過程とコツを教えていただいた。

お話していただいたことをもとに、開催予定であった”八木小まつり“の宣伝を兼ねた新聞を実際に作成した。

１枚の紙面ではあるが、「アタマ・カタ・ヘソ」という紙面の構成を考えた“割り付け”を意識したり、言葉で表現したりすることができる児童が増え、紙面構成を工夫する児童が多くなった。

【４年社会「校外学習を発信しよう」】

４年生の社会では、様々な施設へ校外学習に出かけて学習することが多い。今年度も消防署、警察署、浄水場、清掃工場へ見学に行き、どのような役割を果たしているのか、そこで働く方たちはどんな思いで仕事をしているのか、実際に自分たちの目で見て話を聞いてきた。そこで学んだことを自分なりの視点で新聞にまとめ、発表した。

繰り返し新聞を作成し、「みんなで新聞を作ろう」の学習の後でもあり、新聞作成のレベルが上がってきている。

【４年国語「読み回し新聞」】

学年で少人数のグループを作ったあと、一人一人が気に入った新聞を切り抜き、グループ内で記事を紹介した。グループごとに相談して、半分に切った模造紙に構成を考えて割り付けし、壁新聞を作成した。

グループごとにコンセプトを決めて記事を集めたり、割り付けを考えたりしている姿が見られた。「他のグループはどんな新聞になっているのか」「自分たちの新聞も読んでもらいたい」など新聞作りに意欲的に取り組んでいた。

出来上がった壁新聞を掲示したところ、なかなか掲示場所から動かない児童がいるなど、とても熱中して活動していた。

【１年体育「みんなでなかよく」】

漢字や難しい言葉がたくさん載っている新聞は低学年の児童にとって「読む」ことが難しいので、新聞を道具として使った遊びを通して、みんなと仲良くなる学習を行った。

グループごとに１枚の新聞紙を空中に浮かべ、落とさないようにする遊びでは、息を吹きかけたり、手で扇いでみたり、一生懸命落とさないように「こっちに来て！」「追いかけよう！」など仲間に声を掛けていました。

１枚の新聞紙の上にグループ全員が乗るという遊びでは、一斉に乗ってはみ出るグループもあれば、１人ずつ慎重に乗っていくグループもあってわいわいと楽しんで活動していた。「ちょっと１回下りようよ。」「もう少し詰めて。」など相談しながら新聞紙に乗る工夫をしていた。

３　成果と課題

＜成果＞

○環境整備や授業での活用によって、新聞に興味を持ったり、読んだりする児童が増えてきた。

○新聞を活用した学習を繰り返し行うことで、新聞への抵抗感がなくなってきた。

○新聞を作成する学習を通して、自分の思いや伝えたいことを適切に言葉で表現できる児童が増えてきた。

○実際の紙面を見ながら学習することで、理解が深まった。

＜課題＞

・新聞作りの経験を重ね、専門的な知識を講座で学ぶことで、レベルアップを図れる児童とそうでない児童との差が大きくなった。

・授業の意図に沿った記事を選んだり、取り上げたりすることに難しさを感じ、なかなか実践することができなかった。

・実践を行う校内体制が整わず、職員の中でも、積極的に実践を行う職員は限られていた。

４　おわりに

ＮＩＥに取り組んでみると、新聞を使って学習することで児童の学習に対する意欲が高まることが実感できた。また、読み取ったり、自分で考えたりする力が付いてきていると感じている。しかし、どの教科のどの単元で新聞を活用すればよいのか分からず、実践できないこともあった。

ＮＩＥを今後も継続していくには、新聞を使った学習の良さを職員に実感させること、それぞれが実践したことを共有し、とにかく「やってみる」ことが大切である。これからも児童が新聞に触れる機会を多く作り、ＮＩＥの楽しさを味わわせていきたい。　　（担当　教諭　石井真紀子）

（7）登米市立豊里中学校（平成２９・３０年度実践指定校）

視野を広げ、語彙力・読解力を高めるＮＩＥ

１　はじめに

本校は、平成２９・３０年度の２年間、ＮＩＥ実践指定校の認定を受けた。

本校は校舎一体型の小中一貫校であり、日常的に異学年と交流することが多く、中１ギャップや生徒指導上の問題行動などが少ない学校である。

生徒は、部活動や学校行事などに意欲的に取り組んでいるが、各種学力調査の結果を見ると、ほとんどの教科で正答率が市及び全国の平均値を下回っており、学力の向上が大きな課題である。

学力の背景には読み取る力が関わっているものと考えられ、ＮＩＥの取組においては、教養の深まりや視野の広がりという内面的成長に加えて、語彙力や読解力、思考力など学力面での効果が期待できる。本や新聞もあまり読まない生徒が多いという実態を踏まえて、「視野を広げ、語彙力・読解力を高めるＮＩＥ」という研究テーマを設定し実践に取り組んできた。

２　実践の概要

（１）新聞に親しむための環境づくり

ＮＩＥの実践にあたり新聞に関する生徒の実態を調査したところ、新聞を購読している家庭が少なく、新聞を読んだ経験が乏しい実態が分かった。そこで、多くの生徒が目にし、自由に手に取って読めるよう複数箇所に「ＮＩＥコーナー」を設置した。

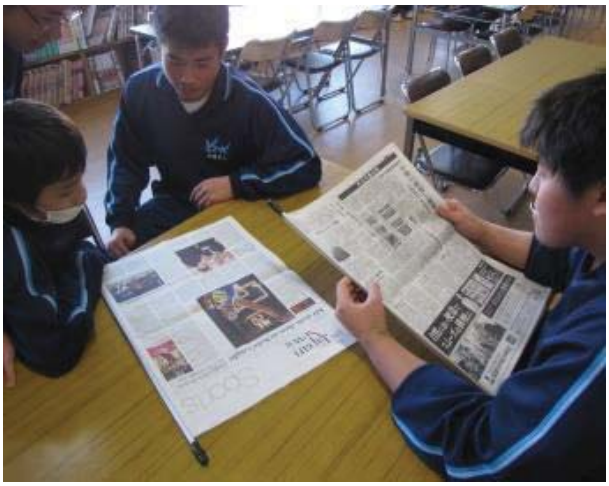
①　メディアルームの「ＮＩＥコーナー」

本校のメディアルーム（図書・ＰＣルーム）は昼休みを中心に開館している。その一角に各新聞社の一面記事を並べて掲示し、その日の新聞をホルダーに挟んで置いたＮＩＥコーナーを設けた。新聞を毎日新しいものに差し替えるのは、図書委員の仕事である。

昼休みという限られた時間ではあるが、本を借りにきたときにふと新聞を手に取る生徒もいれば、毎日メディアルームを訪れ新聞を読むことを日課とする生徒もいた。比較的静かな雰囲気の中で、気になる記事をじっくり読むことができていたようだった。

【メディアルームのＮＩＥコーナー】

【新聞に親しむ生徒たち】



②　廊下の「ＮＩＥコーナー」

メディアルームの開館時間が限られていることから、もっと多くの生徒がいつでも新聞を読むことができるよう、廊下にもＮＩＥコーナーを設置した。

こちらの掲示板には、生徒が関心を持ちそうな記事や話題のニュースを特集するようにした。また、古い新聞を自由に持ち出してよいことにしたところ、教室で新聞を読む生徒の姿が見られるようになった。好きなスポーツ記事を友達と囲んで読んでいる姿や、英字新聞を辞書片手に読もうとする生徒の姿が見られ、新聞がある生活になじんでいく様子が見られた。

【廊下のＮＩＥコーナー】

③　「ファイル別掲示コーナー」の設置

２年目は、３年生の教室近くにＮＩＥコーナーを設置した。ここでは「科学」「文化」「スポーツ」「地域の話題」「高校受験」など、分野ごとに切り抜いた記事をファイリングして掲示している。

目につきやすい大きな事件や事故のニュースだけでなく、様々な内容の記事に触れることで、視野を広げたり考えを深めたりすることができると考える。

【廊下のＮＩＥコーナー】

（２）教職員の「ＮＩＥ研修」

１年目は、本校を会場に県内小中高等学校の教員が集まり、ＮＩＥ地区研修会が開催された。本校では、ＮＩＥ教育への理解を深めるために、全教職員が校内研修を兼ねて参加した。

①　講話「経済について考えよう」

第１部は、日経新聞仙台支局長である川合知氏による講話であった。「経済」という大きなくくりで、世の中の動きや流れについてお話をいただいた。新聞から有益な情報を取り出す能力の必要性について、考えを深めることができた。

【第１部「講話」会場の様子】

②　ワークショップ「ことばの貯金箱」

第２部は、ＮＩＥ教育コンサルタントの渡邉裕子氏によるワークショップであった。４人１組でグループを作り、新聞の中から気になった言葉や写真などを切り抜いて「ことばの貯金箱」に貯める。その際は互いに「チャリ～ン」「いいね！」と声を掛け合う。その切り抜きを各自が台紙に貼り付け、マジックで言葉を書き込む。和やかな雰囲気の中で教職員も夢中になって取り組み、「ことばの貯金箱」の教育的効果や様々な可能性を感じ取ることができた。

【第２部「ことばの貯金箱」の活動の様子】

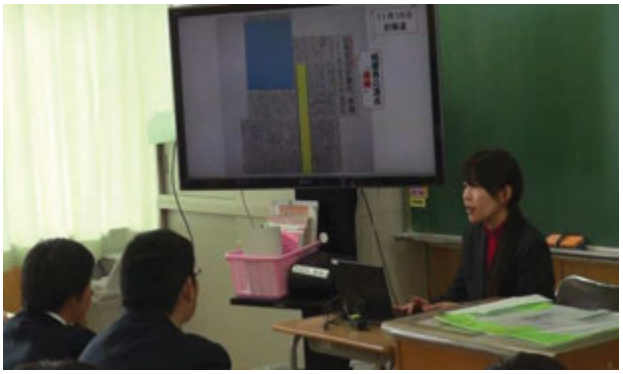
【「ことばの貯金箱」教職員作品例】

（３）授業における実践

①　１学年国語科「ニュースの見方を考えよう」

本教材は、「言葉とメディア」の学習系統の中で、メディア・リテラシー教育の入門として位置付けられている。単元の発展学習にあたる本授業では、生徒の実態や関心を踏まえ、当時、連日のように報道されていたスポーツ関連の事件について新聞記事を読み比べる学習を行い、情報との付き合い方を主体的に考えられるようにした。

【新聞記事の紹介】



まず、初報道から現在までの経過を、記事を大型テレビに映しながら紹介した。時系列で複数の記事を読んだ後、同じ日の２つの新聞の記事を読み比べた。表現の仕方や着眼点の違いなど、個々で気付いたことを付箋に書いて貼り、その後グループで意見交流を行った。同じ意見をまとめたり気付いたことを書き加えたりしながら、各新聞の記事の特徴について理解を深めていく姿が見られた。

【グループでの話し合いの様子】

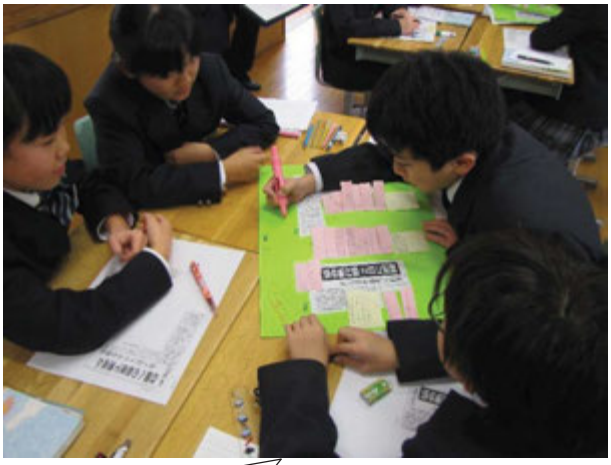
【グループでの意見交流】

Ｃ１：こっちは、なぜ事件が起きたのかを伝えようとしている。

Ｃ２：「激高か」って書いてるね。「か」って。

Ｃ３：たぶんそうじゃないかって…。推測している。

Ｃ２：それいいね！



【グループでの意見交流】

Ｃ１：こっちの新聞は「関」って付いてるけど、こっちは付いてない。

Ｃ２：「関」って何？

Ｃ３：うーん。人称というか…。

Ｃ４：書いとこうか。発見した違い。

意見交流の内容をもとに、各新聞の記事の意図やねらいについてグループで話合いを行った。その際、考えを広げたり深めたりすることが目的なので、意見をひとつにまとめなくてもよいことを伝えた。

【グループで使用した画用紙】

グループの代表者が発表し、全体で共有した。各グループで見つけた違いや特徴を、記事を指し示しながら説明し、読み取った意図やねらいについて、自分たちの考えを発表することができた。

【発表の様子】

【発表】M新聞は、ただ殴っただけでなく、(原因となった）貴ノ岩の行動についても伝えようとしていると思いました。K新聞の方は、協会の動きについてで、事件を知っているのに対応が遅れたことの重大性を伝えようとしていると思いました。二つの記事を読み比べて、大まかな内容は同じでも、どこに重点を置いているかが違うことに気付きました。

生徒は、新聞記事の読み比べを通じて、各新聞の特徴や違いに気付き、自身の情報の受け取り方について考えを深めていた。「いろいろな新聞を読んでみたくなった」「おもしろかった」「これからのニュースとの付き合い方に生かしたい」などの感想が多く見られた。

②　特別支援学級での実践

国語科

ＮＩＥ地区研修会で学んだことを生かし、特別支援学級の国語の授業において「ことばの貯金箱」を取り入れた。

生徒たちは「新聞を読む」という活動そのものに新鮮さを感じ、興味を持って何紙もの新聞に目を通していた。次々に記事を切り抜く生徒がいる一方で、なかなか活動が進まない生徒もいたが、少人数という利点を生かし、一緒に新聞を見ながら興味惹かれるものを探した。「どんなものを切り抜いてもいいんだ」という安心感を得てからは、作業が軽快に進むようになった。タイトルやコメントも自分なりに書き込み、全員が作品を完成させることができた。

個性あふれる作品には、普段は見えなかったり気付かなかったりした生徒の心や気持ちが表れているように感じられた。

できあがった作品は教室に掲示し、年度が終わる頃には壁いっぱいになっていた。

【「ことばの貯金箱」生徒作品】

【教室に掲示された作品の数々】

社会科

社会科では、各自が興味・関心に応じて地理に関するテーマを設定し、本や新聞・インターネット等で調べる活動を行っている。そのまとめの活動として、わかったことを新聞形式にまとめて発表を行った。

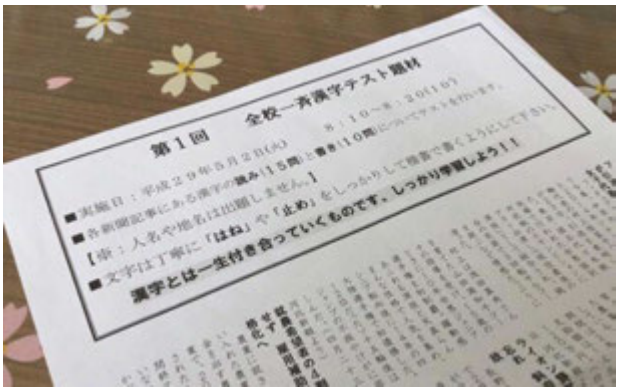
実際の新聞も参考にしながら見出しを付けたり写真を貼ったりし、個人新聞を完成させた。発表が終わった後は、壁新聞として教室に掲示した。

【社会科で作成した個人新聞】

（４）一斉漢字テストの取組

本校では学期に１～２回、新聞記事から出題する「一斉漢字テスト」を行っている。対象は小学６年生から中学３年生までの児童・生徒と全教職員で、１週間前に学習材（新聞記事やコラム２～３種類）を配布する。その中から漢字の読み・書き合計２５問を出題する。

【一斉漢字テストの学習材】



テストは朝読書の時間帯に行われる。採点は放課後、各学級から４名ずつ選出された一斉漢字実行委員が行う。学級や部活動ごとに集計を行い、結果を発表する。

【一斉漢字テストに取り組む生徒の様子】

出題範囲が決まっているため、一生懸命勉強した小学生が、中学生より高い点数を取ることもある。児童・生徒は、対策プリントを作ったり、記事の読み合わせを行ったりしながら意欲的に取り組んでいた。

複数の新聞記事をじっくり読み、意味の分からない語句は辞書で調べることで、語彙力も磨かれる。新聞にあまり興味のなかった生徒が新聞に触れる貴重な機会にもなっていた。

【一斉漢字テストの結果】

第一回　一斉漢字テスト　結果報告

学級順位

	男子	女子	合計	満点者数
9年1組	74.9（1）	87.7（1）	80.6	6人
8年2組	70.3（2）	85.0（2）	76.2	1人
9年2組	68.0（3）	75.4（3）	71.5	1人
7年1組	67.7（4）	69.5（5）	68.3	1人
8年1組	60.2（6）	66.0（6）	62.8	1人
7年2組	65.9（5）	70.5（4）	66.1	0人
6年2組	53.0（7）	58.8（8）	55.1	0人
6年1組	27.7（8）	61.3（7）	43.2	1人

学年男女別

学年	男子	女子
6年生	40.3	59.6
7年生	64.5	66.4
8年生	65.3	75.2
9年生	71.4	81.1
全学年	61.8	72.1

部活動順位

1位	バレーボール部		80.8
2位	吹奏楽部		78.2
3位	ソフトボール部		75.2
4位	ソフトテニス部	女子	74.9
5位	バスケット部	女子	73.7
6位	ソフトテニス部	男子	72.2
7位	柔道部		71.8
8位	ソフトテニス部	女子	71.0
9位	野球部		68.0
10位	バスケット部	男子	64.6
11位	卓球部		63.8

おめでとう！！

結果

学級順位
第１位　９年１組
学年男女別順位
第１位　第９学年
部活動順位
第１位　バレーボール部

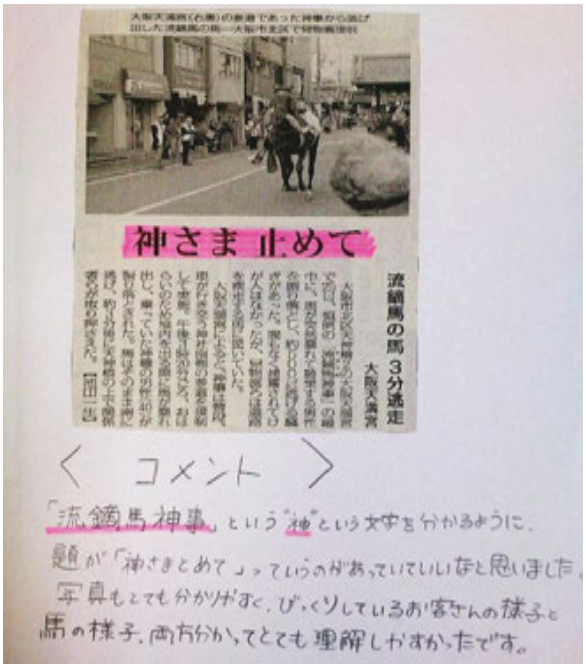
①　業前の活動

本校では、通常は朝読書を行っているが、ＮＩＥ実践の１年目は新聞に慣れ親しませることをねらいとし、１学年において新聞を読む活動を取り入れた。

まずは一人一人に新聞を配り、１０分間読むだけという活動を行った。生徒にとっては学校で新聞を読むという行為が珍しいため、興味深い様子で取り組んでいた。その次の段階として、気に入った記事を切り抜きコメントを書くという活動を取り入れた。友達がどんな記事を選び、どんな感想を書くのかに興味を持ち、楽しそうに取り組んでいた。

全員分の新聞を用意するという課題はあるが、新聞に親しむという観点から、ＮＩＥの導入的活動として有効であると考える。

【切り抜いた記事とコメント】



②　放課後の活動

３学年では希望者を対象に、放課後学習会を行っている。その一貫として国語科では新聞社の「ワークシート」を使用した。読解力を伸ばすことと、世の中の出来事に関心を持ち、視野を広げることが主なねらいである。

ワークシートは、タイムリーな話題を取り上げている上に写真や図が載っていて見やすく、文章の読み取りが苦手な生徒でも抵抗感をあまり感じずに取り組むことができる。また、教材準備に時間や手間が掛からないため、教員側としても継続的な取組が可能である。

現在は希望者だけを対象とし、丸付けも国語科で行っているが、分担することで対象生徒を広げ、全校で取り組むことができる教材であると感じた。

【新聞社のワークシート】

３　成果と課題

（１）成果

ＮＩＥコーナーを設置したことや新聞を活用した授業を行ったことで、世の中の出来事や報道に興味を持ち、新聞を読んでみようとする生徒が少しずつ増えてきた。また、新聞を教材とした学習を通して、普段あまり使わない言葉や知らなかった言葉に触れ、調べたり人に聞いたりしながら語彙を増やしていく生徒の姿が多く見られた。

今後も新聞を広げ、活字の情報をじっくり読む生徒が増えていくことで、学力面の向上だけでなく、情操面や落ち着きのある学校づくりにも効果が期待できる。

（２）課題

学校現場は多忙であり、新たな試みや活動には慎重な姿勢がある。指定が終わった後もＮＩＥ実践を継続するためには、ＮＩＥによる教育的効果を明らかにするとともに、教職員の負担とならない実践の工夫が必要であると考える。

教育的効果については、本校では観察による生徒の変容の見取りにとどまり、客観的なデータの検証には至らなかった。また、教職員の負担軽減の観点では、学校全体で取り組むための共通理解や組織づくりに加え、肩肘張らず取り組める実践を楽しみながら行っていくという共通認識が必要であると感じた。

指定の２年間は終了したが、次年度も２紙の購読を計画しているので、無理なく、生徒も教員も楽しみながら取り組める「持続可能なＮＩＥ実践」を模索していきたい。

（担当　教諭　山家　優子）

（８）宮城県仙台三桜高等学校（平成２９・３０年度実践指定校）

新聞作成を通して社会の課題解決を探究する

１　はじめに

本校は平成２９年度からＮＩＥ実践指定校となり、１学年の「総合的な学習の時間」における探究学習にＮＩＥを導入している。新聞を活用した探究学習は一昨年度から実施していたが、今年度は昨年度の経験を活かし、生徒がより幅広く新聞を活用することをねらいとして取り組んでいる。

２　実践概要

（１）本校の現状

新聞を活用した探究学習は昨年度に引き続き３年目である。本年度も新聞を読み、新聞から得た情報をヒントにさらに情報を収集し、そこから見えてくる宮城県の課題の解決策を考え、オリジナル新聞を作成して発表する活動を行った。本校では wi-fi 環境が整備されており、生徒たちも必要な情報があればインターネットを利用することが多い。実際生徒たちが新聞を読んでいるかどうかを４月当初に訊ねると、殆どの生徒が新聞を読まないという反応であった。そこでＮＩＥを導入することで、まずは新聞を読む機会を作り、そこから社会について興味・関心を持ち、互いにその記事について考え意見を交わすことで多様な考え方を共有することに取り組んだ。

（２）探究学習への取り入れ

１）情報の収集の仕方
２）自分の視野の広げ方
３）互いの意見や考えのまとめ方
４）新聞記者を招いての講演会
５）自分たちの新聞を作って発表しよう
６）「第９回新聞コンクール」への応募

三桜ＡＢＣプログラムによる探究学習の概略は、各学級で８人程度のグループを作り、グループで探究テーマや情報を共有し、協力して情報収集を行い、最終的に新聞として発行し、その発表を行う、というものである。まず７月までは情報収集のやり方や新聞を読んでみるということに主眼を置いて取り組んだ。ＮＩＥ事業で届く新聞６社を生徒各自が読み比べ、新聞で情報収集すること、また興味・関心を持った社会問題に関する記事のスクラップノートを作成し、９月からの探究学習におけるテーマの設定や課題の絞り方に役立てることができた。

そして９月からはＮＩＥを導入し、幅広い情報取集や、論調、レイアウト等の見本として活用することとした。年明けの１月に行われる発表に合わせて、主に情報源として、また情報を発信する媒体の例として新聞を活用してきた。さらに新聞作成に向けて、河北新報社の協力を得て「新聞記者を招いての講演会」を実施することができ、宮城県の課題について、自分たちの身近なことだと考え探究していくことにとても繋がり、最後の発表でも各クラス、各グループとも探究学習の成果が見られた。

（３）情報源としての新聞活用

先にも述べたように、新聞を普段読まない生徒が沢山いる。その要因の一つに家庭で新聞を取っていないということが挙げられる。生徒たちの近くに新聞がないのに新聞を読むわけがないのである。そこで、ＮＩＥを導入するにあたって、可能な限り多くの生徒が自由に新聞と触れ合い、日常的に新聞を目にする機会を増加させるため、１階昇降口と４階１学年フロアに新聞コーナーを設置した。

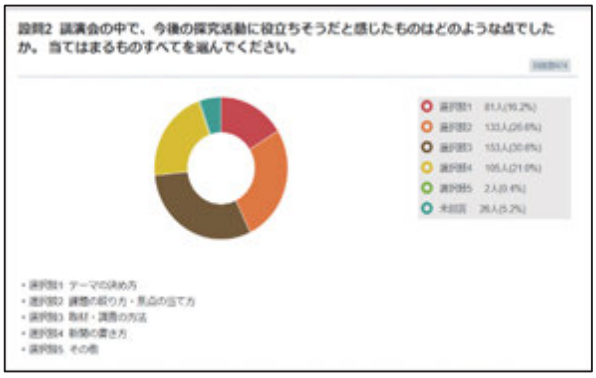
昇降口前のコーナーには、前週の新聞の一面記事を月曜日から日曜日まで貼り出し、担当生徒たちが記事を読んで「考えたこと・感じたこと・疑問に思ったこと」などをざっくばらんに付箋に記入し貼り付け掲示するという取組をした。昨年度は教員側が主導で新聞の一面記事を掲載していたが、今年度は探究学習班で割り振りをし、生徒たちに任せてみることにした。すると、初めのうちは新聞の一面記事を掲載していたのだが、一面記事ではないところが掲載されるようになってきていた。生徒に聞いてみると、一面記事よりも自分たちの興味を持った記事を読んで付箋を貼り掲示したとのことであった。確かにこれだと一面記事だけでなく中の記事にまで目を通し班員で話し合って掲示するので、より多くの情報を目に入れ考えることに繋がる。そこで、「新聞の一面記事の掲示」としてスタートさせたものも「一面記事」に固執せず生徒たちの取組を見守っていった。

（上図：１階新聞コーナー掲示板、下図：記事拡大）

また、４階１学年フロアには当日配達された６紙を置き、探究学習に取り組む１学年の生徒がより自由に、より幅広く、またより深く新聞記事を通じて情報を得ることができるような環境づくりに努めた。休み時間や放課後等の空き時間を利用して自由に新聞を手にとって読む姿や、同じ班のメンバーと協力して複数の新聞を読むことで幅広く情報を集める姿などが見られた。また、複数の記事を複数の生徒が読むことによって、横断的、多面的な視点から新聞記事の情報やそれに対する意見・感想を伝え合う姿も多々見られた。

（４）「新聞記者を招いての講演会」の実施

本年度の探究活動では、新聞を情報源として活用するだけでなく、情報を分かりやすく発信する媒体としての側面にも注目し、探究学習で調べた内容を新聞にして発表するという活動を行う計画を立てた。そこで新聞作成に当たり、どのようにテーマを絞っていけばいいよいのか、新聞の構成や情報の取材法などを新聞記者の方に話を伺うことで理解を深める機会を設けた。実際に記者の方からは新聞各社の取り上げ方の違いや、それぞれの主義主張の違いから新聞を読み比べ、多面的に情報をみるきっかけとなった。また、取材・調査の際に、インターネットだけに頼らず当事者の「声」を聞き紹介することで、より深い探究活動になると教えていただけた。



生徒に上のようなアンケートを講演会実施後に取ったところ、役立ちそうだと感じたものが

主に

・取材・調査の方法……30.6％

・課題の絞り方・焦点の当て方…26.6％

・新聞の書き方……21.0％

という結果が得られた。

＜生徒の感想＞

今まで私にはなかった視点を見つけることが出来ました。取材は部活でやったことがあるので、それを活かしていきたいです。また、今回学んだことをこれからの新聞作りに活かしていきます。

生徒のこれからの新聞作成に大きな影響を与えるものとなった。この効果もあってか、（３）で述べた新聞の一面記事掲載で付箋に書かれる内容も、記事と向き合い深く考えたものになっていた。

（５）自分たちの新聞を作って発表しよう

これまで述べてきた活動を通して、生徒たちは宮城県の課題について探究活動を行った。生徒たちの活動も、インターネットに頼り切らずに、新聞・書籍で調べたり、アンケートを作成して調査したり、市役所や警察署などに直接インタビューを行い課題に迫ったりするなど、多岐にわたって取り組んでくれた。これも「新聞記者を招いての講演会」を経て、生徒たちが当事者の「声」を届けようという想いが芽生えたことが大きいように思える。そして、一人一人が各班の課題について調べたことを共有し、オリジナルの新聞を作成してくれた。

１月１５日に新聞発表のクラス予選会、そして２２日にはクラス代表による全体発表会を行った。クラス予選では、各班の新聞について調べた内容を補足するようなグラフ・表などを書いたポスターを用いながら、テーマ、調査結果、提言などを簡潔に発表した。プレゼンテーション形式の発表をすることで新聞では表せないような視聴覚的な効果を取り入れるなど伝え方に工夫が見られた。

全体発表会では、自転車に関するクイズ形式や不審者撃退法を実際にデモンストレーションするなど発表の仕方にも工夫がみられ、生徒たちも楽しく宮城県についての様々な課題を知ることができたように思う。また、河北新報社から２名の方を審査員としてお招きし、プロの目からみて生徒たちの新聞を審査し、助言と共に賞をいただきました。発表した生徒たちも金賞銀賞など賞をもらったことで、大きな達成感と自信を得ていました。今回の探究学習を通して、河北新報社には多大な協力を頂き、大変感謝しております。

↑全体発表会で閖上地区の写真を基に説明する班

↑講師の方より新聞に対して助言をいただきました

審査の結果、金賞を受賞したクラスの新聞

（６）「第９回新聞コンクール」への応募

夏休み中の課題の一つとして１学年全員が今年度初めて取り組んでみた。生徒一人一人が新聞記事を読み考え、そこに家族や友人などと意見を交わし、他者の考えを聞くことで自分の視野を広げる活動に生かすことができたように感じている。またこれまではテレビやインターネットから情報を得ていた生徒たちも、この取組から新聞を読むいい機会になってこれからも読んでみたいという変化が表れていた。生徒の感想からも、新聞を自宅で購入していないため、新聞を読む機会がないという意見が多数あったが、一人一人新聞を読むことの良さを感じてくれたようである。

【生徒の感想（抜粋）】

● 今まで新聞を読むことがあまりなかったのでとてもいい機会になりました。身近な問題などが多く、たくさんのことを考えるきっかけになる新しい発見もありました。

● 普段なら見て流す情報を考えてみることで、その問題に向き合うことが出来た。これからも、ただ見て流すだけでなく考え向き合いたい。

３　成果

・１学年フロアに新聞コーナーを作ったことで、普段新聞を読まない生徒も、以前よりは新聞を読み活用するようになった。
・数種類の新聞を読み比べることで、同じ内容でも取り上げ方の多様性を感じ取ることができた。
・班別活動を通して、相手に伝わるように説明する力が身につき、生徒同士のコミュニケーション能力の向上につながった。
・記事作成の際に、情報をインターネットだけに頼らず、新聞や書籍、アンケートや取材という形をとるなど、多様な方法で調査する姿勢が身についた。
・社会の課題について興味を持ち、課題解決に向けて何ができるかを深めることができた。
・課題に向けて調べたことを、分かり易く伝えるためにどうするべきかよく考え、工夫を凝らした発表ができた。

最後に、生徒たちの発表を聞いての感想を読んでみると、一人一人が宮城県の課題について真剣に考え、多様な視点から課題解決に向けて迫っていたように思う。そしてこれが一時的なものでなく、将来を担う若者として日々探究し社会のために活躍してくれることを願っている。

（担当　教諭　阿部　正義）

（9）柴田町立柴田小学校（平成２８・２９・３０年度実践指定校）

自分の考えを相手に分かりやすく伝える児童の育成

― 新聞の効果的な活用を通して ―

１　はじめに

本校では、平成２８・２９・３０年度のＮＩＥの実践指定を受け、全教科・領域で新聞を効果的に活用することを通して、自分の考えを相手に分かりやすく伝える児童を育てることをねらいとして研究に取り組んでいる。

昨年度までに、新聞に慣れ親しむための環境作りや新聞を取り入れた授業実践を行ってきたことで、児童が新聞に興味を持って読む姿が見られるようになり、徐々に社会の出来事に対する自分の考えを持つことができるようになってきた。しかし、情報を取捨選択し、それらを生かして自分なりの表現をしたり、相手に分かりやすく伝えるための工夫をしたりする力が十分ではないという課題が挙げられた。

そこで、下記の２つの視点を持ってＮＩＥの実践に取り組むことにした。

（１）自分の思いや考えを伝え深めるための工夫
（２）新聞に慣れ親しむための場の設定

２　実践の概要

（１）自分の思いや考えを伝え深めるための工夫
・１人１授業、全員の授業実践
①学習のねらいに応じた新聞の教材化
②意欲的に取り組むための課題の提示
③見通しを持って取り組むための型の提示

１年生　生活「つくろう　あそぼう」

単元のまとめを新聞形式にまとめる学習を行った。作った新聞を家の人に読んでもらって学習の様子を伝えるという相手意識・目的意識を持ち、意欲的に書くことができた。

２年生　生活「うごく　うごく　わたしのおもちゃ」

自分たちが作ったおもちゃで１年生と遊ぶ「おもちゃランド」に向けて、遊びの紹介新聞を作る学習を行った。１年生に楽しく遊んでもらうための新聞を作るという相手意識・目的意識を持ち、書き方を工夫しながら新聞を作ることができた。

３年生　理科「風やゴムで動かそう」

単元のまとめとして、学習したことを新聞にまとめる学習を行った。学習への理解を深めるために新聞にまとめるという課題を提示し、Ａ５サイズのミニ新聞にまとめた。ミニ新聞は、学習したことを整理してまとめるのに大変有効だった。

４年生　算数「広さを調べよう」

３年生の実践を受けて、複合図形の面積の求め方を考える授業で、授業の振り返りを新聞形式にまとめた。新聞形式にまとめることで、わかったことや大切なことを整理することができた。

５年生　国語「新聞記事を読み比べよう」

新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方などを理解することができた。最後に新聞の良さについて考えを交流することで、新聞の特徴に気付かせることができた。

６年生　国語「資料を活用して呼びかけよう」

新聞記事から課題を見つけ、自分の考えを書く学習をした。身近な環境問題から一人一人の関心に合わせて課題を選ばせたことで、意欲的に書くことができた。

（２）新聞に慣れ親しむための場の設定

①ＮＩＥコーナーの設置

新聞に興味・関心を持たせるために、１階の低学年ホールと２階の高学年ホールにＮＩＥコーナーを設置した。ＮＩＥコーナーには、児童が新聞をいつでも手にとることができるように新聞を並べた他、児童の作品を掲示した。

１階低学年ホール。「つぶやきニュース」を掲示した。

②　ＮＩＥタイムの実施

週に１回朝の１５分間に、各学年でＮＩＥタイムを実施した。内容は、ことばの貯金箱や、つぶやきニュースなど、各学年の実態に応じて取り組んだ。言葉の貯金箱の作品は、各教室前の廊下に掲示した。

ことばの貯金箱（１年）

児童の作品（６年）

③　新聞スクラップ

主に上学年で新聞スクラップに取り組んだ。自分の興味のある記事や授業に関係ある記事をスクラップし、ノートの右半分には記事の内容や感想を書かせた。

５年生の新聞スクラップノート

３　成果と課題

（１）　成果

- 校内研究として、全校で取り組んだことにより、多くの実践を積み重ねることができた。
- ＮＩＥコーナーの設置やＮＩＥタイムを設定したり、新聞スクラップ作りに取り組んだりしたことで、新聞に慣れ親しみ、授業で新聞を活用する際にも抵抗なく取り入れることができた。
- 学習のまとめを新聞形式にすることで、要点を整理しながらまとめる力が向上した。

（２）　課題

- 授業における新聞活用を単発なものに終わらせず、より効果的に活用していくためには、単元の指導計画にしっかりと位置づけていかなければならない。
- 新聞でまとめたり伝えたりすることの良さを児童自身が捉え、実践できるよう工夫する必要があった。

（担当　教諭　門井　菜津子）

（１０）仙台城南高等学校（平成２８・２９・３０年度実践指定校）

生 徒 を 動 か す Ｎ Ｉ Ｅ

１　はじめに

本校は、特進科、探究科、科学技術科の三学科を擁する学校であり、平成２８年度からＮＩＥ実践指定校の認定を受け今年度で３年目となる。

初年度は、主に探究科の生徒たちに自分が興味を持つ記事だけでなく、時事的な話題にも触れさせながら、自ら考え、表現する力を育むことを目標に活動を行った。２年目となる昨年度はさらなる発展・拡充を図るため、探究科以外の学科や学校の委員会活動へＮＩＥ活動を取り入れた。３年目となる今年度は今までの活動を踏襲しつつ、新たに河北新報新聞記事コンクールへの応募や新聞大会への参加、定期試験や大学入試対策の小論文指導への新聞記事活用と、初年度と比べると多岐に渡るＮＩＥ活動を展開することができた。

２　実践の概要

２－１　ＮＩＥコーナーの設置

新聞が多くの生徒の目に触れるよう校舎１階の職員室前、探究科職員室前、科学技術科職員室前の３か所に「ＮＩＥコーナー」を設置している。日々届けられる新聞（河北新報、日経新聞、産経新聞、毎日新聞）や生徒が取り組んだワークシートを誰でも自由に閲覧できるようにした。

図１　各職員室前のＮＩＥコーナー

２－２　新聞大会への参加

昨年度からより多くの生徒たちが新聞に親しみを持ち、記事に対して各自の意見を述べる力を伸ばしていけるよう、教科や学科の枠を超えた委員会活動でも取り組んでいる。

今年度の全国新聞大会は仙台での開催が決定していたことから、河北新報社のご厚意で本校生２０名ほどをご招待いただき、各クラスから選出された生徒たちで構成されるＩＣＴ委員会の生徒たちを参加させた。当日は、ベストセラーとなった「ＡＩ vs 教科書が読めない子どもたち」の著者で国立情報学研究所の新井紀子教授の講演が予定されていた。そこで、参加する生徒たちには事前に、新井紀子教授の著書について書かれた新聞記事に目を通させ、自分の考えをまとめるワークシートに取り組ませた。参加後の生徒たちの感想には、「事前に新聞記事を目にしていたので、講演の内容が良く理解できた」といった記述が見られた。

新聞スクラップをつくろう！

自動化、仕事１割超奪う

OECD27ヵ国分析

日本 15% ・国別だと・ スロバキア 34%

図２　ワークシートの新聞記事

２－３　今年度のＮＩＥ活動の目標設定

今年度は以下の目標を掲げ、各授業でＮＩＥ活動に取り組んだ。

①新聞に親しむ。
②新聞を継続的に読むことにより、自分自身の興味・関心の幅を広げる。
③新聞の構成や役割を知り、情報を主体的かつ批判的に読み取る力を身につける。

２－３－１　探究学習での取組（探究科２年）

探究Ｉの授業では進路指導の一環として、朝日新聞デジタルを活用した小論文指導を行った。

始めに教師側で朝日新聞デジタルの記事から小論文対策に相応しい記事を選出し、２２種のカ

テゴリーにグルーピングした。生徒たちは自分の進路に関連するカテゴリーから記事を選択しワークシートに取り組んだ。

ワークシートは、Ａ３用紙両面印刷されており、２時間程度でまとめられるものである。生徒は分からない語句などを端末でも調べながら時事問題に対して考えを深めた。

自動ブレーキ補助 加速
高齢者へ上限50万円 ■ 独自値引き

図３　小論文指導用の新聞記事

２－３－２　国語での取組（科学技術科２年）

科学技術科２年では新聞記事を３通りの教材として扱った。

①定期試験の問題に「スマホ依存」の記事を引用し、生徒の意見を書かせる問題を出題した。

②学校に届く新聞を使って、課題と意見をまとめさせるグループ活動を行った。

③小論文対策のためのワークシート作成に使用した。

社説
ゲーム障害
病気と認識し対策と予防を

図４　参考にした新聞記事

２－３－３ 国語での取組（探究科３年）

探究科３年では、小論文対策の一環として新聞記事を使用した。教員側で選択した新聞記事に対する生徒各自の考えをグループ内で共有させ、各自の考えの幅を広げさせた。その後、記事に対する自分の意見を意見文としてまとめさせた。この意見文の中から何点かを河北新報新聞記事コンクールに応募した。

顔の見える関係築こう
自主防災組織 初動を確認
ペットも備え万全
犬や猫1万5と避難
避難誘導スムーズに

図５　扱った新聞記事

２－３－４　英語での取組（探究科３年）

コミュニケーション英語Ⅲの授業では、教科書で扱ったトピックを自分の事として捉えるために新聞記事を使用した。

インターネット上のマナーについての英文を読んだ後に、昨今話題となっているＡＩやフェイクニュースについて書かれた新聞記事を読み、その記事に対する意見を英作文で書かせた。また、座席順に英作文リレーを行った。最前列に座っている生徒が新聞記事に対して自分の意見を書き、順に後ろの席の生徒がその意見に対して賛成か反対かを理由と共に英作文で表すことを制限時間内で行った。

３　成果と課題

３年間のＮＩＥ活動を振り返ってみると、最初は限られたクラスのみでの実施であったが、校内の委員会活動への導入や、取り組む教員が増えたことにより、活動が多岐にわたり、生徒たちが新聞に触れる機会が増えた。その結果、生徒たちが互いの意見を話し合う機会を増やすことができたことが大きな成果であったと感じている。また、生徒各自が携帯端末を所持していることと、河北新報社のご厚意により、新聞記事のデータベースにアクセスできたことも大きかった。

今後もＩＣＴを活用しながら生徒たちが新聞記事の内容に関して、相互に意見を交換する場を活発にしていきたい。

（担当　教諭　鈴木　理恵）

（１１）宮城県気仙沼高等学校（平成２８・２９・３０年度実践指定校）

新聞を通して地域や世界に興味を持ち、グローバルに活躍できる人材育成を目指して

１　はじめに

本校では平成２８年度入学生から教育課程を一部変更し、地域を理解しグローバルな視点で物事を考え、学び続ける意思と行動力を持った生徒の育成に取り組んでいる。そのために、学校設定科目「地域社会研究」（１年生１単位必修）を設け、課題研究の手法を学び、探究活動を実践している。また、２年生からは人文類型・理数類型と並ぶ創造類型を配置し、「課題研究Ⅰ」（２年生２単位）、「課題研究Ⅱ」（３年生１単位）で更に研究を進め、最終的には英語で発表する体制となっている。人文・理数類型においても、２年生の総合的な学習の時間でミニ課題研究を行っている。このような探究活動では、情報を収集し比較を行い、考え議論する力が求められる。その力を育成する一つのツールとして新聞を掲げ、平成２８年度から実践指定校として活動してきた。今年度も、昨年度の内容を踏襲しながら、３学年すべてでＮＩＥ活動を行うことができた。

２　実践内容

（１）地域社会研究と課題研究Ⅰ

昨年度に行ったもの（昨年度の報告書を参照）に加え、５月 23 日に読売新聞社東北総局長小野一馬氏（当時）にお越しいただき、特別講義を行った。「問題発見 → 調査・分析 → 根拠を持つ → 発表・報告」のように研究活動と新聞記事を書くことは、同じプロセスであると考え、依頼した。

当日は「ニュースをどう報じるか　新聞記者のアプローチ」と題して、記事作りのポイントを当日の新聞を用いて解説していただき、研究活動とリンクする内容で講話していただいた。あまり新聞を読まない生徒にも、親しみがわき研究活動の進め方を理解できていたようであった。

図１　特別講演会の様子

（２）化学での実践

理数類型・創造類型では、２年生で化学基礎２単位・化学２単位、３年生で化学４単位の授業がある。受講する２年生 126 名にアンケートを取ったところ、新聞を読まない 50%、月に数回 30%、週１・２回 13%、週３回以上６%であった。

①「化学と社会の接点を考える」

単元名：物質の構成粒子（夏季課題　７月）

化学基礎のはじめに原子の構造や元素名について学ぶ。その中にリチウムがあり、リチウムイオン電池としてスマホ等で使われている。河北新報 2018. 4. 13「モバイル改革の原動力」と題して、リチウムイオン電池の原型を開発した吉野氏が日本国際賞に選ばれた記事と、毎日新聞 2018. 4. 14「リチウム　天上の争奪戦」と題して、中国が中南米やアフリカでリチウムに投資している記事を課題とした。前者は、なぜ様々ある電池の中でリチウムイオン電池が良いのかがわかると同時に、航空機内での発火事故などデメリットも学ぶことができる。夏休み明けの授業で電池の仕組みを学ぶため、導入への布石でもある。化学の授業では、前者の内容のみの扱いが一般的であるが、後者のような記事を同時に扱うことで化学と社会との関連を考える機会として設定した。

生徒の作文には、「リチウムイオン電池の仕組みが分かった」「機能性が優れていることが分かった」などの表面的な記述もあったが、「河北新報の記事から、まるで日本が世界のリチウムイオン電池の主導権を握っているかのように思ったが、毎日新聞の記事から、中国がお金や権力で地下資源を持っている発展途上国との関係を強化していることがわかった」など、２つの記事をつなげて考えているものもあった。更に「ボリビアでは採掘に大量の水が必要なため、水の枯渇や汚染などの危険性が指摘されている」と自ら調べたものや、「１種類の動物絶滅が周囲の生態系へ影響を与えるのと同じで、１種類の元素が存在していなければ私たちの生活も、今とは大きく異なるかもしれない」「日本の利益が減るのは嫌だけれど、開発が遅れた山間地帯に多くの雇用を生み出しているので、現地の人の利益が多く出るのなら中国に主

導権を奪われてよい」「地下資源が豊富なのに技術のない国が、中国にどんどん資源を取られてしまうことで、格差が拡大するのではないか」と視点を広げて考えた作文もあった。

②「エネルギーについて考える」

単元名：酸化還元（10 月）

酸化還元反応で電池の仕組みや蓄電池、燃料電池を学び、エネルギーについて考える単元である。九州電力が 10 月 13 日に太陽光発電で得られた電力を捨てる出力制御を行ったことが各紙で報じられたため、エネルギーを考える素材として選んだ。この記事には３つのポイントがあると考えた。一つ目に、９月に北海道胆振東部地震で大規模停電が起きたことからも、需要と供給のバランスが重要であり、再生可能エネルギー発電をただ増やせば良いわけではないこと。二つ目に、国のルールが太陽光発電よりも原子力発電を優先させていること。三つ目に、固定価格買い取り制度を使い売電している事業者にとっては、出力制御が頻発すれば収入が少なくなることである。

これらの情報は１紙からでは得られないため、読売・朝日・毎日・河北の４紙を用意し、ジグゾー法（次の③、〔活動〕に記載している班を組み替える方法）を用いて授業を展開させた。授業前後で「現時点で一番良いと思う発電方法はどれか」と質問したところ表１のようになった。

表１　一番良い発電方法の授業前後における変化

		授業前							
		火力	水力	風力	太陽光	地熱	潮力	原子力	
授業後	火力	14	0	1	2	1	0	0	18
	水力	1	9	0	4	0	0	1	15
	風力	0	0	0	4	0	0	1	5
	太陽光	1	6	5	19	2	0	8	41
	地熱	0	6	3	5	2	0	2	18
	潮力	0	3	0	1	1	0	2	7
	原子力	2	1	1	2	0	0	8	14
		18	25	10	37	6	0	22	

合計 118 名中 52 名は授業前後で同じものを選んだが、残りの半分は違うものを選んだ。それぞれの発電方法の長所短所や全体のバランスなどを学んだことで、多くの生徒が発電方法について考える機会になったと考える。

③「二酸化炭素が地球に及ぼす影響について考える」

単元名：溶液の性質（12 月）

本単元では、気体の溶解度について学習する。大気中の二酸化炭素濃度が増加し、地球温暖化が叫ばれているが、海洋への二酸化炭素の溶解はあまり扱われていない。水温が低いほど気体はよく溶けるため、海水温が高くなると溶解度は小さく、海水中の二酸化炭素の放出や溶解しないことにより、さらなる大気中の二酸化炭素濃度の上昇も考えられる。このように、社会の出来事に関心を持ち、様々な情報から自ら判断し、変化を予測し意思決定する力を養うことを目的とした。また、国連気候変動枠組み条約第 24 回締約国会議（COP24）が 12 月 2 日～14 日に開催されたため、新聞各紙に地球温暖化に関する記事が多く掲載された。教科学習の内容と社会の動きの関連付けを行い考察することで、社会の事象への興味関心を誘発することも狙いとした。

〔用意した新聞記事〕

「海洋酸性化」河北新報 2017. 1. 18

「CO_2 埋設技術」読売新聞 2018. 4. 6 夕刊

「IPCC 特別報告書」毎日新聞 2018. 10. 10

「CO_2 の測定技術」読売新聞 2018. 12. 2

〔活動〕

宿題　　図２のプリントに取り組んでくる

活動１（10 分）　３～４人の班を作り、資料を１種類配り、班ごとに違う紙面がいきわたるようにする。その内容についてワークシートにまとめる。次の活動で他者に１分で伝えることを意識させ、まとめさせる。

活動２（10 分）　４種類の新聞がそろうように班を再編成して、それぞれの資料の内容を１分間で班員に伝える。聞き手はワークシートに記入する。

活動３（10 分）　100 年後、二酸化炭素濃度は増加すると思うか減少すると思うか、その理由と、2030 年の地球の環境を予測させる。個人で考えた後、班内で発表する。

あるクラスでは、増加と減少は半々であった。増加すると考えた生徒は、「技術開発が進んでも世界の人口増加が影響する」「世界で二酸化炭素排出量を把握できていない国がまだある」「中国やアメリカの大国が賛成しない」という理由を挙げていた。減少す

ると考えた生徒は、「今の技術よりも向上した技術が開発されている」「今後ＡＩなどの人工知能が進歩して、よりよい地球温暖化の解決策が見つかる」という理由を挙げていた。

長期的な視点としては様々あるものの、2030年までは二酸化炭素濃度が上がり続けるとの予測があり、改めて地球温暖化に様々な面からアプローチしなければ解決しないことを感じていた様子であった。

図２　宿題のプリント（二酸化炭素が海洋の表層にどれぐらい溶けるのかの計算と毎日新聞 2018.10.10 から IPCC の特別報告書についての読み取り）

（３）朝学習での新聞活用

ねらい：社会の出来事を知り見聞を広げることで、自ら考えを持つことができるようになる。
期　間：通年（毎週月曜・火曜　10分間ずつ）
対　象：３学年全員（８クラス 311 名）

１人に１冊ずついきわたるように新聞を用意して、朝学習の時間に読めるように準備した。週ごとに新しいものを入れながら、クラスごとにローテーションしていき、常に違う新聞と触れられるようにした。就職試験や小論文対策にとっても有効であり、生徒の進路希望先と関連した新聞記事を自ら探し配る担任もいた。また、自らスクラップをしている生徒も数名見受けられた。

（４）国語科週間課題での取組

ねらい：新聞に親しみ、自らの知識を広げて考えを深める。
期　間：通年（約 20 回）
対　象：１学年全員（６クラス 240 名）
　　２学年全員（７クラス 281 名）

毎週月曜日に、地域に関係する記事や考えてもらいたい記事を教員が選び、問いを作成する。生徒は、次週月曜日まで取り組み提出、それを添削し生徒に返す。扱った新聞記事の一例を表２、３に挙げる。

図３は、１年生の課題の一つで、問１「見出しの「ふろぷろ」について、始まったきっかけとその内容を説明しなさい」、問２「発表者の高校生は、どのような視点からプロジェクトを提案しているか」、問３「気仙沼高校でも、地域社会研究、課題研究Ｉなどにおいて、高校生が研究課題を自ら発見し、解決法や具体的な取り組みの提案をし、発表する機会があります。高校生が地域社会について考えることは、行政や企業団体にとってどのようなメリットがあると考えるか。社会人と高校生の違いを挙げながら自分の考えを説明しなさい」との問いになっている。

図３　取組の様子（１年生）

表２　１年生で扱った新聞記事の一例

新聞	記事の内容
毎日 2018. 4. 13	過疎地の足 救う
毎日 2018. 4. 30	女性の活躍　地方の課題
朝日 2018. 5. 13	増えぬ給料　減るゆとり
三陸 2018. 6. 22	気仙沼市立病院跡地の利用
河北 2018. 7. 8	放射光が照らす未来
河北 2018. 8. 27	秋田の高校生の活動紹介
河北 2018. 10. 7	東北へ導け訪日客
河北 2018. 12. 1 河北 2018. 12. 3	小中学校へのエアコン設置

表３　２年生で扱った新聞記事の一例

新聞	記事の内容
読売 2018. 2. 15	集落独自の事業で財源
朝日 2018. 4. 9	車売らない　トヨタ販売店
朝日 2018. 4. 18	理不尽な校則 子供を苦しめる
毎日 2018. 4. 25	民法改正案　審議入り
朝日 2018. 5. 6	「伝統」が発明される時代
河北 2018. 7. 1	スマホが学力を破壊する
読売 2018. 8. 9	海賊版漫画サイト対策
読売 2018. 10. 10	採用指針の撤廃

図４は、２年生の課題の一つで、問１「傍線部①とあるが、日本でブロッキングの法制化はどのような困難があるか。３行以上で説明しなさい」、問２「傍線部②とあるが、日本とドイツではどのような点が異なるか。「通信」「プライバシー」を必ず用いて、３行以上で説明しなさい」、問３「傍線部③とあるが、あなたはブロッキングに賛成ですか、反対ですか。反論をふまえ６行以上で書きなさい」との問いになっている。

１・２年ともに、多くの生徒はまじめに取り組み意見をしっかりと書いている。特に、２年生は昨年度からの継続のため、反論を考えさせるようなレベルが少し高めの設定となっている。このような取組が、３年生４・５月に総合的な学習の時間で行う、ディベート活動にも活かされてくる。

３　まとめ

今年度は、気仙沼西高校との統合があり、クラス数の増加や指導環境の違いがある中ではあったが、スムーズに行うことができた。３年目に入り、課題研究活動を指導する教員からも、生徒へ「新聞デー

図４　取組の様子（２年生）

タベースを調べてみたら」というような言葉が自然とでるようになった。また、本報告書には挙げていないが、読売中高生新聞の「平成時代アンケート」への協力やコメントの掲載、投書活動を行った。昨年度に続き、第９回「いっしょに読もう！新聞コンクール」(一般社団法人日本新聞協会主催)に１・２年生で応募し、奨励賞に１名が選ばれ、学校としても優秀学校賞に２年連続で選ばれた。

３年間ＮＩＥに取り組んできた生徒が間もなく卒業することになるが、ＮＩＥを含めた様々な教育活動が相互に結び付き、思考力や想像力の育成に寄与している。例えば、資金集めから行った「地産地消フェス in 気仙沼」、子どもの居場所づくりの「笑顔っこフェスティバル in 気仙沼」、地元の野菜を知ってもらうための料理教室、防災袋を外国人と考えるイベントなど、生徒自らがイベントを企画・実施するレベルにまできた。また、外部団体主催のイベントにも積極的に参加し、外部でアイディアを発表し、全国大会で入賞した生徒も複数いた。更に、大学入試においても良い影響が出始めていると感じる。新聞活用が根付いてきたため、次年度も様々な形で展開されることを期待したい。

(担当　教諭　三嶋　廣人)

２　部会活動実践報告

（1）宮城県ＮＩＥ推進委員会・小学校部会

平成３０年度　小学校部会報告

仙台市立七北田小学校　教諭　今藤　正彦

１　新聞活用授業について

小学校部会では、平成２５年度から、５年国語の「新聞記事を読み比べよう」の学習において、児童全員に新聞を配り教材として活用することで、ＮＩＥ活動の推進を図っている。

昨年度は、部会運営委員が所属しない学校も含め、県内３４校に 2688 部の新聞を提供した。

２　今年度の取組

今年度は、県内４５校に 3684 部の新聞を提供した。また、指導案や版違いの新聞、号外のデータを希望する授業者に提供した。実施した学校は、下記のとおりである。

二俣小、柴田小、松島第一小、戸倉小、船岡小、山王小、三本木小、豊里小、青生小、八木山小、旭丘小、大沢小、国見小、虹の丘小、南中山小、鶴が丘小、高砂小、鶴巻小、六郷小、市名坂小、柳生小、上野山小、富沢小、八幡小、鶴谷東小、川前小、新田小、秋保小、片平丁小、茂庭台小、東仙台小、中山小、黒松小、大野田小、野村小、長町南小、幸町小、錦ヶ丘小、湯元小、南光台小、北仙台小、上杉山通小、東六番丁小、南材木町小、七北田小

＜成果＞

・新聞を購読していない家庭が増えており、実物の新聞を手にしたことで、児童の学習意欲が向上した。また、教科書本文の内容を、実感を伴って具体的に理解させることができた。

・４月に仙台市内の小学校の５学年主任宛に新聞無料提供の文書を配布したことにより、提供部数が大幅に増加した。

・河北新報だけでなく、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞を活用した学校が複数あった。各新聞社の教材用申込書を事前に準備して対応した。

・新聞提供を希望した学校への文書発送を、今年度はＥメール（仙台市内は校務支援システム）で行ったことで、迅速に発送し、発送する仕事の負担を軽減することができた。

・参考資料として、新たに平昌五輪の羽生結弦選手金メダルの号外等を追加した。

・提供部数増により小学校部会の予算を大幅に超過したが、事前に宮城県ＮＩＥ委員会の今年度予算で配慮していただいた。

＜課題＞

・新聞の教材用価格や購読条件が新聞社によって異なり、同じ日付の新聞でも購読部数によって単価が異なる新聞があった。支払時の トラブルを防ぐため、事前に教材用価格や購読条件について正確に把握しておく必要がある。

３　次年度に向けて

次年度も、小学校部会として今年度と同様の新聞提供を計画している。新聞を効果的に活用することで、児童の知的好奇心や学びに向かう力を高めるとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に役立てられるよう、ＮＩＥ活動のより一層の推進を図っていきたいと考える。

新聞の違い発見 面白い

宮城 授業に使う学校46校に

宮城県内で、児童一人一人が新聞を使う授業が今年も順調に増えている。6月末現在で既に46校に達し、2017年度の34校を大きく上回った。

仙台市高砂小（児童426人）5年1組の国語の授業。村上幸宏教諭(48)は、同じ日の朝刊2紙を使い1面の題字、日付、号数などをそれぞれ児童に読み取らせた。児童は新聞をめくり、違いや共通点を探した。

太田和君(10)は「二つとも個性があって、どっちも面白みがあった」と話した。斎藤璃音さん(11)は毎日、新聞を読んでいるという。「共通しているところも違うところもあって、面白かった」

村上教諭は「二つだと比較したくなる。本物の新聞を2紙使ったからこそ、意欲的に児童が活動したと思う」と手応えを感じた様子だった。

教員でつくる宮城県NIE推進委員会小学校部会（部会長・相沢経利仙台市七北田小校長）は、15年度から児童1人が新聞1部を使う授業に本格的に取り組んでいる。新聞を使う小学校は年々着実に増えている。

楽しそうに新聞をめくる児童

高砂小の掲載記事（2018. 7. 10 河北新報朝刊）

（2）宮城県ＮＩＥ推進委員会・中学校部会

平成３０年度　中学校部会報告
共創～ＮＩＥで共に創り上げる文化祭～

大崎市立岩出山中学校　教諭　齋藤　美佳

１　はじめに

社会の縮図と言われる新聞を活用することで、世の中の出来事について考えたり、自分の生き方を振り返ったり、さらには、自分の考えや思いを発信したりすることができる。また、各記事には、興味や関心を高める見出しや写真などがあるので、生徒も記事の内容に迫りやすい。よって、新聞の活用は、主体的で対話的な深い学びの充実につながる。

今年度、本校では、朝の学習活動の時間を「ＮＩＥタイム」と位置づけ、全校で共通の新聞記事を読み、感想や考えを書いて発表する学習活動を実践した。この活動をきっかけに様々な場面で新聞を活用した取組が進められ、今年度の文化祭は、ＮＩＥを生かしたステージ発表や展示発表を行うことができた。文化祭での主な発表を紹介する。

２　主な発表の概要

【文化祭・ステージ発表部門】

●Poems（第3学年）

新聞から魅力的な写真を選び、決められたルール（五行詩）に従って、英語で詩を書いた。作成した詩を互いに伝え合い、新聞の写真と詩の内容を理解し、味わうことができた。優秀作品に選ばれた生徒は、文化祭で発表した。

●新聞記事コンクール～インパール作戦～

２０１８年新聞記事コンクールで河北新報社賞を受賞した今野真佳さん（３年）の作品「インパール作戦」の発表を行った。新聞を活用した学習やＮＩＥタイムを通して身に付けた力についても語った。

【文化祭・展示発表部門】

●全校制作「ことばの貯金箱」

全校生徒で体育館に集合し、「ことばの貯金箱」を体験した。「ことばの貯金箱」とは、新聞からワクワクすることば、心に響いた大切なことばを自由に切り抜いて台紙に貼り、自分の思いを書き添える活動である。「チャリーン♪」と言いながら切り取ったことばを貯金箱に楽しく集めた。そして、自分の心と向き合いながら、集めたことばを使って自分の思いや考えを１枚の台紙にまとめた。

本校では、生徒会執行部と美術部の協力により、マーブリングで色づけをしたハガキサイズの台紙を使用した。この「ことばの貯金箱」は、文化祭の全校制作として展示し、保護者や地域の方々にも見ていただいた。

３　おわりに

様々な分野の情報が印象的な写真付きでタイムリーに収集できるという新聞の魅力によって、生徒の学習意欲が高まり、「主体的な学び」ができた。また、生徒同士の協働作業や関わり合いによる課題解決型の学習により、自己の考えがさらに広がる「対話的な学び」もできた。

本年度は、新聞に関連した様々なコンクールで学校賞や個人賞を受賞し、大きな成果が得られた。これまでの学びの集大成として、ＮＩＥを生かした文化祭も創り上げることがきた。今後は、新聞を活用した学びの成果を次年度の教育課程にどう生かしていくかについて検討していきたい。

新聞で作った作品
By　美術部

（３）宮城県ＮＩＥ推進委員会・高等学校部会

平成３０年度　高等学校部会報告

仙台城南高等学校　教諭　鈴木　理恵

１　はじめに

今年度の高校部会研修会は、平成３０年１２月１２日（水）に河北新報社１階のセミナールームで行われた。昨年度の研修会を踏襲し、実践発表と講演の２部構成とした。講演の講師を時事通信社の渡辺知毅支社長に打診したところ、仙台に移られて間もなかったにもかかわらず快諾していただいた。

２　実践発表

実践発表はＮＩＥアドバイザーである名取北高校の大槻欣史先生と仙台三桜高校の高瀬琢弥先生の２人にお願いした。

はじめに大槻先生から「ＮＩＥからＮＩＣへ」という題で、高校現場で実践できる活動事例を紹介いただいた。冒頭に、三つの「C」というキーワードの提示があった。三つの「C」とは、Coincidence（偶然の一致）、Choice（選択）、Chat（雑談）である。授業に新聞を活用するとなると、教師側で前もって記事を選定し、読み込みながら関連事項を調べなければならないと考えてしまいがちである。これではとかく時間がかかり負担も大きい。そこで、目にした記事を気軽に選択し、生徒へ提示して話し合わせる場をつくることが大切だという内容であった。

次に高瀬先生から「ＮＩＥとＩＣＴを活用した探究的な学びの実践」という題で、１１月７日（水）に行われたＮＩＥ宮城県大会での公開授業に関する実践報告があった。授業の内容は「報道か人命か」についてであった。授業の冒頭に、報道カメラマンのケビン・カーターがピュリッツァー賞を受賞した写真を生徒に提示し、写真にまつわる論争「報道か人命か」に関して考えさせていた。展開時には震災当時の新聞記事を読ませ、その記事を執筆した記者の話を聴き、執筆時の心境を理解させていた。最後に、「報道か人命か」について意見をまとめさせ Classi に提出させていた。

仙台三桜高校は平成２９年度からＮＩＥ実践指定校となり、探究学習と結びつけたＮＩＥ活動を行っている。学習支援プラットフォーム Classi を導入している。生徒は各自が所有するスマートフォンから Classi へアクセスし、授業後の振り返りアンケート等を提出している。

発表の中で、高瀬教諭から教材選定や発問の意図について説明があり、今後の授業に大変参考になった。

３　講演

時事通信社仙台支社の渡辺支社長から「新聞記事の価値と役割について」という題でご講演いただいた。通信社の歴史からはじまり、通信社の取材網や新聞記事の価値と役割まで、多岐に渡るお話であった。ふだん耳にすることができない報道業界の実際について語られ、大変興味深く拝聴した。また、一本の新聞記事ができるまでに、多くの人の手によって何度も練り直されているという話は、無責任な発言によって炎上が日常的となっているネット社会を生きる生徒たちに聞かせたい内容であった。また、読解力についても言及されており、身近な教材として新聞を扱い、学びのきっかけにしてほしいと述べられていた。また、情報リテラシーは若いうちから学ぶ必要があること。新聞はネットと違い、一貫性があるということ。多くの種類の新聞を読み比べることで視野が広がり社会性が身につくことも話されていた。

講演の様子：時事通信社仙台支社長　渡辺知毅さん

４　最後に

今年度も有意義な研修会となりました。講師を快諾いただいた渡辺知毅支社長をはじめ、ＮＩＥ事務局の方々には大変お世話になりました。

ありがとうございました。

３　大学からの報告

学生も気軽に学べる「土曜しんぶんカフェ」

ＮＩＥ教育コンサルタント　東北福祉大学　渡邉　裕子

１　はじめに

ＮＩＥの学びの場として、2017 年４月に「ＮＩＥ工房」改め「土曜しんぶんカフェ」（河北新報社主催で年間 10 回程度実施）がスタートしてから丸２年が過ぎようとしている。会場がカフェ風の空間にリニューアルされたことで、学生なども気軽に参加できるようになった。本学でＮＩＥを学んでいる学生も度々参加しては多くの学びを得ている。

２　ある日の「しんぶんカフェ」から

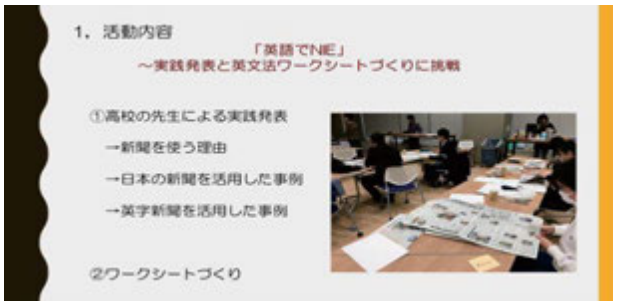
～講師の大槻先生に感想と謝辞を述べている本学学生（4 年）～

この日は、宮城県名取北高校英語科の大槻欣史先生（写真右）が「ＮＩＥと英語」をテーマに講演。参加者はその後ワークシートづくりに挑戦。ＮＩＥのベテラン講師からのお話に、参加した学生たちは異口同音に「英語科でこんな新聞活用ができるなんて」と、興奮気味に感想を述べていた。

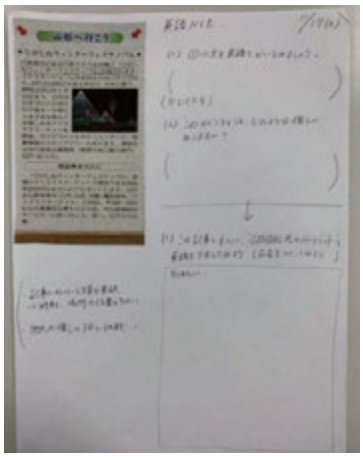
３　参加した学生が授業で伝達

ここ２年、参加した学生からは授業の冒頭 10～15 分の時間を使って、カフェで学んできたことを他の学生に伝達してもらっている。この日はＳ・Ｓさん（３年）が自作スライドを使ってのプレゼン。「皆が真剣に聞いてくれたので嬉しかった。このプレゼンを経験したことで『カフェ』への参加意識がさらに高まった」とＳ・Ｓさん。学び合いの連携とでも言えるか、一方では、プレゼンがきっかけで「カフェ」に足を運ぶようになったという学生も。

～「しんぶんカフェ」で学んできた事を報告する学生と真剣に聞き入る学生たち～



～Ｓ・Ｓさん自作のスライドの一部（上）と英語ＮＩＥのワークシート（下）～



４　おわりに

今回参加した学生たちからは「行く前はとても緊張したが、カフェということで先生方と気楽に意見交換が出来た。とても勉強になった」と感想が。一方の先生方からは「このような環境で学生とＮＩＥを学び合えるのはとても刺激になる」との感想が。「カフェ」という柔らかなこの学びの環境から、ＮＩＥが今後どのように展開されていくのか、３年目の広がりに期待したい。

Ⅳ　研修会報告

１　宮城県ＮＩＥ研究大会

（１）　大会の概要

事務局　飯坂　　新

平成３０年度の宮城県ＮＩＥ研究大会は、１１月７日（水）に、宮城県仙台三桜高等学校を会場に開催された。午後１時５５分、高瀬琢弥主幹教諭による第１学年の「総合的な学習の時間」の公開授業開始。参加者は会場校の先生方を含め約６０名。

授業内容はＮＩＥとＩＣＴを活用した探究的な学びの実践で、授業の導入では報道写真家ケビン・カーター氏の「ハゲワシと少女」の画像を映し出した。その後、生徒に同じ立場なら報道と少女への救済とどちらを優先するかの問いを投げかけ、その当時の南スーダンの状況を調べ学習させることで、写真家の撮影時の気持ちに思いを巡らせ「報道を優先すべきか人命を優先すべきか」問いに向き合わせた。

授業の後半は、河北新報社 2011.3.15 の東日本大震災記事「動かぬ子強く抱く」を読ませ、さらに当時の取材記者をゲストティーチャーに招き取材時の話を聞かせ、ジャーナリストは「報道を優先すべきか人命を優先すべきか」の本質をつく課題に向き合わせる探究型の授業の提供であった。

参会者からは、「スマホを各自使いタブレット、パワーポイントとＩＣＴを活用した授業はとても興味深く、総合的な学習の時間での取組は勉強になった。」「人命か報道かという大変難しいテーマだったが、とても興味深く授業を見た。ゲストティーチャーの話を真剣に聞き、その本音の話でしっかり向き合う（深める）ことができたと思う。生徒たちの姿が良かった。」との感想も述べられていた。

１　日　　時　　平成３０年１１月７日（水）

２　会　　場　　宮城県仙台三桜高等学校

３　公開授業　　１３：５５～
　　第１学年　「総合的な学習の時間」
　　～ＮＩＥとＩＣＴを活用した探究的な学びの実践～
　　授業者　高瀬　琢弥　主幹教諭

４　全 体 会　　１４：５５～
　　閉会の挨拶　宮城県ＮＩＥ委員会　会長　志小田美弘　氏（石巻中学校長）
　　公開授業についての質疑応答
　　全体講評（宮城県富谷高等学校　校長　粟野　琴絵　氏）

５　講　　演　　１５：５０～
　　講師　　実践女子大学教職課程　教授　柏崎　秀子　氏
　　演題　「ＮＩＥと授業改善」

６　閉　　会　　１６：５５～
　　閉会の挨拶　宮城県仙台三桜高等学校　校長　阿部　　智　氏

（2）公開授業報告

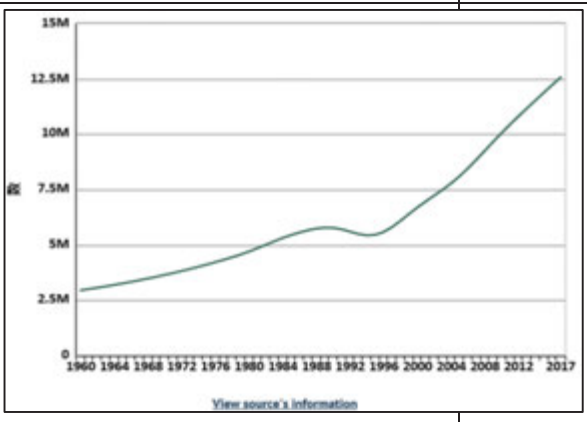
① 第１学年「総合的な学習の時間」学習指導略案　～ ＮＩＥとＩＣＴを活用した探究的な学びの実践 ～

日　時:平成 30 年 11 月 7 日(水)6 校時[13:55～14:40]
授業者 : 高瀬　琢弥（場所 : 西校舎３Ｆ合同講義室Ｉ）

1　授業について

研究テーマ	ＩＣＴを活用した、協働的な情報の収集と分析作業の試み
本時の学習目標	・新聞等を拠り所に、協力して、主体的に事実を探究しよう。 ・報道の本質を理解し、「報道か人命か」という正解のない課題に向き合おう。
伸ばしたい生徒の力	・新聞媒体の本質（真実追究や社会的伝達活動）を考察することにより、今後の新聞づくりに主体的に取り組む姿勢を育む。 ・事実を探究するための方法を知り、多角的かつ論理的に分析する力を高める。 ・協働作業やプレゼンテーションを通してコミュニケーション能力を高める。

2　授業の流れ

	学習内容・学習活動	授業の展開・留意点
Ⅰ（導入）	[本時の授業内容の説明] ＜報道優先例として＞ 	◆ケビン・カーターが撮影した「ハゲワシと少女」の写真を PowerPoint（以下 PP）で提示する。 ※左写真にまつわる論争「報道か人命か」に関して、考えさせるとともに、本時の目標を理解させる。 出典:NATIONAL GEOGRAPHIC 日本語版サイトより
Ⅱ（展開①）		◆南スーダンの人口推移のグラフを PP で提示する。 ※1990 年から 1994 年にかけての人口の減少に着目させ、その原因を主体的に探究させる動機づけとする。 出典：https://data.worldbank.org/country/south-sudan World Bank Data サイトより
	[1990 年頃の情報収集] ※Wi-Fi を利用して情報を収集する。また、河北新報データベースを活用し、分かったことをワークシートに記入する。その後 Google スライドにも入力する。	◆南スーダンの歴史、1990 年の平均寿命、GDP、５歳未満児死亡率を調べさせる。また（現在の南スーダン首都）ジュバの状況や難民数等に関して、河北新報データベースを使って調査させる。 ※1994 年頃の南スーダンの状況を示す河北新報の記事や世界の統計サイト等を利用し主体的に探究させる。特に、独立前であるので、南スーダンの GDP のデータはなく、スーダンの統計を参照するよう、多角的、論理的に思考させる。

Ⅱ（展開①）	［結果を共有する］ ※Google スライドを活用して、他の班の情報を共有する。	◆ワークシートに記入した南スーダンの歴史や 1990 年頃の状況を Google スライドと PP で確認させる。 ※Google スライドを利用して、他の班の情報を共有させるとともに、PP での説明により南スーダンの状況を把握させる。 ◆カーターの「ハゲワシと少女」がピューリッツァー賞を受賞した後、たくさんの義援金が集まったことを、カーターの友人ジョアオ・シルバの証言から、PP で確認させる。 ※カーターに関する本「絵はがきにされた少年」（集英社 藤原章生 著）の中で紹介されている義援金に関する一節を抜粋し、生徒に確認させる。
	［結果を分析し、発表する］ ※自分の意見をワークシートにまとめ、他の班のメンバーにも発表する。	◆写真を撮った時のカーターの心情を考察し、班内で意見を共有し、他の班でも発表させる。 ※南スーダンには多くの飢餓状態の子供がいて、ケビンの報道により多くの命が救われた事実を把握しつつ、カーターの心情を汲み取らせる。
Ⅲ（展開②）	［現実に身の回りで起こった東日本大震災の記事で再び「報道か人命か」を考える］ 動かぬ子 強く抱く 12日午前8時すぎ。気仙沼市岩井崎付近の道路を車で走っていると、がれきの海と化した住宅地の方から、オレンジ色の毛布を抱えた男性3人に呼び止められた。 「車に乗せてくれ」「避難所まで、早く出せ」 ヘルメット姿で疲労感をにじませた男性の一人が必死の形相で訴えてきた。毛布にくるんでいたのは子どもだった。保育園の名札が見えた。ほとんど動かない。 発車前、付き添いとみられる男性に子どもの状態を尋ねた。首を横に振った。絶望的なのか。つらい思いでアクセルを踏んだ。 「寒いのか?」。移動中も男性はそう言って、顔を埋めるようにわが子を抱いた。2、3分後、避難所の階上中体育館に着いた。 医師が子どもの目にペンライト、胸に聴診器を当てる。ゆっくりと首を横に振った。男性は声もなくむせび泣き、動かない子どもを力いっぱい抱きしめた。 周りの人たちが、子どもの顔についた泥を丁寧に拭き取った。 （武田俊郎、丹野綾子）	◆ワークシート裏面の「動かぬ子　強く抱く」河北新報(2011.3.13)の記事を読ませる。 ※震災当時の気仙沼の状況を写真から把握し、記者がどのような気持ちで現場に向かい、子どもを搬送したのかを考えさせる。 ◆「動かぬ子　強く抱く」を執筆した記者丹野綾子さんが登場する。 ※実際の記者から話を聴き、当時の心境を理解させる。 ◆最終的に「報道か人命か」について改めて意見を Classi[注]にまとめさせる。 ※紛争・災害での報道においては、三者（記者・取材対象・被災（害）者たち）の命が関わっていることを念頭に、意見をまとめさせる。 ＜人命優先例として＞ 出典：河北新報(2011.3.13)
Ⅳ	［授業の振り返り］ ※Classi を利用する。	◆学習目標に近づけたか、本時の振り返りを Classi に入力させる。

［注］Classi とは Classi(株)が提供している、学習支援プラットフォームです。本校では実質２年間使用しており、学習記録・学習動画・各種アンケート等で利用しております。Classi(株)は(株)ベネッセホールディングスとソフトバンク(株)が共同で設立した合弁会社です。

② 授業の概要

報告者　宮城県仙台三桜高等学校　主幹教諭　高瀬　琢弥

１　はじめに

平成３０年度の宮城県NIE研究大会が１１月７日（水）に本校を会場に開催された。本年度の公開授業は「ＮＩＥとＩＣＴを活用した探究的な学びの実践」のテーマのもと、総合的な学習の時間（以下総学とする）に実施された。本校の総学は、１学年で「地域における社会問題の理解を深化させ、解決策を創出させる」ことをめざし、その実践の一環として、河北新報社と連携し、ＮＩＥを推進してきた。また、２学年では「地域連携型探究活動を通して、地域社会の課題発見と、解決策を創出させる」実践として、本校近隣の鹿野地区連合町内会、仙台市野草園、地底の森ミュージアム、東北工業大学ライフデザイン学部、仙台文学館等と連携し、探究学習を推進している。こうした本校の総学の流れの中で、本公開授業は１学年で実践されている新聞作成の初期指導として位置付くものである。

公開授業では対象クラス４０名が６班に分かれて協働学習を行った。本校は各教室でWi-Fi環境が整備されており、インターネット等の必要な情報にアクセスすることが可能であり、河北新報社の「河北データベース」の使用許諾を得ている。また、本稿で紹介する「Classi」は、Classi(株)が提供している学習支援プラットフォームであり、本校では主に学習記録・学習動画・各種アンケート等で利用している。

２　学習目標

情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展している現代において、自ら課題や目標を設定し、目的に応じて必要な情報を見いだし、情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり、答えのない課題に対して、他者と協働しながら納得解を見いだす力が必要とされている。こうした社会的な状況を踏まえ、本時の学習目標を、新聞やインターネット上の情報等を拠り所に、協働して事実を探究し、報道の本質について理解を深めつつ、現実に起こった論争である「報道か人命か」という正解のない課題に向き合い、自分なりの答えを導き出させる授業を実践した。また、生きて働く知識・技能の習得をめざし、新しい時代に求められる資質・能力を育てるために、主体的・対話的で深い学びを実践できる授業を構成することをめざした。

３　本時の活動

（１）「起」…問題提起

授業の導入として、1993年にケビン・カーターが、現在の南スーダンで撮影した「ハゲワシと少女」の写真を、PowerPointを利用して投影した。

図１　少女の部分が隠された「ハゲワシと少女」

まずハゲワシに狙われている少女の部分は隠して提示し、ハゲワシが何を狙っているのかを考えさせた。生徒からは、ネズミ等の動物の名前があがった。その後、写真の背景等を確認し、少女の部分を見せた。すると、生徒からは、驚きの声があがり、その衝撃的な写真に釘付けになった。

図２　「ハゲワシと少女」の写真を凝視する生徒

ケビンがこの写真でピューリッツァー賞を受賞すると、「報道か人命か」の論争が巻き起こったことを説明し、生徒にケビンと同じ立場なら、報道を優先するか、少女を助けるか、を問いかけた。すると約半数の生徒が人命優先を選択した。授業の冒頭でケ

ビンの写真を使用した意図は、以下の３つである。

①報道の本質を考えさせるのに最適であること。
②探究学習の一環として、新聞を作成させる上で写真やグラフ等は有効であり、その利用を促すこと。
③授業に興味・関心を持たせること。

（２）「承」…情報収集・分析

なぜ、ケビンが「ハゲワシと少女」を撮影したのかを探究させるために、南スーダンの人口推移のグラフを提示し、1990 年～94 年にかけて人口が減少していることを読み取らせた。グラフは事実を客観的に分析する有効な方法であることを生徒に意識させ、今後の新聞作成に利用を促すねらいがあり、原因を主体的に探究させる動機づけになると考えたからである。その後生徒は、ワークシートを利用して南スーダンについて、班員と協働して探究学習を進めた。

[TASK 1]１９９０年～９４年頃の南スーダンについて調べよう。

(1)南スーダンの歴史	1955年 （　　）勃発 1956年 スーダン共和国独立 1972年 （　　）終結 1983年 （　　）勃発 [1993年ケビン・カーターが「ハゲワシと少女」の写真撮影] [1994年ケビン・カーターがピューリッツァー賞受賞] 2005年 （　　）停戦 2011年 （　　）独立	
(2)1990年の平均寿命	＿＿＿＿＿＿＿＿ 歳	2016年の日本の平均寿命は 男性80.98歳、女性87.14歳
(3)1990年の１人あたりの名目GDP	※1990年為替レート 1USドル＝144円 ＿＿＿＿＿＿＿＿ 円	2018年の日本の１人あたりの名目GDPは 4,252,784円
(4)1990年の５歳未満児死亡率	1000人あたり＿＿＿＿＿ 人	2015年の日本の５歳未満児死亡率は 1000人あたり2.85人
(5)1994年の南スーダンの状況を示す新聞記事より分かること	○ ○ ○ ○ 出典：（　　）＿＿年＿＿月＿＿日付	

図３　授業で利用したワークシート

南スーダンの歴史、1990 年の平均寿命、GDP、５歳未満児死亡率を調べさせることにより、教科横断的な学習ができる。また（現在の南スーダンの首都）ジュバの状況や難民数等を理解させるために、「河北データベース」を利用した記事を読ませることで、文章読解力を養うこともできる。

特に、1990 年の南スーダンの名目 GDP の計算においては、1990 年当時のドルと円の為替レートを調べ計算する必要があり、独立前であるので、スーダンの統計を参照しなければならず、歴史・数学・政治経済等の力を総合的に組み合わせ、多角的かつ論理的に思考し答えを見いだす必要がある。

けやき並木　田沼武能

空から望むと二面に茶褐色の大地。低い樹木が点在する光景が延々と続く。南スーダンのどこで戦争が行われているのかと、目を疑う。

しかし地上は地獄である。うち続く戦乱で、多くの人たちが犠牲になっている現実を目の当たりにせねばならなかった。

スーダンはアフリカ最大の国土を持ち、日本の七倍もある。私が初めて訪れたのは一九八二年で、当時、国連の難民高等弁務官の職員たちは大わらわだった。内戦のエチオピアから逃れてくる人たち、ウガンダは大統領かんぱつで、そこからも難民が流入する状態だったのである。

あれから十一年を経た昨年の十二月、ユニセフ親善大使の黒柳徹子さんと、南部のジュバに向かった。今度は、スーダン自身の内戦による難民が広がっていた。

ケニア側の国境の町、ロキキオには、国際赤十字社の仮設病院があった。多数の負傷者がスーダンから運ばれてきており、地雷で大けがをし、目の前出手術を待つ十三歳の少年のいたましい姿もあった。

政府軍と反政府軍の戦争、さらに反政府軍内での抗争も起きて、内戦がさらに新たな内戦を呼ぶという、複雑な図式になっていた。終息はとどまるところを知らない。陸路は危険と不備とで、国連、ユニセフ、国際赤十字、NGO（非政府組織）らは協力して、オペレーションライフラインとなづけた地上への食糧援助を続けていた。

ナーセルという村に、千三百五十人もの難民がいた。内戦でスーダンからエチオピアに逃げ、メンギスツ政権崩壊で再びスーダンに避難せざるをえなかった人々がいる。その逃避行の間に、両親がどくなったり、あるいは親を見失った子どもたちなのだった。

各種派閥の対立関係も複雑をきわめ、ジュバ市内の避難キャンプは、種族ごとのキャンプに分かれていた。市内だけで六万人の避難民が平和を待っている。

一日も早い平和の到来、こどもたちはそれを願うばかりである。

たぬま・たけよし氏　写真家。東京写真工専卒。木村伊兵衛に師事、戦後世相や東京の自然など撮影。海外取材も多く、これまで104カ国を回る。「世界の子供」シリーズは有名。著書多数、菊池寛賞など多数受賞。東京都出身。64歳。

図４　授業で利用した記事（1994. 1. 8 河北新報）

班内で協働作業をして見いだした成果をタブレットに入力させ、Google スライドを利用しながら、情報を共有させた。Google スライドは情報の共有・保存が簡単にできるので、利用価値が高いツールである。また、教員が各班の進捗状況を逐次把握でき、評価の際にも有効である。さらに、その後の探究活動で、生徒が班別に協働してプレゼンテーションの準備をする際にも役に立つ。

図５ タブレット等を利用して探究学習をする生徒

生徒は、こうして一つずつ課題を解決していくことにより達成感を得ることができるはずであるし、

南スーダンの深刻な状況を徐々に深く理解していく事になる。そして、戦争により多くの子供が犠牲となった状況を取材するためにケビンは南スーダンに行った、という事実にたどり着く。

ケビンが「ハゲワシと少女」でピューリッツァー賞を受賞した後、たくさんの義援金が集まったことを、「絵はがきにされた少年」（集英社 藤原章生 著）の一節を紹介し、生徒に確認させた。この本を生徒に紹介したのは、報道による人道支援の拡大という報道の本質を理解させる目的と、正確な情報収集のため、文献も参照する重要性を生徒に伝えるためである。

その後、根拠を明確にして自分の考えを伝達する学習の一環として、「報道か人命か」の自分なりの考えを文章化させるとともに、ペア→班内→他班の生徒へとプレゼンをさせた。

図６　ペアで言語活動をしている場面

（３）「転」…反対例を提示し生徒を揺さぶる

ケビンが結果的に報道を優先させた事例は、２０世紀後半の遠い国の出来事であるが、人命と報道に関わる事例として、約８年前の東日本大震災時の宮城県の記事を生徒に読ませることにした。

河北新報 2011 年 3 月 13 日付朝刊１２面に掲載された、本当に小さな記事である。この出来事は、のちに新聞記事になってはいるものの、人命を優先させた事例である。当時のこの新聞記者はどんな思いで子どもを搬送したのかを生徒に想像させた。

そして、当時この記事を執筆した丹野綾子さんに登場していただいた。生徒はびっくりするとともに、みんな背筋を伸ばして丹野さんに熱い視線を注いだ。丹野さんは、当時の宮城県気仙沼市の状況を説明し、とにかく必死になって子どもを搬送したことや、その出来事を記事にしたことを今でも悩んでいることや、報道でたくさんの支援をもらったことなどを、涙をこらえて語った。

動かぬ子 強く抱く

12日午前8時すぎ。気仙沼市岩井崎付近の道路を車で走っていると、がれきの海と化した住宅地の方から、オレンジ色の毛布を抱えた男性3人に呼び止められた。

「車に乗せてくれ」「避難所まで、早く出せ」

ヘルメット姿で疲労感をにじませた男性の一人が必死の形相で訴えてきた。毛布にくるんでいたのは子どもだった。保育園の名札が見えた。ほとんど動かない。

発車前、付き添いとみられる男性に子どもの状態を尋ねた。首を横に振った。絶望的なのか。つらい思いでアクセルを踏んだ。

「寒いのか？」。移動中も男性はそう言って、顔を埋めるようにわが子を抱いた。2、3分後、避難所の階上中体育館に着いた。

医師が子どもの目にペンライト、胸に聴診器を当てる。ゆっくりと首を横に振った。男性は声もなくむせび泣き、動かない子どもを力いっぱい抱きしめた。

周りの人たちが、子どもの顔についた泥を丁寧に拭き取った。

（武田俊郎、丹野綾子）

図７　授業で利用した記事（2011. 3. 13 河北新報）

図８　生徒に語りかける丹野綾子さん

多くの生徒が（私も含めて）涙を流して聴いていた。生徒は報道優先か人命優先かで、思考を揺さぶられ、丹野さんの言葉で心を揺さぶられたはずだ。本物や真実は生徒の心に響き、生徒自ら何かを感じとることにより成長していくのだと実感した。

（４）「結」…報道の本質を考え、意見をまとめる

授業のまとめとして、紛争・災害に関わる命として、取材対象の背後にはたくさんの被災者や（避）難民がいることや、報道を通してその事実を知った読者等が支援をする可能性があること、またその記

事を読んだ読者が、命を大切に生きようとする可能性があることなどを伝えた。

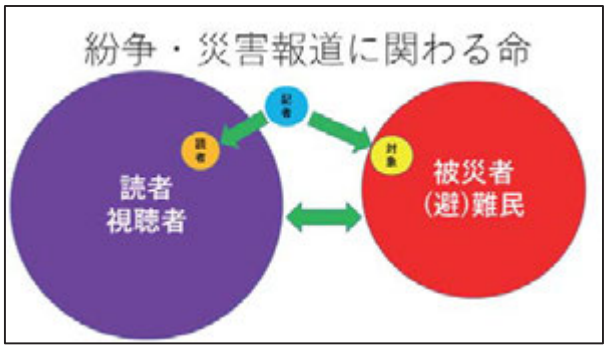


図９　PowerPoint を使った報道に関わる命の相関図

最終的に、「ジャーナリストは『報道を優先すべき』ですか？それとも『人命を優先すべき』ですか？」という問いかけを生徒にして、Classi に入力させた。もちろんこれは正解のない問いかけであるのだが、生徒たちの選択した結論は、「報道優先」の意見が約８割、「人命優先」が約１割、「どちらにも決めかねる」が約１割であった。

＜生徒の振り返りアンケートより（報道優先）＞
報道を優先すべきだと私は思います。
南スーダンの実例にもあったように、何も知らない第三者がその報道を知ることで義援金を集めることができます。1人の命よりも大人数を優先するようなことはもちろん正しくないけれど、その先に多数で1人を助けられるような社会ができればいいなと思いました。
また、私は丹野さんが、記事にしたことは正しいことだったと思います。しかし、もし私が子供を助けて欲しいと願う家族の立場であったならば、我が子のことが紙面、テレビ、報道等で取り上げられたら、いい思いはしないとも思いました。
報道を優先させるべきかどうかといった、過酷な経験をしていないからかもしれないけれど、それでも私は報道を優先すべきだと考えました。

＜生徒の振り返りアンケートより（人命優先）＞
人命を犠牲にしてまで報道することがジャーナリストとしての仕事ではないと思ったので、私は人命を優先すべきだと思いました。
＜生徒の振り返りアンケートより（判断つかずの例）＞
どちらも優先されるべきだと思います。ジャーナリストはああいう状況になったら、報道されることなどは考えることなく写真は撮ると思います。しかし、人間であれば、倒れて、ハゲワシに狙われている少女を助けないこともありえないと思います。
ただ、ジャーナリストが撮った写真で南スーダンにプラスのことがもたらされたのなら、写真を撮ったことは正解だったと思います。

図１０　Classi に入力された生徒の意見（抜粋）

「ハゲワシと少女」と「動かぬ子強く抱く」の両事例で、報道により多くの支援がなされた事実を生徒が知り、「報道優先」が多い結果につながったと推測されるが、生徒たちが真剣に「正解のない問いかけ」に取り組んだことは Classi の授業振り返りアンケートの結果を参照すれば、明らかなことである。

振り返りアンケートの「『報道優先か？人命優先か？』といった難しい課題に、あなたは真剣に向き合うことができましたか？」という問いに対して、55%が「大変高い評価」、41%が「まあまあ高い評価」と回答している。また、「総合的に判断して、今回の授業に満足できましたか？」という問いに対して、67%が「大変高い評価」、33%が「まあまあ高い評価」と回答しており、100%肯定的意見であった。

４　公開授業における課題とその後の生徒の様子

今回の公開授業における課題は、生徒の活動が多岐にわたり、しっかり考えさせる時間が確保できなかったことである。上述した授業構成を、「起承」と「転結」に分けて二時間で実施すべきであった。

また、タブレット等の情報端末による検索方法を生徒にもっと学習させておく必要があった。なぜなら、信頼性のある情報源とはどのようなものであり、ネット上のどの情報を利用すべきかといった知識や情報検索技能を有している必要があったからである。

さらに、教員の教材研究に関して、膨大な時間がかかるという課題もある。ＮＩＥの取り組みは未開発の部分があることは否めず、授業を組み立てる際に参考となる授業案のデータベースやＮＩＥに取り組む教員ネットワークの構築の必要性を感じた。

今回の公開授業で、最も悔いが残るのは、せっかく河北新報社の丹野さんに来校していただいたにもかかわらず、予定していた質疑応答の時間が確保できなかったことである。しかし、丹野さんの言葉は確実に生徒の心に響いており、その後の新聞作成の探究活動においては、主体的に校外で取材活動をする生徒数が例年に比べて増加し、写真やグラフ等を利用して新聞を構成する班が多くあり、探究活動の質が全体的に向上した。あらためて感謝を申し上げたい。

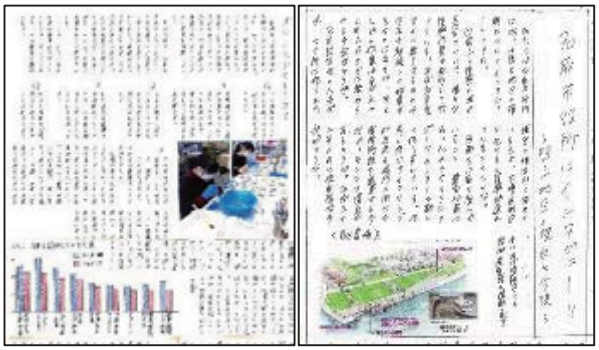


図１１　写真・グラフや取材記事を掲載した新聞

（3）公開授業の様子

（4）全体会記録

登米市立豊里小学校　教諭　菅原　洋一
松島町立松島第一小学校　教諭　秋塲　文東

全体会（公開授業）：授業者自評

・仙台三桜高校ＭＴ（総合的な学習）における探究学習は、地域の教育施設等との連携型の学習活動で、１年次はＮＩＥと連携し地域社会の課題発見と解決の学習を行っている。
・校内全教室は Wi-Fi が完備しており、ＩＣＴの活用として Classi を導入し個別学習やポートフォリオ等で学習を一括管理している。
・本時はジャーナリズムについて考える時間として設定。自分の意見を持ってほしい、また一人の命を見つめてほしいという道徳的側面にも触れ、ＩＣＴを活用した導入を組み、自らの考えを表出させる指導過程を組んだ。
・ＩＣＴを活用した教育は試案の段階で、その成果については、今後の授業を通して検証していく。

質疑応答

Ｑ　導入はケビン・カーターが撮影した写真を投影してから・・・だったが、その意図は。（住吉台中・清野）

Ａ　授業へ集中させるため冒頭で注目させたいと思った。また視覚に訴え、興味をもたせるために使用した。写真の影響力を感じさせ、後の新聞づくりの時に状況について写真を使って作成させたいという思いもある。

Ｑ　授業は最後に人間臭さが出てきてよかった。生徒はスマホを活用して授業に臨んでいたがスマホを持っていない子への配慮は。また、情報の使い方、調べ方の指導などあるか。（宮城広瀬高・浅水）

Ａ　スマホ所持については４月に調査。ない子には学校のタブレット（４５台で）対応。使用願を書かせている。情報収集についてはＰＣ室で Classi をいつでも使えるよう準備している。

Ｑ　子どもたちはカメラマンの立場で複数の情報から感想を述べていた。
メディアリテラシー教育について何を準備しているのか。（七北田小・今藤）

Ａ　新聞の読み比べをさせるため、玄関に新聞を置き自由に付箋紙を貼り付けて意見交換をさせている。担当は職員で分担している。

Ｑ　本時はメディアとミックスした授業で、ＩＣＴの活用がなされていた。Classi の活用について、自分のこれまでの履歴を見てどう活用し、どう深めていくのか聞きたい。
長いスパンでみれば、１年次の取り組みは２年次の成長につながるし、短いスパンでみれば授業のはじめ・終わりで思考の流れが分かると思えるが。（講師・柏崎）

Ａ　Classi のよさは学びの履歴をポートフォリオでき、すべてのＭＴで学習した内容を保有できることにある。今後カーターの死の真実を考えさせたい。次時の授業とタイアップさせ、一人の記者が記事への批判で死んでしまったことをやる予定で、いろいろな考えがあることを尊重しながらやっていきたい。

Ｑ　玄関の新聞への付箋紙について聞きたい。どのタイミングで新聞の読みの指導をしているのか。（名取北高・大槻）

Ａ　１面の新聞割を見せ、その記事を見て感じたことを書かせる。生徒は１月にチャンピオンシップ（発表会）があるので、そこが指導のタイミング。去年までは記事を教員が選んでいたが、今年は生徒に選ばせたい。付箋紙は職員が準備し、置いてあるところから生徒が持っていき書いている。色別の指導もしている。

Ｑ　授業でのケビンさんの写真、河北新報の記事がよかった。ワークシートのピックアップした記事は選ぶコツはあるのか。また、ワークシートを作成する上でのコツはあるのか。（城南高・中里）

Ａ　ＭＴなのでワークシートではＧＤＰや平均寿命など総合的な課題として考えさせたい趣旨からチョイスしている。写真は個人的な興味・関心としてストックし教材化へ。最後の記事は身近なところで見逃されていそうな、でも大切な記事がないか、河北新報社と協力しながら探した。写真は写真集、書物を調べて集めた。ワークシートの作成には膨大な時間がかかったが、一度作成するとみんなで使ったりできるので、それがＩＣＴの強みである。

Ｑ　生徒は４月からどのようなテーマで学習を進めてきたのか。また、他教科との連携は。

Ａ　１年生は地域との連携が主眼で、教員が数名、ここの力量で進めている。全体的なテーマ学習でやっていこうとは思っているが、まだ全体としては動いていない。これからも授業改善をしていきたい。

全体講評（宮城県富谷高等学校長：粟野琴絵）

・　仙台三桜高のＭＴタイムでは様々な取組があり、今日の授業では膨大な時間をかけての準備がすばらしくよかった。
・　新聞づくりは小・中で積み上げがあるものの、高校では途切れがちになりもったいないところではある。しかし、三桜高での付箋を使った取組はすばらしく、小・中の流れを高校でも続けてほしいと思っている。
・　ＩＣＴを活用し授業で作った教材は、そのまま学校としての財産となる。専門性を生かした教材はみんなで共有し、生かすことができる。それがまたチームとしての連携につなげられる。
・　授業は欲張りすぎた感があったが、みんなそれぞれ考えていたし、しっかり書いていた。書く・話す・伝える等子どもの力量の高さを感じた。グループ内の発表時の移動など積み重ねができていると感じた。
・　授業は二つの内容で行ったが、急ぎすぎた点もある。じっくり生徒の感想を聞くとか、ゲストティーチャーの話を聞き、記者さんとのやりとりがあると良かった。２時間続けてやれればしっかりやれたと思う。欲しかったものとして、生徒の考えの発表、記者さんとの交流、また始めの写真１枚は初発の感想を書かせることがよいと自分は感じた。本時はいろいろなアイデアをいただいた授業であった。
・　総合的な学習では「主体的に」というのは大切である。課題を見つけていき多くのものを一つにしていく。一つのものから掘り下げて探究に向かわせるなどいろいろあって難しいところではあるが、本時は参考となった授業であった。

（5）講演の概要

ＮＩＥと授業改善～教育心理学の視点から

実践女子大学教職課程　教授　柏崎　秀子 氏

１　学習指導要領における新聞の活用

新学習指導要領の総則に、新聞の適切な活用が盛り込まれ、ＮＩＥがますます重要視される時代になった。新指導要領の改訂には実は教育心理学が大きく貢献している。中教審の論点整理と最終答申では「メタ認知の育成」が明記され、新指導要領の「主体的・対話的で深い学び」も心理学の「メタ認知」「批判的思考」「学習方略」「自己調整学習」等が関わっている。本講演では教育心理学の視点から新指導要領を読み解き、授業改善を提言した。

２　学習指導要領と教育心理学の関わり

学習指導要領の改訂のポイントは以下のような点である。

①資質・能力の一層確実な育成（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」）
②「主体的・対話的で深い学び」と授業改善
③社会に開かれた教育課程
④カリキュラム・マネジメント

教育心理学では学習プロセスや内的メカニズムに焦点があり、学習者の内側の学習過程への関心が授業改善につながる。順に、改訂ポイントと教育心理学の関連性を見ていった。

①資質・能力の一層確実な育成

まず「知識・技能」は個々別々な知識ではなく、相互に関連付け構造化され社会の中で働く知識が重要である。これは心理学の「生きた知識」と「死んだ知識」の捉え方に関連する。つまり、知識は単なる記憶・保持だけでなく、相互に関連付けられてこそ実生活で活用でき、様々な問題解決で活かせる、と考える。したがって、教師は児童生徒に知識同士を関連付けさせ多様な状況で使わせ、メタ認知能力を育むため自分の知識状態を振り返る（誤りに気付く）よう習慣づけることが望まれる。「思考力・判断力・表現力」は思考と表現が密接につながり循環する。発達心理学では身近な人と文脈の中で話す「一次的ことば」から、文脈を使わず眼前にいない人に伝える「二次的ことば」へと発達し、思考を他者に伝えるよう表現する重要性が指摘されている。さらに、「学びに向かう力・人間性」では、心理学の動機づけが学習に関与し、できそうだと思える自己効力感が関連する。学び方や内容を自分で決める自己調整学習の考え方も背景にあると思われる。

②主体的・対話的で深い学び

「主体的」は見通しを立てて学び、学習を振り返ることで、生徒の積極的な活動だけでなく、学習活動を自ら振り返って意味付けることも意図し、メタ認知に通じる。「対話的」は対面で話し合うだけでなく、自分の考えを文章化・視覚化・口頭発表などで多様に表現し他者と共有することを意味し、表現行為による思考の対象化・深化が意図される。そして「深い学び」は深い理解、情報の精査、問題発見・解決、創造等を意味し、物事に対して自分なりに理解する批判的思考力と関連し、前述した知識の関連付けに通じる。つまり、アクティブラーニングと言っても動的活動の型より理解状態の方が重要であって、断片的知識から構造化された知識体系となる深い学びが形成され、その状態を自分の言葉で説明でき、類似課題に活用できることを意図する。

③社会に開かれた教育課程

学校内で閉じず、地域・社会と共有・連携

することを意味し、心理学の社会的構成主義や状況論が背景にある。学習の場は学校だけでなく、地域社会の生活の場で社会・文化的学習がなされ、状況に埋め込まれた学習が指摘されている。

④カリキュラム・マネジメント

「習得・活用・探求の学習とバランス」はそれぞれが重要なためバランスが肝要で、習得も学習者が知識を関連付けようとすればアクティブであり得る。そのための資源の配分として、社会的構成主義の考えも取り入れて、人的および物的資源を活用し組み合わせる。新聞は学習資源の一翼を担っている。また、「教科横断的な資質・能力の育成」は心理学のコンピテンシー（知識・スキルを統合的に働かせる能力）の概念が関係しており、探求する力・問いを立てる力を養って、特定教科に限定しない汎用スキルの育成を目指す。批判的思考法や学習方略などの心理学の概念が関与している。

３　「伝える力」研究と大学授業でのＮＩＥの取組

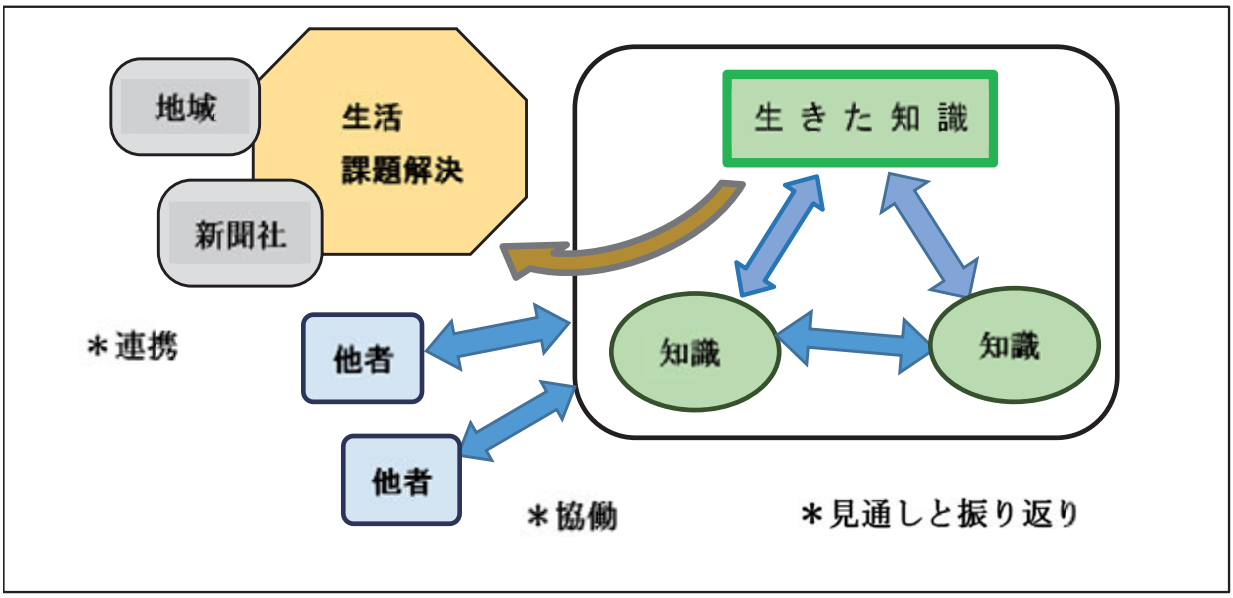
大会主題「ＮＩＥは伝え合う力」に関連して、他者に伝える力に関する自らの諸研究を紹介した。ある資料の内容について他者に伝える目的を持って学ぶ場合、他者が理解しやすいようにと、他者の認知状態も認知するメタ認知能力が必要になるため、既存の知識も関連付けて広い認識を持つ状態になることを、読解と作文の融合研究から示した。

また、ＮＩＥが行える教員を目指して大学の教員養成課程で「主体的・対話的で深い学び」に挑戦し、活動の毎に振り返りを実施してメタ認知能力を高める取組を紹介した。

４　ＮＩＥに基づく授業改善の提案

これまで述べた心理学的視点からの授業ポイントをもとに、ＮＩＥに基づく授業改善を提案した。

①新聞で学んだ知識を教科書での知識とつなげる。
②未知の語を収集したらその意味を類推も自身で行う。
③貯金した言葉は積極的に運用(活用)する。
④他者と関わりながら理解を深め、多様な表現方法で示す、
⑤探求の問題提起や資料として新聞を活用する。自ら課題を見つけて取り組む。
⑥学外とつながる（地域と関わり、新聞社との連携）。
⑦活動を振り返って（何が学べたか，どんな学び方だったか等）メタ認知能力を高める。



図：授業改善ポイントの関連性

２　宮城県ＮＩＥ地区研修会　　＜テーマ＞　～ たのしく学ぶＮＩＥ ～

研修会の概要　　事務局　飯坂　　新

平成３０年度の宮城県ＮＩＥ地区研修会は、８月２３日（木）、実践指定校である南三陸町立戸倉小学校で行われ、２４名の参加者が講話と「ことばの貯金箱」のワークショップでＮＩＥについての研修を行った。

第一部は、共同通信社仙台支社長の長田良夫氏が「マスメディアの中の通信社の役割」と題して講話された。

講話では、地元ニュースは各地方新聞社が取材網に基づき取材するが、通信社は、地方紙の手の届きにくい中央政界の動きや政策、国際情勢、また他地域で発生した大事件、大災害などを取材、原稿を配信することで、各新聞社の紙面の手助けをしている。また、新聞は各地方紙により紙面作りが違うように、全国紙も地域を意識した紙面作りをするので東京と大阪での紙面は異なること等を実際の新聞を提示し説明された。

参会者にとっては通信社の役割そのものを承知していない方が多く、長田氏の講話を興味深く聞き入っていた。

第二部は、今年度もＮＩＥ教育コンサルタント・東北福祉大学講師の渡邉裕子先生の指導で、「ことばの貯金箱」のワークショップを行った。

ワークショップは４人一組のグループで、配付された新聞紙の中の見出しや広告から気になった言葉やステキな言葉、写真を切り抜いて個々に用意した貯金箱に貯めていく作業。続いて、貯めた貯金箱の中の切り抜きを、自分の表現したい思いをイメージしてイラストなど描き加え、台紙に貼り付け作品にまとめる作業。そして、グループ内での作品の発表会。この三つの活動を体験した。

活動の最後はグループ代表による作品の交流会。グループ内では楽しげな会話が弾み、ワークショップは、今年度も好評であった。

＜２０１８年度地区研修会の日程＞

時　　程	内　　容
１３：３０	開会の挨拶
１３：４０～１４：３０	講話「マスメディアの中の通信社の役割」 講師　共同通信社仙台支社長　長田　良夫 氏
１４：４０～１６：００	ワークショップ　　子どもも大人も夢中になる「ことばの貯金箱」 講師　ＮＩＥ教育コンサルタント　渡邉　裕子　氏
１６：００	閉会の挨拶

地区研修会のまとめ　〈アンケート結果より抜粋〉

①講話について

・記事の配信がいかに多いのかが分かりました。
・大変ためになりました。特に、同じ共同通信社の記事を各紙で異なる表現になる点。複数紙を購読し、より客観的に正確な情報を得る上で大事だと思います。
・貴重なお話と、実際の版違いの新聞が見られて大変有意義でした。
・貴重なお話を聞くことができました。ありがとうございました。
・これまでに聞いたことのないような面白いお話がたくさんでした。また「情報はタダではない」という言葉も、心に残りました。
・共同通信社の役割についてほとんど知らない状態でしたが、正確な情報を得るために日々力を尽くしていることが分かりました。
・言葉としてしか知らなかった共同通信と、他社との関係が何となく分かりました。
・教材として使用する新聞について、様々なことを知ることができました。
・いつも読む新聞のさらに裏側を知ることができて興味深いと感じた。
・授業実践につながる楽しい話だった。
・日頃読んでいる新聞に共同通信社の記事がたくさん生かされていること、それぞれの新聞社の活用の仕方の違いなどが分かりました。
・共同通信のことを深く学ぶことができました。
・通信社の果たす役割、新聞づくり、活用の工夫など貴重な学びがあった。
・中２の国語に記事を比較する単元がある。その背景について、今回お聞きすることができた。とても興味深かった。
・共同通信社の役割について具体的な記事を用いた説明があり、分かりやすく、有意義だった。

②ワークショップについて

・子どもたちが楽しくできる活動なので、これからの学習の中で生かしていけるようにしたい。大変勉強になりました。ありがとうございました。
・楽しかったです。とにかく渡邉先生の話術がすばらしい。きっと、先生の授業は楽しく、心が解放されたと思います。
・夢中になって行えました。２学期から実践していきます。また、ご助言よろしくお願いします。
・ことばの貯金箱は、本当に大人がやっても面白いですね。授業の中でも、今日の渡邉さんのようにできたらいいです。
・ことばの貯金箱、非常に楽しんで行うことができました。新聞に抵抗を感じる子どもでも、今日の活動はリラックスして夢中になってできる素晴らしさを感じました。
・とても楽しかったです。
・とても楽しく取り組みました。子どもたちにやらせる前にまずやってみるというのは大切だと思いました。
・実際にやってみて、わくわくしながら取り組めた。内気な子への声の掛け方が難しいと感じた。うまく持ち上げ、子どもにとって楽しい時間にしたい。
・とても楽しくできました。夢中になり時間を忘れてしまいます。
・「チャリーン」は魔法の言葉。楽しく仲良くやれる！！
・大変楽しく取り組むことができた。子どもたちの活動に生かしたいと思います。
・大人も楽しく活動できました。
・ことばの貯金箱が子どもの生きる力に直結することを学んだ。
・特にことばの貯金箱は、学級経営でも使えるくらい効果的なものであると感じた。
・やはり小学校対象である印象が強く、中学生にどのように取り組ませるかは検討したい。授業（教科）では活用しているが、特活や道徳での活用法を探りたい。
・文章を書かせる授業を難しいと思う。それは、普段の生活の中で観察する目を養うことが不足しているからだと感じる。今回のワークショップは、その観察力を育てる上で大切だと思った。
・高校の授業にどうにか導入できないか、方法を考えていきたい。

３　ＮＩＥ全国大会盛岡大会参加報告

第２３回ＮＩＥ全国大会盛岡大会は７月２６、２７の両日、「新聞と歩む　復興、未来へ」の大会スローガンの下、盛岡市と大槌町で開催されました。東日本大震災後、被災３県での開催は初めてで全国から教員、新聞関係者ら約１６００人が参加しました。大会２日目には東日本大震災の被災地、大槌町の小中一貫教育校「大槌学園」でも特別分科会が開催され、前期１～６年、後期７～９年課程で６学年と９学年の２こまで「ふるさと科」の公開授業が行われました。大会は全体会のほか、公開授業、実践発表など１７の分科会があり、隣県での開催でもあるので、県内からは教員２０人、ＮＩＥ教育コンサルタント１名、事務局３人が参加しました。以下初日の全体会の概要と分科会の内容の一部を紹介します。

＜全体会の概要＞

宮城県ＮＩＥ委員会事務局　佐藤　素子

初日の開会式では、明治大教授の斎藤孝さんの記念講演に続き、大会スローガンをテーマに、当時岩手県内の学校で震災を経験した若者と、報道と教育に携わった大人による２部構成の座談会がありました。

大船渡一中の１年生だった宮城教育大３年の高橋莉子（りこ）さんは、震災から１週間後に地域を励ましそうと学校新聞「希望」を発行。避難所や仮設住宅を訪れ、一人一人に手渡した経験を話しました。「地域のために始めた学校新聞が全国からの支援につながり、逆に私たちが励まされた」と振り返りました。

釜石・鵜住居小３年だった釜石高２年の佐々木千芽（ゆきめ）さんは、被災地に訪れた大勢の支援者の姿を見て、「助けられる人から助ける人になりたい」と、中学時代から生徒会でボランティア活動をしています。その経験から「災害に備えるためには、普段から地域住民とコミュニケーションを取ることが大切」と強調。震災の教訓を未来に伝えるためには「語り部を増やし、震災を経験していない世代に伝えて風化を防ぎたい」と訴えました。

大人の部では、当時岩手県教委で義務教育を担当し、「いわての復興教育プログラム」を策定した県立総合教育センターの藤岡宏章所長が「新聞は学校と学校、学校と地域、子どもたちと社会をつなぐ接着剤の役割を果たした。子どもたちが活躍する記事は、地域の誇りを醸成することにもなった」と振り返りました。

元毎日新聞記者の手塚さや香さんは、震災後に初任地だった盛岡に再び異動し、復興の課題を取材。現在は釜石市で地域コーディネーターとして活躍しながら週２回発行の「復興釜石新聞」に携わっています。手塚さんは「新聞は地域の世代をつなぐ役割を果たしている」と述べました。

座談会に先立ち、「新聞と復興」と題して講演した斎藤さんは「新聞を授業で使うことで、全国の子どもが震災の経験を生かすことができる。自分の地域だけでなく、西日本豪雨災害についても切実に感じられる」と主張。「新聞は同時代に生きる、さまざまな地域の経験を共有できる教材だ」と位置付けた。

斎藤さんは「郷土愛を育む点でも新聞は効果的だ」と言います。「地域の記事を読んで授業で発表すると、郷土の歴史も産業も分かり、郷土への愛が生まれる。少子化問題なども、みんなで話し合える」ことから、「日本がこれからどうなるかを考えるには新聞が不可欠だ」と話しました。

＜公開授業Ｈに参加して＞

盛岡市立本宮小学校（６学年/総合的な学習の時間）

命を守る　ふるさとを守る
～地域の防災・減災を新聞で学び、新聞で伝える～

柴田町立柴田小学校　浅野　初恵

地震と洪水が発生した場合の避難行動における問題点について、自分の考えを持って授業に臨み、グループ内で発表し話し合うことで、防災・減災への取組について考えを深めていました。

驚かされたのは、子どもたちがもつ災害時の状況等に関する知識量の多さと正確さでした。本単元では「知識を得る活動」「考えを交流する活動」が段階的に設定されており、その中で子どもたちは５０以上の記事に目を通して情報を得てきたそうです。

目的意識を持って記事を読み、そこで得た情報を「生きた知識」として自分の考えをまとめる姿からは、担任が、記事を効果的に活用できるように指導の工夫を重ねてきたことがよく伝わってきました。また、本単元は、４年生から始まった「命の学習」の３年目ということで、学年の枠を超えて、記事を読みこなす力、新聞という形で考えをまとめる力をこつこつと積み重ねてきたことにも感銘を受けました。子どもたちの学力向上に向けた組織的な取組がすばらしいと思いました。

＜特別分科会公開授業Ｐ・Ｑに参加して＞

大槌学園（６学年・９学年/ふるさと科）
６学年　「大槌希望新聞を作ろう」
　-復興に向けて歩む人々の願いに触れて-
９学年　私たちはどう生きるか
-自分ごととして未来を語る「ふるさと科」の実践-

仙台市立長町中学校　進藤　千枝

全国大会ではめずらしい、２泊３日コースの「大槌学園」（小中一貫校）での授業公開に参加した。学園では「ふるさと科」で町の復興発展を担いうる人材の育成をねらいに、９年間の特別教育課程を実施している。

６年生は「新聞を介して復興に向けて歩む人々の願いに触れ、地域への愛着を育む学習」をテーマに、大槌町の復興に尽力した人々の願いを記事から読み取る授業で、町の復興のために、自分のできることを行うという人々の願いを、児童はしっかりと読み取っていた。９年生は「これからの大槌学園が果たすべき役割とは何か？」を課題に記事を基に２０年後の町のために”自分たちに何ができるか”をグループ討議した。

将来就きたい職業・生徒が作る観光ルート・西日本豪雨災害についての記事を使い、大槌町には就きたい職業がないことや、東日本大震災の恩返しとして、西日本豪雨での被災者に思いをはせていた。いずれの授業でも町の将来を担う子どもたちの未来への思い、恩返しをしたいという温かい気持ちにあふれた授業であった。使用した記事は、図書館司書が準備しているそうだが、生徒に自由に選択させれば、また違った意見が出たのではないかと思った。

授業参観後の語り部の方との視察は、人々の思いと復興がまだまだ道半ばであり、震災を風化させず次世代へ伝承していく必要性をひしひしと感じた。

ＮＩＥで育むメディアリテラシーと情報活用能力

仙台市立七北田小学校　教諭　今藤　正彦

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められており、そうした学習の基盤となる資質・能力として、言語能力や問題発見・解決能力等とともに情報活用能力の育成が重視されている。

情報は、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌など、多種多様なメディアによって私たちの目や耳に入ってくる。また、インターネットが急速に普及し、スマートフォンやタブレット端末から手軽に情報の収集ができるようになった。

しかし、情報発信が便利になればなるほど大量の情報が溢れるので、本当に必要な価値ある情報を効率よく検索・選択するのは容易ではない。また、せっかく手に入れた情報が、必ずしも信頼できるものとは限らない。個人の感情に訴えるフェイクニュースの拡散は、時に客観的事実よりも世論形成に強い影響力を持つことさえある。

したがって、情報を鵜呑みにしたり情報に安易に流されたりせず、メディアの特性を十分に理解して主体的に活用できるようにするメディアリテラシーを、児童・生徒に育むことが重要になる。新聞を読みこなし活用できる力は、社会で生きていく上で欠かせない力であり、ＮＩＥは以下のようなメディアリテラシーを向上させるのに大きな役割を果たせるものと考える。

①「メディアを選ぶ力」
　社会的に影響力の大きいマスメディアを代表する新聞の持つ特性を理解し、情報入手の一手段として新聞を活用することができる力。
②「メディアを読み解く力」
　新聞記事の内容をまるごと鵜呑みにせず、記事の背景を理解し複数の情報を比較・検討するなどして、自分の頭で主体的に考え判断できる力。
③「メディアを使って情報を発信できる力」
　新聞を作ったり新聞に投書したりするなどして、自分の持つ情報を発信して他者とコミュニケーションできる力。

②の「メディアを読み解く力」に必要不可欠なのが、「クリティカル・シンキング」である。「批判的思考」と訳されるが、全て否定的にとらえるという意味ではない。「適切な規準や根拠に基づく、論理的で偏りのない思考」であり、問題や情報、その処理過程、結果等の「妥当性の吟味・評価」を担う思考を指す。その基になるのが「クリティカル・リーディング」（批判的読み）であり、ＮＩＥで以前から重視されている新聞の複数紙の読み比べがまさにこれに該当する。新聞では、事実と意見が明確に区別されており、文字情報であるがゆえにじっくり読み返しができるので、深く思考するのに適している。

また、新聞を活用するメリットとして、以下のような情報活用能力の育成に役立つことが考えられる。

・新聞を読む習慣がつくと、言語能力や語彙力の向上が期待できる。（情報理解力）
・複数の新聞記事を読み比べることにより、記事の内容を客観的に吟味できる。（情報批判力）
・新聞の見出し、リード文、写真等から必要な情報を的確に読み取り、記事を選択できるようになる。（情報選択力）
・収集した複数の新聞記事から、必要な情報を再構成できるようになる。（情報処理力）
・新聞から得た情報をもとに自分の考えを練り上げてまとめ、新たな情報を生み出すことができる。（情報生成力）
・自分の調べた内容や考えを新聞として発行することにより、情報を広く発信することができるようになる。（情報伝達力、情報発信力）
・情報を発信する際のモラルや責任について、理解を深められる。（情報社会に参画する態度）

なお、小学校学習指導要領解説総則編には、「児童の主体的・対話的で深い学びへとつながっていくようにするためには、必要な資料の選択が重要であり、とりわけ信頼性が高い情報や整理されている情報、正確な読み取りが必要な情報などを授業に活用していくことが必要であることから、今回の改訂において、各種の統計資料と新聞を特に例示している。」との記述があり、活字メディアを代表する新聞の教材としての重要性がますます高まっている。

「新聞を活用し英語で表現する機会を増やす工夫」

日本新聞協会ＮＩＥアドバイザー
宮城県名取北高等学校英語科教諭　大槻　欣史

１　はじめに

昨年１２月、河北新報社セミナールームで開催された「宮城県ＮＩＥ高校部会研修会」で実践報告を行いました。今回は、ＮＩＥアドバイザーという立場と言うよりは、一実践者として日頃の実践をシェアしたいという思いで登壇しました。ここでは、当日参加できなかった方々のために紙上にて研修会の報告をいたします。

２　ＮＩＥと英語教育

文部科学省が 2015 年に示した「英語教育の抜本的強化のイメージ（高等学校）」では、「ある程度の長さの新聞記事を速読して必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題について課題研究したことを発表したりすることができるようにする」ことを目標例に掲げ、英語教育での新聞の有用性を認めています。

３　新聞の特徴と社会的意義

新聞ならではの特徴としては、一覧性・携帯性・記録性・確認性・詳報性・解説性・予測性などがあげられます。また、その社会的意義も広く認められ、新聞通信調査会「メディアに関する全国世論調査」(2015) によると、信頼度の高さ・内容の充実度・種類の多さ・正当性・責任ある報道などの点で他のメディアよりも高評価を得ています。

４　新聞を活用する理由

私が日ごろ感じている新聞活用のメリットは、「世界観が変わるほどの題材が豊富である」、「『遊び』の要素を含んでいる」、そして、「『本物』を教室に持ち込める」の３点です。これらを生かして授業を行うことで、生徒がより創造的な活動ができるようになります。

５　具体例紹介

①　「全面広告」の活用

写真と宣伝文だけの全面広告は、シンプルかつメッセージ性が非常に高く、そこから書かれていないことを読み解き、英文で表現させることがここでの目的です。昨年は「嵐」の全面広告を使い過去形と未来完了形を復習しましたが、メッセージを理解し、英語で表現することはとてもクリエイティブな活動となります。つまり、「必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題について課題研究したことを発表したりすることができるようにする」ための第一歩になると確信しています。

②　「天気予報」の活用

最近、図や表から必要な情報を読み取る問題が出題されます。そこで、新聞に掲載されている天気予報を活用し、天気、降水確率、最高・最低気温を読み取る活動をしました。また、「世界で一番暑い国・一番寒い国」を調べ、その理由を述べさせました。地理の知識も必要となり教科横断型の授業となりますし、異文化理解の導入にも最適です。

③　「テレビ欄」の活用

ここでは、読売新聞と The Japan News を使います。表面には日本語の番組表、裏面には英語の番組表を印刷して生徒に配布します。授業

日の新聞であれば、帰宅してからの視聴予定を未来時制で聞きます。前日の新聞であれば、昨夜見た番組名を過去時制で問います。副産物としては、番組名を日本語と英語を両方見ることで、「この番組名は英語でこういうんだ！」という発見があります。プラスαとして、見よう（見た）理由を尋ねさせることで、相手の話したい気持ちに火を付けることができます。

④　「４コマ漫画」の活用

４コマ漫画は論理的思考を養う絶好の教材といわれています。準備は非常に簡単で、新聞を拡大コピーし、コマをばらし、ペアかグループに１セット配布し、論理にかなうように並べさせる活動がおススメです。並べた後の活動は、漫画の「流れ」により変わってきます。「因果関係」を説明させることもできますし、ことわざを取り上げた漫画では、それを英語で言わせます。４コマ漫画の最大の利点は、教師がいくら説明しても伝わらない感覚をたった４コマで簡単に伝えてくれることです。

⑤　「写真」の活用

重要文法を身に着けるために、新聞に掲載された写真を活用したストーリー作りを行いました。ここでのポイントは、「たまたま開いた（Serendipity）新聞の中から、写真を一枚選択し(Selection)、思い思いのストーリー(Story)を創造する」という流れの中で、自分で表現したい内容と習った構文を結び付けようという意識です。コマが印刷された用紙の中心に写真を張り付け、話題の中心という位置づけを可視化します。そして、写真の状況を考え、写っている人物の気持ちになって英作文をしていきます。重要構文を使うタイミングを意識しないと英作文できないので、楽しみながら真剣に取り組んでいました。

６　最後に

「社会と生徒をつなぐ窓」と呼ばれる新聞を活用することは、旬の話題に触れるいい機会です。多感な高校生が、オーセンティックな（本物の）な話題を使って、記事に書かれている内容を理解し、深く考え、自分の思いを英語で表現する経験を積むことは、音読等のトレーニング重視の授業と同時に大切であると感じています。是非ご活用ください。

第２４回新聞記事コンクール　河北新報社賞受賞作

インパール作戦

大崎市立岩出山中３年　今野（こんの）　真佳（まなか）

昭和１９年６月、マレー半島に到着。同月ビルマ、メイミョウ、インパール作戦に参加。

これは、一昨年９３歳で亡くなった私の曽祖父の手記の一部。今年の盆に三回忌を迎え、そこで私の知らなかった曽祖父の壮絶な戦争体験を知った。陸軍として戦地に赴いた当時の手記を元に、そこに記されていたインパール作戦について調べてみると、太平洋戦争で最も無謀で悲惨と言われたこの作戦は、３万人以上が命を落としたとあった。なぜなら川幅６００メートルにも及ぶ大河と２０００メートル級の山を越え、ビルマからインドにある英国軍の拠点インパールを３週間で攻略する計画で、補給線を軽視した杜撰なものだったからである。日本軍はインパールに誰一人としてたどり着けないばかりか、撤退の際には、敵の追撃を振り切りながらも食料の補給は全くなく、飢えをしのいでの行軍は大変過酷なものだったようだ。このような状況の下、曽祖父はどう生き抜いて日本に帰って来たのだろうか。近所に住む戦友だったおじいさんに、曽祖父から聞いたという当時の貴重な話を聞くことが出来た。

当時、前線では激しい戦闘が繰り広げられ、自分のいた部隊は散り散りになってしまい、曽祖父は誰が生きて亡くなったかも分からないまま一人はぐれて必死に逃げたそうだ。昼間は敵に見つかるため、現地の民家の軒下に隠れて仮眠をとり、鶏の卵で飢えをしのいで、夜に行動。幾日かして高台の高木の上から運よく別の部隊を発見、合流出来たとのことだった。

曽祖父が残してくれた手記は、私に大事なことを教えてくれた。人の命を軽んじることは絶対に許してはならない。戦争を知らない現代に生きる私たちに出来ることは、戦争の歴史を教訓とし、同じ過ちを繰り返さないことだと思う。そして、次の世代へ戦争の悲惨さについて言い伝える責任を果たすべきである。平和のために、今は亡き曽祖父の戦争体験を、心をこめて大切に、私は語り継いでいきたい。

◎悲惨な歴史語り継ぐ

同じ岩出山地区に住んでいたひいおじいさんは８０歳を過ぎても、元気に庭仕事などをしていました。小学生の時は年に数回、きょうだいと泊まりに行きましたが、戦争体験は直接聞いたことがありませんでした。

インパール作戦も今回初めて知りました。手記は漢字が連なっていて、何が書いてあるのか分からず、祖父や母に調べるのを手伝ってもらいました。関連する映像を見て、戦友のおじいさんの話を聞くうちに、軍の上層部が人の命を粗末に扱ったように感じ、許せない気持ちを抱きました。

歴史の勉強は覚えることが多く苦手でした。身近な人が、今では信じられないような経験をしたことを知り、考えが変わりました。戦後７３年がたち、戦争体験者は少なくなっています。悲惨な歴史を語り継ぐ責任は普通に暮らす私たちにもあることを、多くの人に知ってほしいと思います。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第 11 回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

「楽しみながら新聞活用！」がテーマの「土曜しんぶんカフェ」。2018 年度もスタートです！
今年も現場で頑張る先生方、将来先生を目指す学生さんたちにほっこり一息つきながら、明日の授業につながるヒント満載のプログラムを提供していきたいと思います。

さて今回は、昨年の学力テストで大幅な得点アップを果たした七北田小の村上先生がゲストです。いったいどんなアプローチが子どもたちに効果があったの？！　現場の先生からのお話を聞くチャンス！！さらに、この冬、平昌五輪を取材し連日紙面を素晴らしい写真で飾ってくれた川村記者が、普段のあまり知ることのない写真記者の仕事についてお話しします。

「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

5月のメニュー

◆NIE 実践指定校 七北田小学校の村上 朝子教諭による新聞を使ったワークショップ
「写真・記事 GOOD 賞、ことばの貯金箱」の実践発表

◆河北新報写真部の川村公俊記者が、平昌冬季五輪取材のエピソード
「表と裏」を許される範囲ギリギリでお話しします！
紙面未掲載の羽生選手の貴重な写真も大公開！の予定です。

◇「新人バリスタ」による
美味しくな～れの念を込めた「とっておきの一杯」もご用意します！

日時：2018年5月19日（土）　14:00～16:00
場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）
＊参加費無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

次回の第 12 回目は6月30日（土）開催。
河北新報 NIE 教育コンサルタント、渡邊裕子店長によるワークショップ「つぶやき NEWS」に挑戦して実践力を磨きます！どうぞお楽しみに！

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたは FAX でこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第 12 回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

「楽しみながら新聞活用！」がテーマの「土曜しんぶんカフェ」。
今年度２回目は、新聞を使っての実践。NIE 教育コンサルタントの渡邉裕子さん考案の人気のワークショップ「つぶやきNEWS」を行います。

このワークショップは、４人で一つのグループを作り、新聞記事に対してのコメントをメンバー同士でリレーさせていくものです。自分の発した言葉が必ず誰かに受けてとめてもらえる安心感、誰かの思いに自分の思いを言葉にして乗せていくという流れがポイント。

今回のプログラムも現場で頑張る先生方、将来先生を目指す学生さんたちの、明日の元気につながるような、すぐに実践できるヒント満載の内容です。

「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

6月のメニュー

◆河北新報ＮＩＥコンサルタント渡邉裕子さんによる
新聞を使ったワークショップ「つぶやきＮＥＷＳ」の実践
※参加者には、見ればできる！お手本 DVD を差し上げます！

◇持ち物・はさみ　のり

◇「新人バリスタ」による
美味しくな～れの念を込めた「とっておきの一杯」もご用意します！

日時：2018年6月30日（土）　14:00～16:00
場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）
＊参加費無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

第１３回は７月２１日（土）開催。
河北新報 NIE 教育コンサルタント、兼店長、兼看板ウエイトレスの渡邉裕子さんによるワークショップ「ことばのギフトカード（ことばの貯金箱の進化版）です！
どうぞお楽しみに～！

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたは FAX でこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第 13 回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

「楽しみながら新聞活用！」がテーマの「土曜しんぶんカフェ」。
12 回のワークショップ「つぶやき NEWS」は新聞記事の言葉を使ってメンバー同士でお互いにコメントをリレーさせるスタイルで、コミュニケーションの基礎訓練としても大変役立つものでした。さて、13 回のカフェも前回に引き続き、NIE 教育コンサルタントの渡邉裕子さん考案の人気の新聞を使っての実践講座を開催します。今回は「ことばのギフトカード」です。自分の気持ちを相手に伝えるって、大人でもなかなか難しいものです。けれど、新聞の言葉を借りてみると、心の中にあるフワッとした自分の気持ちに具体性が出て、伝えたいことが見えてくるのです。意外と楽に表現できることに驚くことになるかも知れません！このワークショップの裏テーマは、ずばり「思いの伝え方を学ぶ！」です。

「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

7月のメニュー

◆河北新報ＮＩＥコンサルタント渡邉裕子さん
（ことばの貯金箱「夢」プロジェクト代表）による
新聞を使ったワークショップ
「ことばのギフトカード（ことばの貯金箱の進化版）」

◇持ち物・ 筆記用具
◇「新人バリスタ」による
美味しくな～れの念を込めた「とっておきの一杯」もご用意します！

日時：2018年7月21日（土）　14:00～16:00
場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）
＊参加費無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

第１４回は９月１５日（土）開催。
日本新聞協会のＮＩＥコーディネーター、関口修司さんが講師です。
詳細は後日ご案内いたします。どうぞお楽しみに～！

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたは FAX でこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第14回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

「楽しみながら新聞活用！」がテーマの「土曜しんぶんカフェ」。
前回は「つぶやきNEWS」に続いて、「ことばのギフトカード」と新聞を使った人気のワークショップを行いました。ギフトカードだけでなく、急遽リクエストにお応えして、記事の切り抜きを貼り付ける三角錐の卓上ネームプレート作りにも挑戦しました。仙台とは思えない暑さの中、来て頂いた皆様には、かなり濃厚に盛りだくさんでお楽しみいただけたかと思います。さて今回も有意義なお話を、じっくりと聞いていただこうと思います。講師はＮＩＥ草創記からご活躍のコーディネーター、関口修司さんです。
「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

9月のメニュー　◆日本新聞協会ＮＩＥコーディネーター（元東十条小学校長）
関口　修司さんによる講演

「今、新聞だからできることー新学習指導要領とNIE」

◇「かほくバリスタ」による
美味しくな～れの念を込めた「とっておきの一杯」もご用意します！
※カフェの後は、関口先生を囲んでの懇親会を予定しております。
場所は未定ですが、参加希望の方は事前に事務局までお知らせ下さい。

日時：2018年9月15日（土）　14:00～16:00
場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）
＊参加費無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

第１５回は１０月２７日（土）開催。
ＮＩＥアドバイザーで高森中学校教諭の木下晴子さんによる新聞を使った「道徳」の授業の実践発表と、「道徳」教材用記事探しのワークショップです。
どうぞお楽しみに～！

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたはFAXでこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第 15 回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

「楽しみながら新聞活用！」がテーマの「土曜しんぶんカフェ」。
前回はＮＩＥ草創期からご活躍の日本新聞協会ＮＩＥコーディネーターで元校長先生の関口修司さんにお越しいただきました。新聞を取り入れた授業がいかに子供たちの成長に役立つのか、そのまま再現したくなる授業内容の実例も交えてご紹介下さいました。新聞ワークは週１回１時間の活動でも３カ月も経つ頃には子供たちに劇的な変化があること。だからといって回数を増やせば逆に新聞嫌いになるといったアドバイスなど理論と体験に基づいたお話に参加者一同聞き入っていました！
「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

１０月のメニュー

◆ＮＩＥアドバイザー（高森中学校教諭）木下晴子さんによる

新聞を使った「道徳」の授業の実践発表と、

「道徳」教材用記事探しのワークショップ

◇「かほくバリスタ」の「とっておきの一杯」もご用意しています
◇　持ち物　・筆記用具・ハサミ・のり

日時：2018年１０月２７日（土）　14:00～16:00
場所：河北新報社　別館５Ｆホール（青葉区五橋）
＊参加費無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

第１６回は１１月１７日（土）開催。
ＮＩＥアドバイザーで名取北高校教諭の大槻欣史さんによる
「英語とＮＩＥ」の実践発表と、ワークショップ「英語ワークシート作りに挑戦」です。
どうぞお楽しみに～！

～今後のカフェの開催予定日は、12/8・1/19・2/16 です～

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたは FAX でこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第16回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

「楽しみながら新聞活用！」がテーマの「土曜しんぶんカフェ」。
強烈な暑さの夏も過ぎてみればあっという間…。河北新報社の周辺にあるイチョウの葉も少しずつ色を変え、歩道を飾る香り豊かな銀杏の実を踏まずに歩く注意力を必要とする今日この頃、温かいコーヒーが美味しい季節でもあります。今回は「新聞と英語」が題材です。縁遠いように見えて、実はとっても簡単に活用できる！　そんなアイディアが待ってます。
「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

１１月のメニュー

◆ＮＩＥアドバイザー（名取北高校教諭）大槻欣史さんによる

「英語でＮＩＥ」の実践発表と

「英語ワークシート作りに挑戦」

◇「かほくバリスタ」の「とっておきの一杯」もご用意しています
◇　持ち物　・筆記用具・ハサミ・のり

日時：2018年１１月１７日（土）　14:00～16:00
場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）
＊参加無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

第１７回は１２月８日（土）開催。
東北福祉大学、三浦和美教授による実践発表と、
「ことばの貯金箱を活用した自分だけのカレンダーづくり」です。
どうぞお楽しみに～！

～今後のカフェの開催予定日は、1/19・2/16です～

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたはFAXでこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第 17 回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

あっという間に今年最後の「土曜しんぶんカフェ」のご案内です。

今回は自分だけのオリジナルカレンダーを作ります！「ことばの貯金箱」進化系のワークショップです。なんと出来上がった作品は、講師の三浦先生がラミネート加工までして下さいますので、そのまま自宅でお使いになれます。思い思いのカレンダーを作りながら、来年に思いをはせて盛り上がりましょう。

「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

１２月のメニュー

◆東北福祉大学　教育学部教授
三浦和美さんによる実践発表

「ことばの貯金箱を活用した自分だけのカレンダーづくり」に挑戦します

◇「かほくバリスタ」の「とっておきの一杯」もご用意しています
◇　持ち物　・筆記用具・ハサミ・のり

日時：2018年１２月８日（土）　14:00～16:00
場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）
＊参加無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

第１８回は１月１９日（土）開催。「ことばの貯金箱」講習会です。
２月のカフェと合わせて２回とも受講された方はファシリテーターとして認定！
修了証が発行されますので、お誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください！

～本年度最後のカフェの開催は、2/16 です～

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたは FAX でこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第18回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

本年度のカフェも残すところ２回のみ…。たくさんの方にご参加いただき、主催者としてもたくさんの気づきを頂戴しました。本当にありがとうございました。

そこで皆さんにはぜひ、新聞を使ったワークショップを開催する側としても活躍していただきたい！との思いから、昨年に引き続き、当カフェのチーフウエートレス渡邊裕子さん考案のスペシャルプログラムをご用意。今回の前編では「ことばの貯金箱」などの三つの人気ワークショップの実践について。参加者の興味を引き付けるトークや、笑顔を引き出す進行の秘訣も伝授！２月の後編も受講された方には、ファシリテーターとして認定し、修了証を差し上げます。認定されると「ことばの貯金箱」のロゴ入りの名刺を持ち、地域などでワークショップを開催することができます。ぜひ２回合わせてご参加ください！

「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

１月のメニュー

◆河北新報ＮＩＥ教育コンサルタント渡邊裕子さん
（ことばの貯金箱「夢」プロジェクト代表）による

新聞を使ったワークショップ

「ことばの貯金箱」ファシリテーター養成講座・前編

※「ことばの貯金箱・ギフトカード・つぶやきニュース」の具体的な取り組み方を伝授！　子供の気持ちをギュッと掴む実践テクニックがあなたのものに！

◇「かほくバリスタ」の「とっておきの一杯」もご用意しています

◇　持ち物　・筆記用具・ハサミ・のり

日時：2019年１月１９日（土）　14:00～16:00

場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）

＊参加無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

第１９回は２月１６日（土）開催。「ことばの貯金箱」養成講座の後編です。
２月のカフェと合わせて２回とも受講された方はファシリテーターとして認定！
修了証が発行されますので、ぜひ連続してご参加ください！

～２月は本年度最後のカフェです～

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたはFAXでこちら↓まで■

河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp

TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339

上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

新聞を生かした学びと癒やしの空間

第19回「土曜しんぶんカフェ」のご案内

渡邊裕子先生による人気の「ファシリテーター養成講座」の後編です！

１月の前編に参加された方には、「ことばの貯金箱」ファシリテーター認定証を授与いたします。認定された方は、地域などでのワークショップで、たくさんの方と新聞の楽しみ方を共有していただきたいと思います。「ことちょき系ワークショップ」の効果は、語彙力や読解力を向上させるだけでありません。新聞の言葉を用いることで、参加者が楽しみながら自分の気持ちの伝え方、相手の気持ちの読み取り方を身に付け、心の安定に役立ちます。言葉のパワーで子どもも大人も幸せに！を目指しましょう！

今回はプレゼンに挑戦です。実践力を身に付けて帰っていただきたいと思っております。

「遊べる」「楽しめる」しんぶんカフェでお待ちしております。　「土曜しんぶんカフェ」スタッフ一同

2月のメニュー

◆河北新報ＮＩＥ教育コンサルタント渡邊裕子さん
（ことばの貯金箱「夢」プロジェクト代表）による

新聞を使ったワークショップ

「ことばの貯金箱」ファシリテーター養成講座・後編

※「ことばの貯金箱系ワークショップ」のプレゼンに挑戦します！

認定証を手にして、ことちょき掴む実践テクニックがあなたのものに！

◇「かほくバリスタ」の「とっておきの一杯」もご用意しています

◇　持ち物　・筆記用具・ハサミ・のり

日時：2019年2月16日（土）　14:00～16:00

場所：河北新報社１Ｆセミナールーム（青葉区五橋）

＊参加無料・お車でお越しの方は、近隣の有料駐車場をご利用ください。

～～これまでのカフェの一コマです～～

2018年度の最終回です！
１月の前編に参加された方は今回認定証が授与されます！・・・が、
今回だけでも十分楽しめる内容ですので、遠慮なくお申し込みください！

～2019年度もお楽しみに～

■参加申し込み・問い合わせは、メールまたはFAXでこちら↓まで■
河北新報社　防災・教育室　E-mail kyopro@po.kahoku.co.jp
TEL 022(211)1309　FAX 022(211)1339
上記まで学校名・氏名・連絡用ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ・電話番号をお知らせください。

Ⅵ 研究組織

１　宮城県ＮＩＥ委員会会則

（名称）
第1条　本会は宮城県ＮＩＥ委員会と称する。
（目的）
第2条　本会はＮＩＥ（Newspaper in Education・教育に新聞を）の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。
（事業）
第3条　本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。
①実施目的及び計画に関すること。
②研究推進組織に関すること。
（組織）
第4条　本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮城県教育委員会代表者	宮城県連合小学校特別活動研究会会長
仙台市教育委員会代表者	宮城県連合中学校特別活動研究会会長
宮城県小学校長会会長	宮城県連合小学校生活・総合研究会長
仙台市小学校長会会長	仙台市中学校総合的な学習研究会長
宮城県中学校長会会長	宮城県連合小学校国語研究会長
仙台市中学校長会会長	宮城県連合中学校国語研究会長
宮城県高等学校長協会長	仙台市中学校国語研究会長
宮城県連合小学校教育研究会会長	宮城県内の大学の代表者
宮城県連合中学校教育研究会会長	在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

（任期）
第5条　委員の任期は２年とし、再任を妨げない。
（会長・副会長・監事）
第6条　1　本会に、会長１名、副会長５名、監事１名を置く。
2　会長は委員会を代表し、会務を統括する。
3　副会長は会長が指名する。
4　会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。
5　監事は会計監査を行う。
（会議）
第7条　本会の会議は、会長が招集し、主宰する。
（顧問）
第8条　本会に次の顧問を置く。
宮城県教育長　　仙台市教育長
（推進委員会）
第9条　本会の事業を達成するために、宮城県ＮＩＥ推進委員会を置く。この会則は別に定める。
（庶務）
第10条　1　本会の庶務は、宮城県ＮＩＥ委員会事務局が行う。
2　会計年度は４月１日から翌年３月31日とする。
（報酬）
第11条　本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。
（補則）
第12条　この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

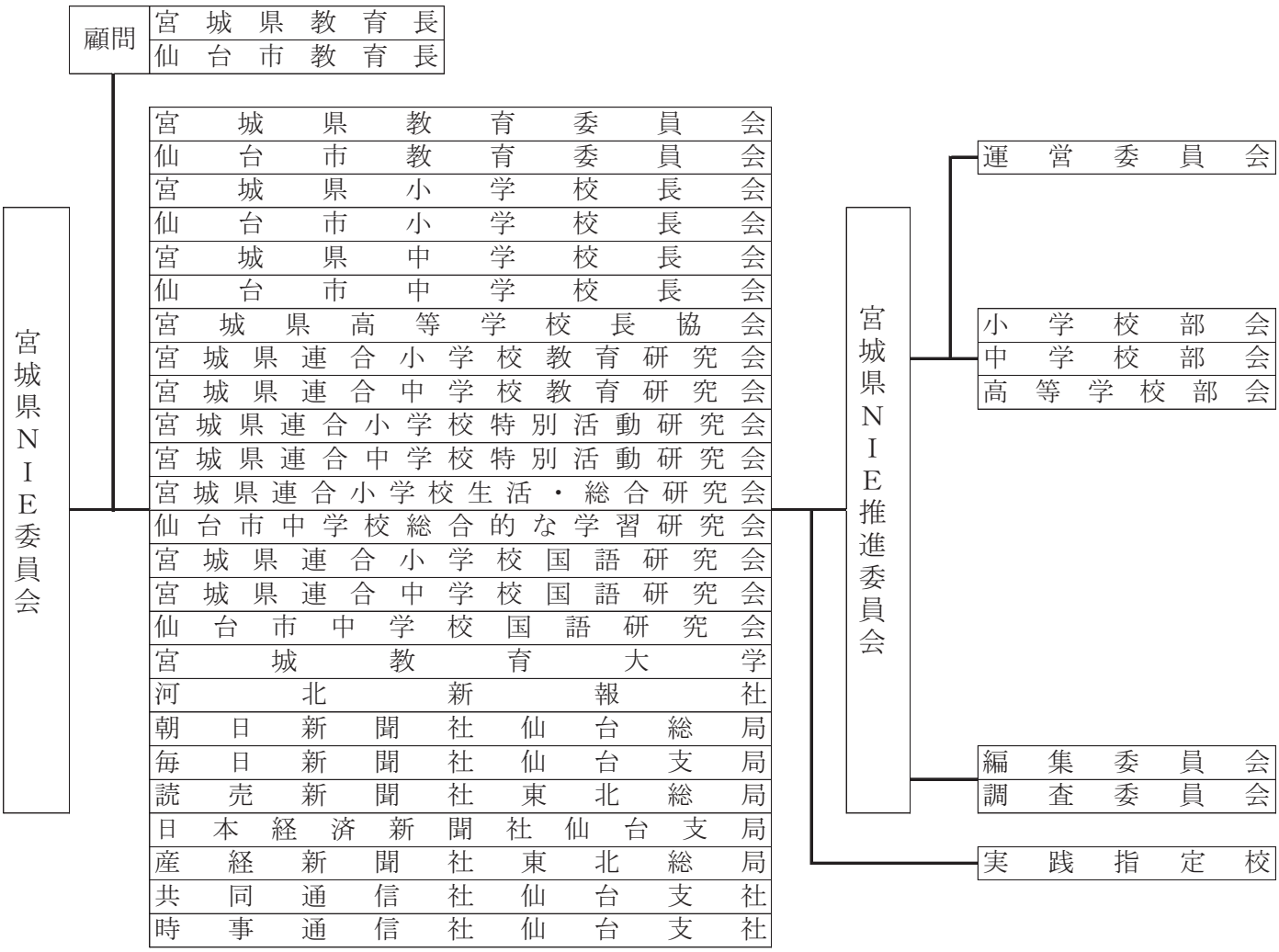
付　則　この会則は、平成元年７月７日から施行する。

改正　平成５年７月１日	改正　平成22年６月１日
改正　平成６年６月９日	改正　平成23年７月５日
改正　平成16年２月27日	改正　平成24年６月５日
改正　平成18年２月15日	改正　平成25年６月20日
改正　平成22年２月26日	

２　宮城県ＮＩＥ推進委員会会則

（名称）
第１条　本会は宮城県ＮＩＥ推進委員会と称する。
（目的）
第２条　本会は、宮城県ＮＩＥ委員会会則の第２条（目的）を達成するために、次のことがらを行う。
①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成
（研究）
第３条　本会は前条の目的を達成するために、次のことがらについて協議し、研究する。
①ＮＩＥ研究活動の推進
②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
③新聞についての諸調査
④研究会誌の編集と発行
⑤その他の会の目的を達成するために必要なことがら
（組織）
第４条　１　本会は、ＮＩＥに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。
２　本会の構成は次の通りとする。
委員長１名、副委員長、運営委員、専門委員、委員、事務局
３　委員長、副委員長を役員とする。
（任期）
第５条　役員、運営委員の任期は１年とする。ただし再任を妨げない。
（委員長）
第６条　１　委員長は別表に基づき、副委員長が輪番でその任にあたる。
２　委員長は委員会を代表し、会務を統括する。
（副委員長）
第７条　１　副委員長は、次に掲げるものとする。
宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長
２　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。
（運営委員）
第８条　１　運営委員は、会員の互選により定める。
２　運営委員は、研究活動の運営及び推進を主導する
（専門委員）
第９条　１　専門委員は、会員の互選により定める。
２　専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。
（会議）
第10条　本会の会議は、委員長が招集し、主宰する
（提携する他の機関）
第11条　本会の目的を達成するために、宮城県NIE委員会と提携する。
（庶務）
第12条　本会の庶務は、宮城県NIE委員会事務局が行う。
（補則）
第13条　この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。
付　　則　この会則は、平成元年７月７日から施行する。
改正　平成５年６月25日
改正　平成16年２月27日
改正　平成20年１月16日
改正　平成23年２月25日
改正　平成24年６月５日
改正　平成31年２月13日
◆内規　＊追加
１　宮城県ＮＩＥ実践指定校は、教員１名以上が本会に加入し、運営委員を務める。

３　宮城県ＮＩＥ委員会　及び　宮城県ＮＩＥ推進委員会の構成



平成30年度宮城県NIE委員会役員

〈敬称略〉

役職	氏名	所属役職
顧問	髙橋　仁	宮城県教育委員会教育長
顧問	佐々木　洋	仙台市教育委員会教育長
会長	志小田　美弘	宮城県中学校長会長（石巻中校長）
副会長	小林　裕介	宮城県高等学校長協会長(仙台第一高校長)
副会長	鈴木　芳夫	仙台市中学校長会長（五城中校長）
副会長	吉木　修	宮城県小学校長会長（増田小校長）
副会長	吉田　秀夫	仙台市小学校長会長（片平丁小校長）
副会長	武田　真一	河北新報社防災・教育室長
委員	伊藤　俊	宮城県教育庁　高校教育課長
委員	奥山　勉	宮城県教育庁　義務教育課長
委員	岩田　光世	仙台市教育局　教育指導課長
委員	綱川　誠	宮城県連合小学校教育研究会長（川崎小校長）
委員	橋本　牧	宮城県連合中学校教育研究会長（村田第一中校長）
委員	南條　智重	宮城県連合小学校特別活動研究会長（大野田小校長）

役職	氏名	所属役職
委員	佐々木　靜輝	宮城県連合中学校特別活動研究会長（三条中校長）
委員	丹野　伸裕	宮城県連合小学校生活・総合研究会長（鶴谷小校長）
委員	八島　浩子	仙台市中学校総合的な学習研究会長（生出中校長）
委員	小石　俊聡	宮城県連合小学校国語研究会長(八幡小校長)
委員	山内　芳明	宮城県連合中学校国語研究会長（成田中校長）
委員	平塚　美保	仙台市中学校国語研究会長（七北田中校長）
委員	児玉　忠	宮城教育大学（教授）
委員	後藤　啓文	朝日新聞社仙台総局長
委員	大谷　麻由美	毎日新聞社仙台支局長
委員	佐藤　浅伸	読売新聞社東北総局長
委員	川合　知	日本経済新聞社仙台支局長
委員	廣瀬　典孝	産経新聞社東北総局長
委員・監事	長田　良夫	共同通信社仙台支社長
委員	渡辺　知毅	時事通信社仙台支社長

平成30年度教育委員会担当者　〈敬称略〉

宮城県	櫻井　知大	宮城県教育庁高校教育課主幹
宮城県	稲辺　正昭	宮城県教育庁義務教育課課長補佐
仙台市	田中　元昭	仙台市教育局教育指導課主任指導主事

平成30年度　宮城県NIE推進委員会　運営委員会

〈敬称略〉

役　職	氏　名	学校名（職名）
委員長	小　石　俊　聡	仙台市立八幡小学校（校長）
副委員長	丹　野　伸　裕	仙台市立鶴谷小学校（校長）
副委員長	南　條　智　重	仙台市立大野田小学校（校長）
副委員長・中部会長	佐々木　静　輝	仙台市立三条中学校（校長）
副委員長	八　島　浩　子	仙台市立生出中学校（校長）
副委員長	山　内　芳　明	富谷市立成田中学校（校長）
副委員長	平　塚　美　保	仙台市立七北田中学校（校長）
副委員長・小部会長	中　辻　正　樹	仙台市立高砂小学校（校長）
運委・小副部会長	髙　橋　　淳	仙台市立北仙台小学校（校長）
運委・小副部会長	鍵　　頼　信	石巻市立二俣小学校（校長）
運委・会計	大　友　浩　美	仙台市立袋原小学校
運委	伊　藤　公　一	仙台市立秋保小学校（校長）
運委	相　澤　経　利	仙台市立七北田小学校（校長）
運委	阿　部　　謙	仙台市立東六番丁小学校（教頭）
運委	大　場　陽　子	利府町立しらかし台小学校（教頭）
運委	千　葉　久美子	仙台市立北六番丁小学校
運委	今　藤　正　彦	仙台市立七北田小学校
運委	山　本　十和子	仙台市立片平丁小学校
運委	青　木　　茂	仙台市立高砂小学校
運委	行　本　忠　司	仙台市立大野田小学校
運委	齋　田　淳　一	仙台市立大倉小学校
運委	松　本　瑞　雅	仙台市立柳生小学校
運委	鈴　木　　誠	多賀城市立山王小学校
運委	三　塚　理　恵	美里町立青生小学校
運委	秋　塲　文　東	松島町立松島第一小学校
運委	小　山　順　一	登米市立北方小学校
運委	千　葉　　修	大崎市立三本木小学校
運委	笠　原　慎一郎	富谷市立富ケ丘小学校
運委	松　永　秀　子	柴田町立柴田小学校
運委・実践指定校	門　井　菜津子	柴田町立柴田小学校
運委・実践指定校	菅　原　洋　一	登米市立豊里小学校
運委・実践指定校	石　井　真紀子	仙台市立八木山小学校
運委・実践指定校	安　積　章　彦	仙台市立館小学校
運委・実践指定校	大　澤　寛　子	聖ウルスラ学院英智小・中学校
運委・実践指定校	武　山　知　子	南三陸町立戸倉小学校
運委・中副部会長	進　藤　千　枝	仙台市立長町中学校
運委・中副部会長	相　澤　和　男	仙台市立松陵中学校
運委・会計	菅　原　久　美	仙台市立折立中学校
運委・実践指定校	山　家　優　子	登米市立豊里中学校
運委	須　藤　浩　司	仙台市立八木山中学校
運委	木　下　晴　子	仙台市立高森中学校
運委	清　野　和　俊	仙台市立住吉台中学校
運委	齋　藤　美　佳	大崎市立岩出山中学校
運委	庄　司　　渉	大崎市立松山中学校
運委	丸　山　　仁	宮城学院中学校
副委員長・高部会長 実践指定校	鈴　木　理　恵	仙台城南高等学校
運委・高副部会長 実践指定校	高　瀬　琢　弥	宮城県仙台三桜高等学校
運委・会計	大　槻　欣　史	宮城県名取北高等学校
運委・実践指定校	三　嶋　廣　人	宮城県気仙沼高等学校
運委・実践指定校	浅　水　啓一郎	宮城県宮城広瀬高等学校
運委	平　居　高　志	宮城県塩釜高等学校
運委	萱　沼　俊　一	宮城県白石工業高等学校
運委	木　村　　誠	宮城県仙台南高等学校
運委	柴　田　隆　一	東北学院高等学校
運委	加　藤　　寿	東北学院高等学校
運委	坂　本　　謙	宮城県図書館

NIEアドバイザー

〈敬称略〉

氏　名	学校名（職名）
中　辻　正　樹	仙台市立高砂小学校(校長)
阿　部　　謙	仙台市立東六番丁小学校(教頭)
今　藤　正　彦	仙台市立七北田小学校
木　下　晴　子	仙台市立高森中学校
菅　原　久　美	仙台市立折立中学校
齋　藤　美　佳	大崎市立岩出山中学校
大　槻　欣　史	宮城県名取北高等学校
坂　本　　謙	宮城県図書館
齋　藤　昭　雄	日本新聞協会ＮＩＥアドバイザー

宮城県NIE事務局

氏　名	所　属　役　職
武　田　真　一	河北新報社防災・教育室長
鈴　木　　淳	河北新報社防災・教育室部長
佐々木　可奈子	河北新報社防災・教育室
大　泉　大　介	河北新報社防災・教育室
佐　藤　素　子	河北新報社防災・教育室
北　條　哲　広	河北新報社防災・教育室
渡　辺　ゆ　き	河北新報社防災・教育室
飯　坂　　新	宮城県ＮＩＥ委員会コーディネーター
主　藤　　綾	河北新報社防災・教育室
天　野　路　子	河北新報社防災・教育室
伊　藤　純　子	河北新報社防災・教育室

Ⅶ　宮城県ＮＩＥの歩み

	組　織	推進委員（人）	協　力　校 実　践　校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実践発表会	研　修　会	集録・紀要・他
平成元年度	県ＮＩＥ委員会・推進委員会設立事務局河北	小　9 中　17 計　26	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録1号
平成2年度		小　22 中　17 計　39	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ	○芦口小 H2・10 ○八幡中 H2・10 ○中野中 H3・1		○県研究集録2号 ○紀要　芦口小 八幡小
平成3年度	高校部会発足	小　24 中　26 高　9 計　59	○長町中	○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録3号 ○実践実例集 小グループ1号
平成4年度		小　27 中　22 高　10 計　59	○長町中 ○旭丘小	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○長町中 H5・1 ○旭丘小 H5・1	○小学校ＮＩＥ研修会	○県研究集録4号 ○実践実例集 小グループ2号
平成5年度	朝日・読売毎日・共同時事の各社加盟	小　56 中　30 高　16 計　102	○長町中 ○旭丘小 ○折立小 ○八軒中	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H5・10 ○長町中 H6・1 ○旭丘小 H6・2	○小・中学校NIE研修会	○県研究集録5号 ○実践実例集 小グループ3号
平成6年度	日経・産経の各社加盟	小　68 中　49 高　18 他　1 計　136	○折立小 ○上杉山通小 （ﾊﾟｲﾛｯﾄ校） ○八軒中 ○向陽台中 （ﾊﾟｲﾛｯﾄ校） ○泉高 （ﾊﾟｲﾛｯﾄ校）	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H6・10 ○泉高 H6・11 ○折立小 H7・2	○小・中・高校NIE研修会	○県研究集録6号 ○紀要　折立小 ○実践実例集 小グループ4号 中ＮＩＥ部1号 ○みやぎＮＩＥだより 1．2．3号
平成7年度		小　105 中　47 高　19 他　5 計　176	○上杉山通小 （ﾊﾟｲﾛｯﾄ校） ○向陽台中 （ﾊﾟｲﾛｯﾄ校） ○袋原小 ○茂庭台中 ○泉高 （ﾊﾟｲﾛｯﾄ校）	○小・中・高部会の研究活動	○向陽台中 H7・12 ○上杉山通小 H8・1	○宮城県ＮＩＥ研修会 ○地区研修会（古川） ○地区研修会（七ヶ浜）	○県研究集録7号 ○紀要　上杉山通小 ○実践実例集 小学校部会5号 中学校部会12号 ○みやぎＮＩＥだより 4．5号
平成8年度		小　113 中　54 高　22 他　7 計　196	○袋原小 ○上杉山通小 ○将監小 ○古川一小 ○茂庭台中 ○生出中 ○宮中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の研究活動 （授業研究）	○茂庭台中 H8・10 ○上杉山通小 H8・10 ○桜丘中 H8・11 ○将監小 H9・1 ○袋原小 H9・2	○宮城県ＮＩＥ研修会 （仙台市） ○宮城県NIE白石研修会 （白石二小） ○宮城県NIE石巻研修会 （住吉小）	○県研究集録8号 ○紀要　袋原小 ○実践実例集 小学校部会6号 ○みやぎＮＩＥだより 6．7．8．9号

	組　織	推進委員（人）	協　力　校 実　践　校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実践発表会	研　修　会	集録・紀要・他
平成9年度		小　122 中　60 高　28 他　7 計　217	○将監小 ○古川一小 ○桂小 ○大鷹沢小 ○生出中 ○宮中 ○蒲町中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の研究活動	○将監小 H9・11 ○桂小 H10・2	○宮城県ＮＩＥ研修会 （常盤木学園高） ○宮城県NIE白石研修会 （大鷹沢小） ○宮城県NIE石巻研修会 （石巻中） ○中・高部会研修会 （田子中）	○県研究集録9号 ○紀要　将監小 ○みやぎＮＩＥだより 10．11．12．13号
平成10年度		小　132 中　61 高　27 他　7 計　227	○桂小 ○大鷹沢小 ○女川四小 ○蒲町中 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の研究活動	○女川四小 （授業公開） H10・5 ○桂小 （授業公開） H10・11 ○常盤木学園高 H10・11 ○大鷹沢小 （授業公開） H11・1	○第3回ＮＩＥ全国大会 （ﾒﾙﾊﾟﾙｸSENDAI） ○宮城県NIE石巻研修会 （稲井小） ○中・高部会研修会 （七郷中） ○小部会研修会　（桂小）	○県研究集録10号 ○ＮＩＥ実践事例集 「やってみよう!NIE」 小学校部会 ○みやぎＮＩＥだより 14．15．16．17号
平成11年度		小　132 中　60 高　28 他　10 計　230	○女川四小 ○東長町小 ○しらかし台小 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○山田中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の研究活動 （実践発表・授業研究・プロジェクトチームの研究）	○常盤木学園高 （授業公開） H11・11 ○しらかし台小 （授業公開） H11・11・26 ○女川四小 （授業公開） H11・11・29 ○七郷中 （授業公開） H11・12・1	○宮城県ＮＩＥ研修会 H11・6・16（明成高） ○小部会ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ提案 H11・8・24（東六小） ○宮城県NIE石巻研修会 H11・11・22（蛇田小） ○宮城県NIE大河原研修会 H11・12・1 （金ヶ瀬中） ○中部会授業研究会 H11・12・1(七郷中) ○小部会実践発表会 H11・1・12 （東長町小）	○県研究集録11号 ○みやぎＮＩＥだより 18・19・20・21号
平成12年度		小　128 中　60 高　31 他　13 計　232	○東長町小 ○しらかし台小 ○大沢小 ○蛇田小 ○山田中 ○秋保中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高	○小・中・高部会の研究活動 （実践発表・授業研究・プロジェクトチームの研究）	○しらかし台小 （授業公開） H12・11・28 ○秋保中 （授業公開） H12・11・30 ○東長町小 （授業公開） H13・1・31	○小部会研修会 （ﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ活用） H12・9・13（大沢小） ○宮城県ＮＩＥ研修会 H12・10・4 （八木山小） ○宮城県NIE仙台地区研修会　H12・11・6 （しらかし台小） ○宮城県NIE石巻地区研修会　H12・11・8 （蛇田小）	○県研究集録12号 ○みやぎＮＩＥだより 22・23・24・25号

	組　織	推進委員（人）	協　力　校 実　践　校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実践発表会	研　修　会	集録・紀要・他
平成13年度		小　128 中　61 高　34 他　16 計　239	○大沢小 ○蛇田小 ○月見ケ丘小 ○秋保中 ○塩竈一中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高 ○仙台図南萩陵高	○小・中・高部会の研究活動	○仙台向山高（授業公開）H13・10・2 ○明成高（授業公開）H13・12・12	○宮城県ＮＩＥ研修会 H13・11・28（明成高） ○宮城県NIE石巻地区研修会　H13・11・5（蛇田小） ○宮城県NIE仙台地区研修会　H13・12・7（塩竈一中）	○県研究集録13号 ○みやぎＮＩＥだより 26・27・28・29号
平成14年度		小　129 中　62 高　34 他　14 計　239	○月見ケ丘小 ○逢隈小 ○小野小 ○塩竈一中 ○将監中 ○筆甫中 ○東北朝鮮学校 ○仙台図南萩陵高 ○女川高	○小・中・高部会の研究活動 （小部会「ＮＩＥおしゃべり広場」H14・8・19「インターネットの活用」　H14・8・20 中・高部会「公開講演会」H14・12・3）		○宮城県ＮＩＥ研修会 H14・11・7（河北新報社） ○宮城県NIE仙台大河原地区研修会 H14・11・28(逢隈小) ○宮城県NIE石巻古川地区研修会　H15・1・24（鳴瀬町中央公民館）	○県研究集録14号 ○みやぎＮＩＥだより 30・31・32・33号
平成15年度		小　129 中　53 高　34 他　14 計　230	○小野小 ○逢隈小 ○嵯峨立小 ○将監中 ○筆甫中 ○五橋中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台白百合学園中・高	○小・中・高部会の研究活動		○宮城県ＮＩＥ研究大会 H15・8・20（青葉体育館） ○宮城県NIE大河原地区研修会　H15・8・22（逢隈小） ○宮城県NIE石巻・古川地区研修会 H16・1・23（鳴瀬町中央公民館）	○県研究集録15号 ○みやぎＮＩＥだより 34・35・36・37号
平成16年度		小　124 中　57 高　31 他　11 計　223	○嵯峨立小 ○五橋中 ○仙台白百合学園中・高 ○越河小 ○広渕小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○五橋中（授業公開）H16・11・2	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H16・11・2（五橋中） ○宮城県NIE大河原地区研修会　H16・8・20（白石市中央公民館） ○宮城県NIE古川地区研修会　H16・8・24（田尻中）	○県研究集録16号 ○みやぎＮＩＥだより 38・39・40・41号
平成17年度		小　123 中　54 高　28 他　12 計　217	○越河小 ○広渕小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高 ○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動 ○小学校部会授業研究　H18・2・10（鹿野小）	○仙台白百合学園中・高（授業公開）H17・11・9	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H17・11・9（仙台白百合学園） ○宮城県NIE古川地区研修会　H17・8・23（田尻中） ○宮城県NIE大河原地区研修会　H17・8・24（大河原中）	○県研究集録17号 ○みやぎＮＩＥだより 42・43・44・45号

	組　織	推進委員（人）	協　力　校 実　践　校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実践発表会	研　修　会	集録・紀要・他
平成18年度		小　125 中　53 高　28 他　11 計　217	○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校 ○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動 ○小学校部会授業研究　H18・12・6（原町小）	○仙台市立南中山中学校（授業公開）H18・11・9	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H18・11・9（仙台市立南中山中） ○宮城県NIE本吉地区研修会　H18・8・3（大谷小） ○宮城県NIE大河原地区研修会　H18・8・22（大河原中）	○県研究集録18号 ○みやぎＮＩＥだより 46・47・48・49号
平成19年度		小　124 中　52 高　27 他　10 計　213	○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中 ○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚絅学院女子中・高	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立黒松小学校（授業公開）H19・10・3	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H19・10・3（仙台市立黒松小） ○宮城県NIE本吉地区研修会　H19・8・2（大谷小） ○宮城県NIE大崎地区研修会　H19・8・23（涌谷町立涌谷第一小）	○県研究集録19号 ○みやぎＮＩＥだより 50・51・52・53号
平成20年度		小　126 中　53 高　28 他　8 計　215	○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚絅学院中・高 ○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○大沢中（奨励校）	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立大沢中学校（授業公開）H20・11・17 ○涌谷町立涌谷第一小学校（授業公開）H21・1・22	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H20・11・17（仙台市立大沢中） ○宮城県NIE仙台北地区研修会　H20・8・11（富谷町立成田中） ○宮城県NIE仙台南地区研修会　H20・8・21（亘理町立図書館）	○県研究集録20号 ○みやぎＮＩＥだより 54・55・56・57号
平成21年度		小　140 中　54 高　23 他　10 計　227	○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○涌谷一小（奨励校）	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立榴岡小学校（授業公開）H21.11.25 ○仙台市立旭丘小学校（授業公開）H21.12.10	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H21.11.25（仙台市立榴岡小） ○宮城県NIE地区研修会 H21.8.20（石巻市立河南東中） ○小部会研究交流会 H21.12.10（仙台市立旭丘小）	○県研究集録21号 ○みやぎＮＩＥだより 58・59・60・61号

	組　織	推進委員（人）	協　力　校 実　践　校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実践発表会	研　修　会	集録・紀要・他
平成22年度	宮教大加盟 高校長協会加盟	小　121 中　50 高　18 大　4 他　12 計　205	○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○横山小 （奨励校）	○小・中・高部会 研究活動	○仙台市立 南小泉中学校 （授業公開） H22.11.11 ○仙台市立 蒲町小学校 （授業公開） H22.11.26	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H22.11.11 （仙台市若林区文化ｾﾝﾀｰ） ○宮城県NIE地区研修会 H22.8.18 （塩竈市立塩竈第三小） ○小部会研究交流会 H22.11.26 （仙台市立蒲町小）	○県研究集録22号 ○みやぎＮＩＥだより 62・63・64・65・66号
平成23年度	小学校国語研究会加盟	小　120 中　50 高　17 大　4 他　14 計　205	○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院 榴ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○榴岡小 （奨励校）	○小・中・高部会 研究活動	○仙台市立 榴岡小学校 （授業公開） H23.10.18 ○仙台市立 東宮城野小学校 （授業公開） H23.12.7 ○大河原町立 大河原小学校 （授業公開） H24.1.24 ○大崎市立 古川第三小学校 （授業公開） H24.2.23	○宮城県ＮＩＥ研究大会 H23.12.7 （仙台市立東宮城野小） ○宮城県NIE地区研修会 H23.8.17 （河北新報社）	○県研究集録23号 ○みやぎＮＩＥだより 67・68・69・70号
平成24年度	宮城県中学校国語研究会加盟	小　114 中　51 高　16 大　4 他　15 計　200	○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院 榴ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○水産高 ○大河原小 （奨励校）	○小・中・高部会 研究活動	○仙台市立 八乙女中学校 （授業公開） H24.11.9 ○美里町立 小牛田小学校 （授業公開） H24.11.28 ○仙台市立 北六番丁小学校 （授業公開） H25.1.16	○宮城県NIE研究大会 H24.11.9 （仙台市立八乙女中） ○宮城県NIE地区研修会 H24.8.20 （大和町立吉岡小） ○小部会研究交流会 H25.1.16 （仙台市立北六番丁小） ○公開実践発表会 （協力校） H25.2.15 （河北新報社）	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H24.9.22 （河北新報社） ○県研究集録２４号 ○みやぎNIEだより 71・72・73・74号

	組　織	推進委員（人）	協　力　校 実　践　校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実践発表会	研　修　会	集録・紀要・他
平成25年度		小　111 中　46 高　17 大　5 他　12 計　191	○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○宮城水産高 ○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ学院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○小牛田小（奨励校） ○八乙女中（奨励校）	○小・中・高部会研究活動	○仙台市立八乙女中学校（自主公開）H25.11.8 ○美里町立小牛田小学校（自主公開）H25.11.14 ○登米市立東郷小学校（自主公開）H26.2.13	○宮城県NIE研究大会 H25.11.22（仙台市立北中山小） ○宮城県NIE地区研修会 H25.8.20（吉野作造記念館） ○小部会研究交流会 H26.2.25（仙台市立郡山小） ○公開実践発表会 H26.2.20（河北新報社）	○東北・北海道地区NIEアドバイザー会議 H25.9.21（岩手県一関市） ○県研究集録２５号 ○みやぎNIEだより 75・76・77・78号
平成26年度		小　115 中　49 高　19 大　5 他　14 計　202	○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ学院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○吉岡小（奨励校） ○東郷小（奨励校）	○小・中・高部会研究活動 ※小学校部会：５年国語科の提案授業実践	仙台市立富沢中学校（授業公開）H26.11.18	○宮城県NIE研究大会 H26.11.18（仙台市立富沢中） ○宮城県NIE地区研修会 H26.8.18（七ヶ浜国際村） ○小部会提案授業① H26.6.24（仙台市立泉松陵小） ○小部会提案授業② H26.6.30（仙台市立七北田小）	○東北・北海道地区NIEアドバイザー会議 H26.9.20（秋田魁新報社） ○実践報告集２６号 ○みやぎNIEだより 79・80・81・82号 ○日本ＮＩＥ学会（12月：東北福祉大学）
平成27年度		小　106 中　46 高　18 大　5 他　11 計　186	○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○東北学院高（奨励校）	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 ５年国語科の提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 英語科授業実践 講演会の実施	○仙台市立田子小学校（授業公開） ○５年国語科提案授業の公開（運営委員在籍校） ○仙台青陵中等教育学校の実践発表会	○宮城県NIE研究大会 H27.12.2（仙台市立田子小） ○宮城県NIE地区研修会 H27.8.18（塩竈市立第一小） ○小部会提案授業公開 ※１４校で実施 ○高部会実践発表会 H28.1.23	○東北・北海道地区NIEアドバイザー会議 H27.10.3（北海道新聞社） ○実践報告集２７号 ○みやぎNIEだより 83・84・85・86号

	組　織	推進委員（人）	協　力　校 実　践　校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実践発表会	研　修　会	集録・紀要・他
平成28年度		小　98 中　41 高　20 大　5 他　6 計　170	○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○船岡小 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 ５年国語科の 提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 専門紙を学ぶ （河北新報社）	○宮城学院中の 実践報告 ○登米市立 上沼小学校の 授業公開 （５年） ○仙台城南高の ＩＣＴ公開 （NIEとの関連）	○宮城県NIE研究大会 H28.11.9 （宮城学院中） ○宮城県NIE地区研修会 H28.8.24 （柴田町立柴田小） ○七北田小提案授業 H28.6.9 ○上沼小提案授業 H28.6.17	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H28.9.24 （福島民報社） ○実践報告集２８号 ○みやぎNIEだより 87・88・89・90号
平成29年度		小　87 中　39 高　19 大　5 他　11 計　161	○七北田小 ○宮城学院中 ○船岡小 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高 ○豊里小 ○八木山小 ○豊里中 ○仙台三桜高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」 の単元で一人一紙 を持たせ授業実践 （提供3658部） ・高校部会 論説委員による 講演会の実施 （河北新報社）	○仙台城南 高等学校 （授業公開） ○仙台城南高の ＩＣＴ公開 （NIEとの関連）	○宮城県NIE研究大会 H29.11.8 （仙台城南高等学校） ○宮城県NIE地区研修会 H29.8.21 （登米市立豊里小・中）	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H29.9.30 （山形新聞社） ○実践報告集２９号 ○みやぎNIEだより 91・92・93・94号
平成30年度		小　87 中　39 高　20 大　5 他　11 計　162	○柴田小 ○気仙沼高 ○仙台城南高 ○豊里小 ○八木山小 ○豊里中 ○仙台三桜高 ○館小 ○戸倉小 ○聖ウルスラ 学院英智小中 ○宮城広瀬高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」 の単元で１人１紙 を持たせ授業実践 （提供3684部） ・高校部会 大槻教諭(名取北) と高瀬主幹教諭(仙台三桜）による 実践報告と時事通 信社仙台支社長に よる講演会の実施 （河北新報社）	○宮城県仙台 三桜高等学校 （授業公開）	○宮城県NIE研究大会 H30.11.7 (宮城県仙台三桜高等学校) ○宮城県NIE地区研修会 H30.8.23 （南三陸町立戸倉小）	○実践報告集３０号 ○みやぎNIEだより 95・96・97・98号

Ⅷ　編集後記

「宮城県ＮＩＥ委員会実践報告書　第３０号」をお届けいたします。ご多用の中、原稿執筆をお引き受けいただきました各学校の先生方、関係の皆様に心から感謝申し上げます。

本報告書は、あいさつ、実践指定校・各部会からの実践報告、研修会報告、研究組織等で構成されており、日々の実践に基づく大変読み応えのある内容となっております。

各実践指定校からの報告には「新聞をどのように活用して、どのように学習を進めていったのか」具体的な事例が紹介されています。多くの学校に共通しているのは、まず新聞に触れ、記事を読む学習場面設定の工夫をしていることが挙げられます。常設コーナーを設置して掲示したり、朝活動で継続的に取り組んだりと「新聞に慣れ親しむ」ための、学校それぞれの学習活動への位置づけや取組への工夫がよく伝わってきます。

２月に行われた「宮城県ＮＩＥ実践発表会」に参加した際も、実践指定校の皆さんによる校内全体での日々の努力の様子がよくわかりました。

授業での活用については、ワークシートを用いて見出しをつけてみることや、記事内容の要約などを行い自分の考えをメモするなどして、グループで討論することや、発表にうまくつなげられるように授業構成されていました。

小学校部会の報告によりますと、５年国語教材「新聞記事を読み比べよう」での「１人１部の新聞提供事業」においては、県内４５校、３６８４部を提供し、活用がますます高められています。

学校現場では、学習指導要領の改訂に伴い情報活用能力を高めるために、新聞を含む多様な資料を活用することが求められています。

また「主体的・対話的で深い学び」のある授業の追究も喫緊の課題となっています。

皆さんのお手元にある玉稿は、各学校実践での力強いナビゲータになるものと確信しており今後さらにＮＩＥが深められ、さらに発展することを祈念し編集後記といたします。

（仙台市立高砂小学校　青木　茂）

＜編集委員＞
委員長　青木　茂（高砂小）
委　員　秋塲　文東（松島一小）
進藤　千枝（長町中）
丸山　仁（宮城学院中）
木村　誠（仙台南高）

＜事務局＞
防災・教育室長　武田　真一（河北新報社防災・教育室長）
事務局長　鈴木　淳（河北新報社防災・教育室部長）
事務局　佐々木可奈子（河北新報社防災・教育室）
大泉　大介（河北新報社防災・教育室）
佐藤　素子（河北新報社防災・教育室）
渡辺　ゆき（河北新報社防災・教育室）
北條　哲広（河北新報社防災・教育室）
飯坂　新（宮城県ＮＩＥ委員会コーディネーター）
主藤　綾（河北新報社防災・教育室）
天野　路子（河北新報社防災・教育室）
伊藤　純子（河北新報社防災・教育室）

ＮＩＥ実践報告書＜第 30 号＞
平成 31 年 3 月発行

編　集　宮城県ＮＩＥ推進委員会
発　行　宮城県ＮＩＥ委員会
事務局　宮城県ＮＩＥ委員会事務局
仙台市青葉区五橋一丁目 2-28
（河北新報社内）
TEL. 022-211-1331
FAX. 022-211-1339
印　刷　東北紙工株式会社
仙台市若林区中倉 1-13-1
TEL. 022-231-2141